

平成20年度

「地域と学校をむすぶコーディネーターに関する調査研究」報告書

栃 木 県 総 合 教 育 セ ン タ ー

宇都宮大学生涯学習教育研究センター

はじめに

近年、少子高齢化、核家族化、地域における人間関係の希薄化などにより、家庭や地域における教育力が低下していることが指摘されています。このような状況の中、子どもたちの学力向上・健全育成を目指して、学校教育や生涯学習の推進のための諸改革が進められています。平成20年2月には、中央教育審議会が、「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」(答申)において、今後の生涯学習の振興方策の目指すべき施策の方向性として、「社会全体の教育力の向上」を掲げ、学校、家庭、地域の連携を重視しています。また答申は、地域社会の教育力の向上のためには、家庭や地域の教育力と学校教育の効果的な連携の視点が大切であり、学校を拠点に地域ぐるみで子どもの教育を行う環境づくりに、社会全体で取り組む必要性を示しています。

平成18年12月の教育基本法改正を経て、平成20年7月に策定された教育振興基本計画では、「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」の基本的方針1に「社会全体で教育の向上に取り組む」とし、その具体として「①学校・家庭・地域の連携・協力を強化し、社会全体の教育力を向上させる」とあります。主な取組として、「広く全国の中学校区で『学校支援地域本部』など、地域ぐるみで学校を支援し子どもたちをはぐくむ活動を推進する」とあげられています。

栃木県では、とちぎ教育振興ビジョン(二期計画)において、「生きがいとうるおいに満ちた生涯学習社会の実現」を柱として、地域の教育力を高め子どもたちを豊かにはぐくむと共に、生涯学習社会の構築に向け、学校・家庭・地域社会が連携協力し、地域における教育を総合的に推進するための体制整備を図っています。

栃木県総合教育センターと、宇都宮大学生涯学習教育研究センターでは共同研究体制の元、平成17年度に「学校支援ボランティアに関する調査研究」、平成18年度に「社会教育主事有資格教員の活動に関する調査研究」、平成19年度には「公民館と学校の連携に関する事例調査研究」を行い、これらの研究をとおして、地域と学校の連携を効果的に行うことのできるコーディネーションの体制整備やコーディネーターの重要性を確認してきました。

地域には様々な施設、団体、企業、地域住民等が存在しています。それぞれの特色を生かし地域の教育力として学校とつながるためには、地域の実情に精通したコーディネーターが必要となってきます。そこで、地域と学校の連携の充実・促進のためにすぐれたコーディネーションを行っている県内外の事例から、コーディネーションの現状を調査し、効果的な体制整備やコーディネーターの在り方などについて本報告書を作成しました。

学校支援地域本部をはじめとする地域における教育関係者の皆様が、それぞれの実情に応じて活用していただければ幸いです。

平成21年3月

栃木県総合教育センター所長

宇都宮大学生涯学習教育研究センター長

鈴木 健一

塚本 純

目 次

I	調査研究の背景と目的	1
II	調査研究の方法等	2
1	調査方法と内容	
(1)	団体アンケート	
(2)	団体ヒアリング	
(3)	コーディネーターアンケート	
2	調査期間等	
III	調査結果と分析・考察	3
1	団体アンケート調査結果と分析・考察	
(1)	組織・コーディネーター	
(2)	コーディネートの成果	
(3)	コーディネーターとしての活動上の課題	
(4)	団体アンケート調査の分析・考察	
2	団体ヒアリング	
(1)	宇都宮市立清原南小学校支援地域本部	20
(2)	狭山市学校支援ボランティアセンター	24
(3)	あおば学校支援ネットワーク	28
(4)	NPO法人夢育支援ネットワーク	32
3	コーディネーターアンケート調査結果と分析・考察	36
(1)	コーディネーターについて	
(2)	活動の実際	
(3)	コーディネーター回答一覧（栃木県・青森県）	
(4)	コーディネーターに関する調査結果について	
(5)	まとめと考察	
IV	提言	54
V	参考資料	
1	団体アンケート調査票	57
2	コーディネーターアンケート調査票	59

I 調査研究の背景と目的

平成 18 年の教育基本法の改正にともない、その第 13 条では「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」が新たに規定され、子どもの教育責任を学校、家庭、地域社会で分担し、相互の連携に努めることが定められた。これを受けて平成 20 年に社会教育法の一部が改正され、第 3 条に国及び地方公共団体の任務として「社会教育が学校教育及び家庭教育との密接な関連性を有することにかんがみ、学校教育との連携の確保に努め、及び家庭教育の向上に資することとなるよう必要な配慮をするとともに、学校、家庭及び地域住民その他の関係者相互間の連携及び協力の促進に資することとなるよう努めるものとする。」とされ、さらに第 9 条では「社会教育主事は、学校が社会教育関係団体、地域住民その他の関係者の協力を得て教育活動を行う場合には、その求めに応じて、必要な助言を行うことができる。」とされている。これは社会教育行政が積極的に学校支援を行うことの法的根拠を示している。また、平成 20 年 3 月告示の新学習指導要領総則の「第 4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において「学校がその目的を達成するため、地域や学校の実態に応じ、家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること」と明記された。この法理念を具現化させる方策として文部科学省では平成 20 年度から「学校支援地域本部事業」を開始した。

さらに平成 20 年 2 月に出された中教審答申の中で、目指すべき施策の方向性の一つとして、「社会全体の教育力の向上」が打ち出されている。そこでは改正教育基本法を受け、学校、家庭、地域の連携を特に重視している。また答申は、地域社会の教育力の向上のためには家庭や地域の教育力と学校教育等の効果的な連携の視点が大切であり、学校を拠点に地域ぐるみで子どもの教育を行う環境づくりに社会全体で取り組む必要性を示している。

このように家庭・学校・地域の連携は、法的根拠を持つと同時に中教審が示した日本の教育政策の重要な柱となっていることが理解できる。

とくにこの連携に関する事業では、地域と学校がどのように関係を取り結び、教育効果の実をあげていくかは、コーディネーションという営みが大きなキーポイントとなる。事実、学校支援地域本部事業においても地域コーディネーターの配置がその事業の中核に据えられている。つまり、コーディネーターの在り方を丁寧に検討していくことは、家庭・学校・地域の連携の効果的推進には欠かすことのできないものであることがわかる。

さらにここ数年、栃木県総合教育センターと宇都宮大学生涯学習教育研究センターでは、継続的に地域と学校の連携の視点から共同で調査研究を重ねている。平成 17 年度「学校支援ボランティアに関する調査研究」、平成 18 年度「社会教育主事有資格教員の活動に関する調査研究」、平成 19 年度「公民館と学校の連携に関する事例調査研究」など学校と地域を媒介するコーディネーションの多様な在り方についての調査研究を継続し、地域と学校の連携を効果的に行うことのできるコーディネーションの体制整備やコーディネーターの重要性を改めて実証的に確認することができた。そこでこうした研究成果の蓄積の上に立って、今年度は、県内各学校に配置された地域コーディネーターや県内外の学校支援ボランティアコーディネーター組織の調査研究を通じて、コーディネーターとしての活動内容、課題や展望などを調査し、分析することによって、栃木県における効果的なコーディネーションの体制整備やその在り方について考察し、具体的な方策を提言することを目的とする。

Ⅱ 調査研究の方法等

1 調査方法と内容

調査については、以下3つの調査を実施した。

(1) 団体アンケート（県内13、県外19 計32団体）

①対象

ここでは、主として学校支援地域本部の設置に先だって学校支援ボランティア活動が展開され、そのためのコーディネーションが何らかの形で行われている団体（学校支援ボランティアコーディネーターの会、その他コーディネーターを配置している学校や事業等の組織）に対して、アンケート調査を行った。

サンプルは両センターがこれまで収集したデータ及びHPなどから検索して得たものである。

②内容

A 組織

組織について設置年や会員数、目的を、コーディネーターについて人数や主な経歴、活動拠点、専用の部屋の有無などを調査した。

B コーディネーションの実際

コーディネーションについて、具体的な活動内容、コーディネーションの動き、コーディネーターとした活動内容、行政とのかかわり、活動上の留意点、成果と課題を調査した。

(2) 団体ヒアリング(4団体)

①方法 アンケート調査の結果、特徴的な団体をいくつか選択し、聴き取り調査を行った。

②内容 コーディネーションの動きを中心に、特徴的な内容と留意点と成果や課題。

(3) コーディネーターアンケート（栃木県：95名 青森県：62名）

学校支援地域本部事業が平成20年度から実施されたことにともない、栃木県と青森県で学校支援地域本部事業のコーディネーターに(1)とほぼ同様な調査項目でアンケート調査を実施した。

2 調査期間等

調査期間は、平成20年5月～平成21年3月とし、以下のように実施した。

○事例収集 平成20年6月～9月

○アンケート調査 平成20年10月～12月

○事例の分析・検討 平成20年12月～平成21年1月

○ヒアリング調査 平成21年2月

また、本研究は、宇都宮大学生涯学習教育研究センターと栃木県総合教育センター生涯学習部の共同により実施した。

Ⅲ 調査結果と分析・考察

1 団体アンケート調査結果と分析・考察

アンケート調査は 32 団体に対して調査票（V 参考資料 57 頁～ 58 頁）を依頼し、回答を求めた。調査は「A 組織」「B コーディネーションの実際」の区分にわけ調査した。

(1) 組織・コーディネーター

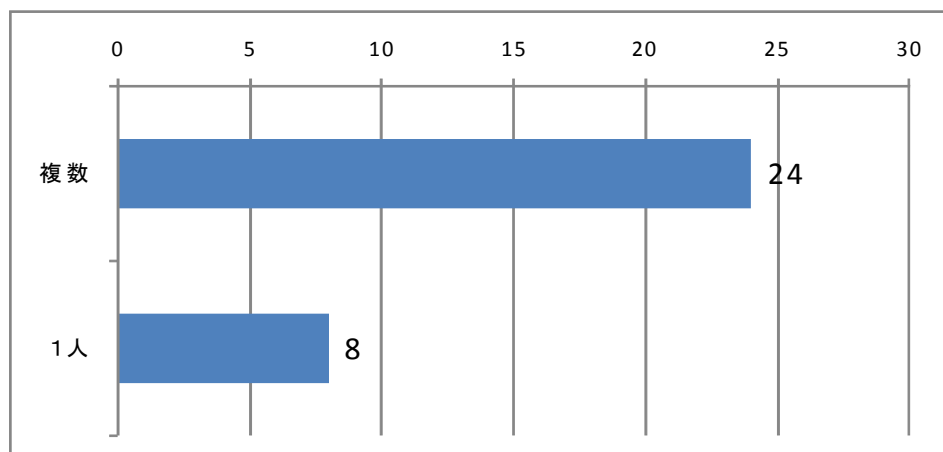
A 組織 ① 団体一覧

県内の団体		設置年	会員数
1	宇都宮市立清原南小学校支援地域本部（魅力ある学校づくり地域協議会）	平成 19 年	30 名
2	宇都宮市立児宝小学校支援地域本部（魅力ある学校づくり地域協議会）	18 年	13 名
3	宇都宮市立西原小学校サポーター会議	18 年	20 名
4	宇都宮市立陽光宮っ子ステーション放課後子ども教室	19 年	約 70 名
5	大平町学校支援ボランティアコーディネーターの会「クローバー」	17 年	7 名
6	小山市学校と地域を結ぶ担当者会議	11 年	54 名
7	鹿沼市立石川小学校区学社融合推進会議	8 年	40 名
8	鹿沼市北光クラブ（鹿沼市北小学校）	12 年	150 名
9	さくら市地域と学校を結ぶコーディネーター	17 年	16 名
10	佐野市立葛生小学校区放課後子ども教室	19 年	24 名
11	下野市生涯学習ボランティアコーディネーター連絡会	18 年	26 名
12	高根沢町立阿久津中学校学校支援ボランティア	15 年	35 名
13	益子町学校支援ボランティアコーディネーター懇談会	19 年	4 名
県外の団体			
14	帯広市立啓北小学校区地域ネットワーク委員会	19 年	21 名
15	八戸市立明治小学校区学校支援地域本部	20 年	9 名
16	大手ゆめ空間（上越市立大手町小学校内）	11 年	24 名
17	小千谷市立小千谷小学校ボランティアコーディネーター	12 年	5 名
18	新潟市立坂井東小学校地域と学校パートナーシップ事業	19 年	119 名
19	中野区立沼袋小学校	15 年	25 名
20	NPO 法人夢育支援ネット ワーク	15 年	約 120 名
21	足立区立五反野小学校開かれた学校づくり協議会 のびのびスクール	7 年	約 200 名
22	木更津市学校支援ボランティア活動推進事業	10 年	1954 名
23	横浜市あおば学校支援ネットワーク	17 年	23 名
24	狭山市学校支援ボランティアセンター	19 年	20 名
25	上尾市立上尾小学校学校応援団	19 年	約 800 名
26	湯河原町立吉浜小学校学校支援ボランティア	20 年	50 名
27	滋賀県学校と地域を結ぶコーディネート担当者	14 年	397 名
28	草津市地域協働合校	10 年	草津市民
29	岡山市学校支援ボランティア	14 年	1 名
30	柳井市学校支援ボランティア活動推進事業	14 年	約 900 名
31	下関市生野あそぼう会	3 年	65 名
32	ふくおか高齢者はつらつ活動拠点事業	19 年	約 5500 名

会員数については団体の会員数であり、コーディネーター数とは必ずしも一致しない。

② コーディネーター

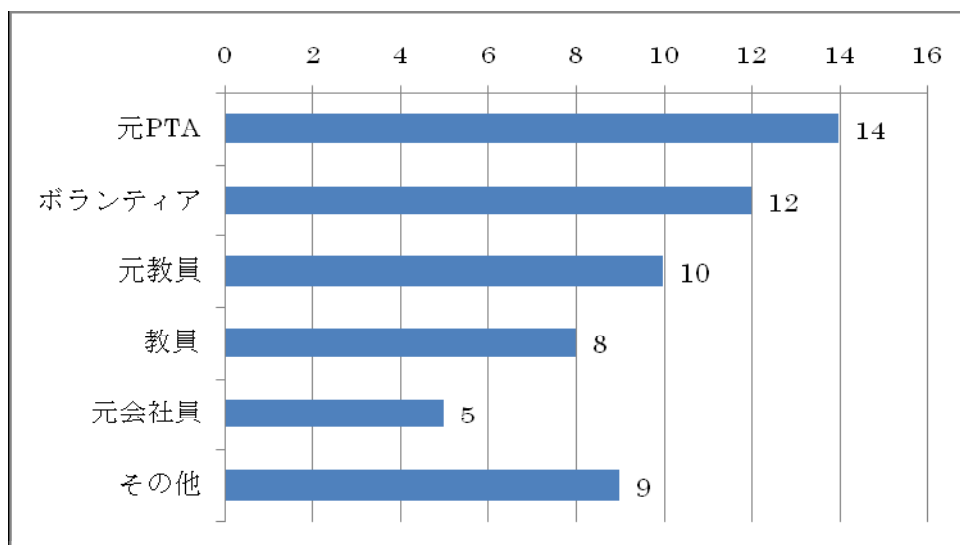
a コーディネーターの人数



コーディネーターが2人以上の複数配置が24団体、1人が8団体であった。複数配置が圧倒的に多く、コーディネーターというよりもコーディネーショングループによるコーディネートが行われている可能性を示唆する。複数配置のうち、8団体は県や市の施策として実施されている事例で団体として複数のコーディネーターはいるが、各学校で活動している人数は不特定となっている。

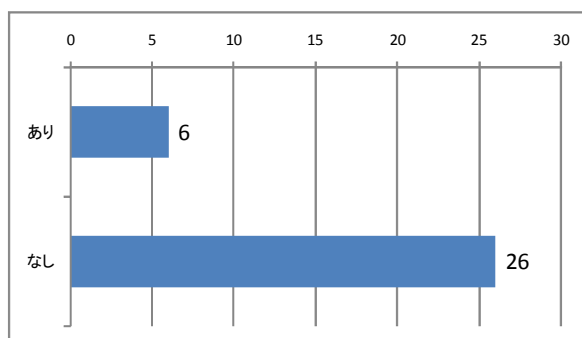
b コーディネーターの経歴

(実数)

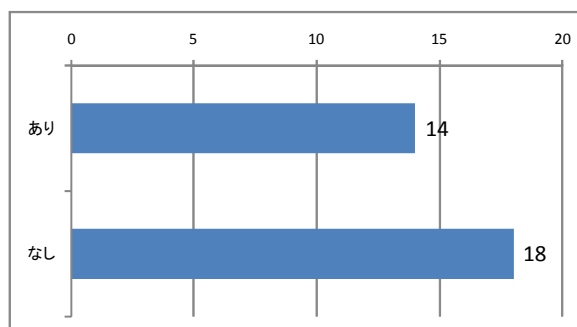


コーディネーターに「元PTA役員」がいるのは32団体中14団体、「ボランティア」がいる団体は12団体、「元教員」がいる団体は10団体、「教員」がいる団体は8団体、「元会社員」がいる団体は5団体の順であった。現職と元職を含めると教員の割合が高く、元PTA役員と共に、学校に何らかのかかわりのある人々の中からコーディネーターが配置されていることがわかる。したがってコーディネーターには、ボランティアよりも「学校」を理解している人材が求められていることがわかる。

c コーディネーターの配置状況



d コーディネーターの部屋



コーディネーターの配置状況であるが、常駐しているのは6団体であり、2割弱である。ほとんどが週1～2回程度あるいは必要に応じて学校に出かけてコーディネートしている。常駐が必要なほどのニーズとシーズが十分ではない状況にあることがわかる。

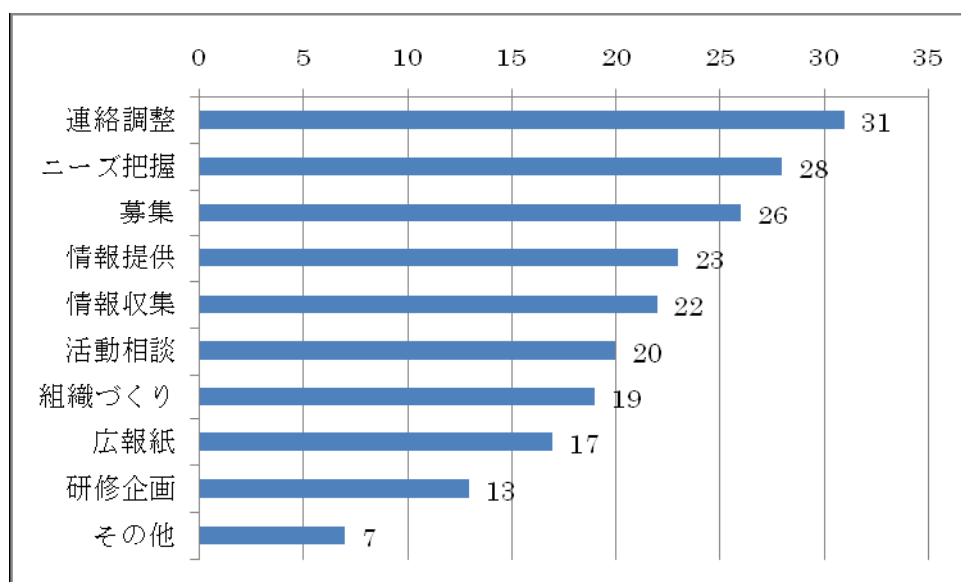
次にコーディネーターの部屋であるが、専用の部屋を持っているのは、32団体中14団体であった。ほぼ半数で専用、あるいは活動の場所が確定していることがわかる。コーディネーターが来校しても居場所が確定していることになる。ただし、専用と言ってもPTA室や使用頻度の低い部屋を兼用で使用する事例がほとんどである。コーディネーションといっても必要なのは打合せをする会議用のスペースなのであり、専用の部屋が不可欠という訳ではない。

このようにコーディネーションは学校や団体、あるいはその量や質によって必要な条件が大きく異なることがわかる。

B票 コーディネーションの実際

①、③、④は調査票の選択肢のある調査項目である。⑥の「成果と課題」については(2)「コーディネート成果」(3)「コーディネーターとしての活動上の課題」としてそれぞれ示した。

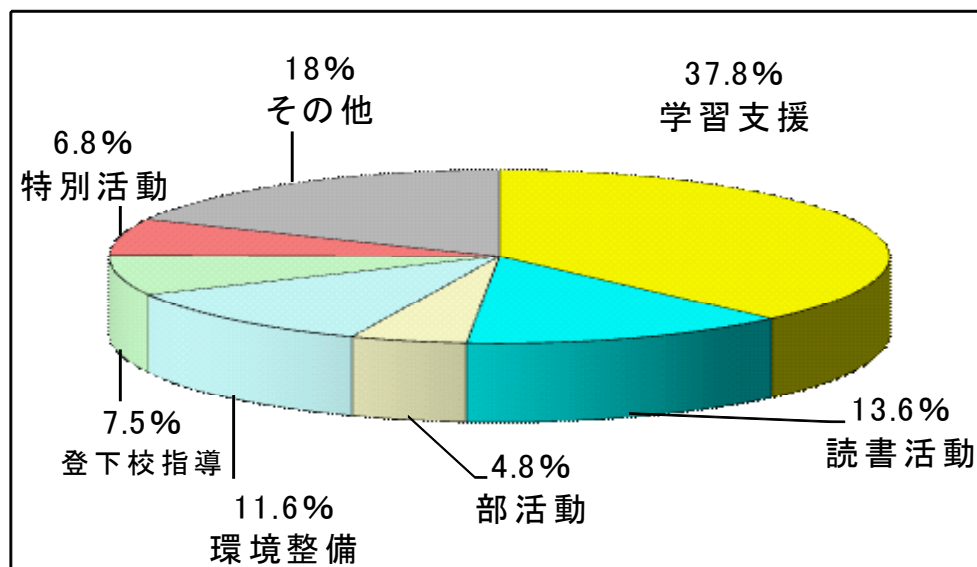
① 具体的な活動



コーディネーターの具体的な活動として「連絡調整」が31団体、「ニーズの把握」が28団体、「ボランティアの募集」が26団体、「情報提供」が23団体、「情報収集」が22団体、「活動相談」が20団体、「組織づくり」が19団体、「広報紙作成」が17団体、「研修の企画」が13団体であった。

コーディネーターの基本的な職務(初期の段階)が学校側のニーズを把握しつつ、ボランティアを募集し、どのように活動を展開するのかの打合せを行うことにあることがわかる。団体によっては、組織化、広報、研修と言った次の段階に移行していることわかる。

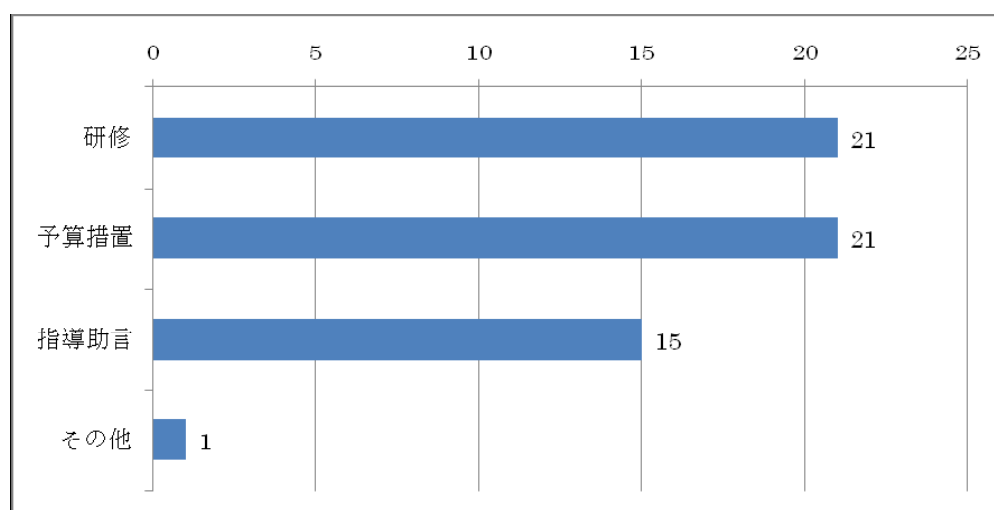
③ コーディネートした活動内容



コーディネーターがコーディネートした活動内容は、「学習支援」37.8%、「読書活動」が13.6%、「環境整備」が11.6%の順であった。学習支援、読書活動、特別活動、部活動などの直接学校の教育活動に対する支援活動が63%であり、半数以上を占めている。学校支援ボランティア活動の半数以上が直接学校教育活動の支援にあることがわかる。

その他として、放課後の居場所づくりや土日の体験活動、昼休みの体験活動等をコーディネートしたという回答があった。

④ 行政とのかかわり



行政とのかかわりは圧倒的に、研修と予算に集約されている。次いで社会教育主事等の指導助言がある。

(2) コーディネートの成果

自由記述である「成果と課題」は、それぞれ分類して特徴的な要素別に示した。

(特にコーディネーションの成果が見られるものに※印をつけた。)

①子どもにとっての成果

a 学習効果の向上 (※)

○体験活動等への結びつき

- ・総合的な学習の時間など様々な体験活動や交流活動へと結びついた。
- ・読書への取組がよくなった。
- ・総合的な学習、道徳、生活科などで地域の方が入ることにより、豊かな体験ができた。
- ・コーディネーターがいるということで、人材・教材の面での充実を図ることができその結果体験的な学習が組み入れやすくなった。

○学習の広がり

- ・教職員では持ち得ない知識や技能を学ぶことができる。
- ・授業補助の中で専門的な知識・技能を持つ方の補助が得られる。
- ・担任だけでは目の届かない低学年のパートごとの器楽演奏指導をボランティアにお願いしたところ、子どもたちも楽しく真剣に取り組み、立派な成果をあげることができた。
- ・ゲストティーチャーとして、または補助として学習にかかわってくださったりすることで、授業改善が図られ子どものモチベーションが上がり、学習の効率が高まった。
- ・保護者の授業協力は教員とはまたひとあじ違った感覚で授業が受けられていると思う。
- ・先生や親たちが伝えられないことが地域の人からの指導で身につけている。

b 豊かな体験と人間関係の構築

○豊かな土日の体験

- ・土日の時間の有効活用や学校外活動の充実により、子どもたちの体験活動が豊かになった。
また学校が取り組んでいる課題などを課外活動にも取り入れ、学校教育との連携を図ることにより、子ども達にとって一貫した趣旨の活動となっている。
- ・参加児童が土曜日の午前中を有意義に過ごせるようになった。

○地域の人との交流

- ・転校してきたばかりの子や不登校の子どもが地域の活動に参加することによって元気になったり、不登校を脱したりした。
- ・近所のおじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんとも顔見知りとなり親しくあいさつを交わすようになった。
- ・あいさつばかりでなく、地域の人と会話ができるようになった。
- ・学校以外にも地域に先生がいることに気づいている。
- ・子どもたちのコミュニケーション能力が低下している実態からも地域の方との交流は重要であると思われる。

○人間性の広がり

- ・子どもは親、教員以外の大人との交流により緊張感や安心感が得られ社会力、人間力を高めることができる。
- ・子どもたちが生きたボランティアの姿を目のあたりにし、自分の人生に生かすことができる。
- ・子どもたちが異世代の人と接して、視野、人間性が膨らんでいる。
- ・大人に接することにより今後の生き方に影響を与えられる。
- ・子どもたちは身近に自分たちを支えてくれる大人がたくさんいることに安心感をもち、地域の大人をモデルに育っている。
- ・児童生徒の規範意識が向上している。

- ・子どもたちの気持ちが豊かな様子が感じられる。
- ・子どもたちがいきいきと活動している。

c 安心・安全の確保

- ・児童生徒の通学または帰宅後の安全安心が守られている。
- ・校内・校外の安全指導が受けられる。
- ・登下校時は高齢の方が見守ってくれている。
- ・新一年生の登下校指導がきめ細かく実施できた。
- ・待機型なので、下校時の安全を確保できた。

d 評価の拡大

- ・地域の人にほめてもらえることで、子どもの自信につながり教育効果が大きい。
- ・様々な活動で普段見られない生徒のよさが発見できる。
- ・先生方も子どもたちとかかわりがもてる様子が増えてきたことで、余裕をもって子どもたちを見られると思われる。

②学校にとっての成果

a 授業の充実

- ・地域の方々の専門性により、教員も子どもも新たな「学び」があった。
- ・授業中、特に作業を伴う内容において児童全体の足並みがそろいやすくなった。
- ・授業の補助をしてもらうことにより、多くの子ども達に目が届き指導してあげられた。
- ・先生も地域の経験豊富な人に接することで緊張感を持ち、良い刺激となっているようである。
- ・地域の教育力を使うことにより、孫悟空の分身の術が使える。

b 教員の負担減（※）

- ・これまで、副校長や教務主任がしていた接待やプリントの印刷配布がなくなり、他の時間に使えるようになった。
- ・教員が人材を見つけたり交渉する時間を短縮したりできて、教員の教材研究、児童理解の時間を確保できる。
- ・教職員が一層本来の教育活動に専念できるようになった。
- ・これまで副校長が行ってきた防犯ボランティアとの連絡調整を引き受けたため、副校長の事務量の軽減が図られた。
- ・子どもは少人数化していても教員にかかる負担はかなりあると思われるが、ある程度の授業の協力ができていると思われる。

c 開かれた学校づくり（※）

- ・保護者が学校に入ることへの抵抗感がなくなった。
- ・子どもたちの成長にかかわっていただける大人が、学校外にたくさんいてくれることはありがたく、学校を応援していただける雰囲気ができた。
- ・学校の垣根が低くなり、学校が開かれてきた。
- ・多様な特色ある教育活動が増加した。

③地域にとっての成果

a 自己実現と意識の変化

- ・ボランティアの方々が日頃から自分たちの活動の成果を発表する場として大変喜んでいる。
- ・活動の中でボランティア自身が自己実現を図り、生涯学習の場となっている。
- ・ボランティアと児童の交流が図られ、ボランティアが生徒に親しみを感じるようになった。
- ・子どもたちとふれあうことにより、学校とのつながりもでき生きがいづくりになった。
- ・子どもたちから元気もらいシニアの活性化につながっている。
- ・それぞれの専門性を子どもたちに分かりやすく説明するための工夫を凝らすことにより、自らの学習も深まった。

- ・子どもたちに接することが活力につながっている。
- ・ボランティアを行うことの「喜び」「楽しみ」がより深いものとなった。
- ・保護者が学校理解から支援へ意識が変わってきた。
- ・初めの一步がなかなか踏み出せなかった保護者が、ボランティア同士の声かけにより来校するようになり、楽しみながら活動するようになった。
- ・学校は本来地域のものだという認識を得て、サポーターからオーナーへ市民の意識が向上した。
- ・地域の方が自分たちの地域の学校という意識を強く持ち、活動に自主的に参加している。
- ・子どもたちにかかわることの重要性を一人ひとりが考えて、協力していただけるようになった。

b 地域の教育力の向上（※）

- ・子どもを支援しながら一緒に学んでいる。
- ・PTAのOBがもう一度学校へ参画できる機会を提供できた。
- ・PTA活動が盛んになってきた。
- ・保護者がスタッフとして参加することになり、責任ある立場に立つことで力をつけている。
- ・子どもと大人がともに活動することにより、顔と顔がつながり関係が深まるとともに、地域の方から「地域で子どもを見守り、育てる」といった意識が生まれ、積極的に子どもに関わっていただけるようになった。

c 地域の活性化（※）

- ・保護者自身の社会性を育て仲間づくりをする役割を果たしている。
- ・保護者は地域の方とかかわりあえるよいきっかけになった。参加することで子どもの様子も見ることができた。
- ・PTAと地域の連携がスムーズにいつている。
- ・人と人との交流が進み、地域内の住民のつながりが広がっている。
- ・地域の教育力を子どもの学習支援に生かすことが、地域の活性化につながっている。
- ・学校以外の活動でも、この学校支援ボランティアを核としたネットワークが生かされている。
- ・学校で出会った地域の大人が地域活動の様々なところで、コミュニティを作って活動している。

④その他（※）

- ・ボランティアの活動中に資質を見て、内容に応じて声かけがしやすくなった。
- ・ボランティア募集は応募用紙での回答は少ないが、直接声をかけると参加してくれることが多い。コーディネーターとして認識されてきた。
- ・「何かをしたい」と潜在的に考えている方と学校との橋渡しができ、地域ボランティアの方々と学校の関係を円滑に保つことができる。
- ・コーディネーターの存在を地域の中で確立することにより、より情報が収集できるようになった。

(3) コーディネーターとしての活動上の課題

①教職員の理解促進

- ・信頼関係を築いた教員が転出し常にその努力が求められる。
- ・学校による意識の温度差がある。
- ・学校側からの発信が少ない。
- ・教員の意識改革ができる研修の充実を図りたい。
- ・毎年担当が変わるところは意識が浸透しにくい。

- ・小学校と比較し、中学校の活動がやや活発さに欠ける。

②打合せの時間の確保

- ・先生が忙しく話し合う時間がとれない。
- ・担当教員と打合せをする時間が確保しにくい、短時間に授業内容を聞き取り、支援事項をまとめた資料を作成していたが、効果的であったかどうか今後も検討していきたい。
- ・打合せの時間がとれず、役割などの計画がうまくたてられない。

③ボランティアの確保

- ・子どもの保護者にも活動アドバイザーとして参加を呼びかけている。
- ・会員数がなかなか増えない。
- ・7年目の事業になるがボランティアの方の高齢化が進み、若い人の登録がなかなかない。
- ・ボランティアが不足しないようにいろいろな世代のボランティアを探していきたい。
- ・協力できる参加者が少なくなった。共働きで仕事をする母親が多くなったため、活動に協力できる時間などが限られてしまっている。
- ・ボランティアを増やしていきたい。
- ・教科の補助、特別支援学級での補助について要請は多いが、なかなか応募が少ない。
- ・広報紙などでボランティアを募集しているが、更にニーズに合ったボランティアを募るため広報の工夫が必要である。
- ・高齢者が指導できる内容のリストを学校に配布したい。

④学校教育理解

- ・学習支援等の要望が出やすいように学習内容を把握し、話し合えるようにしていきたい。
- ・コーディネーターは学校教育を理解し、教員との人間関係づくりを推進していく。
- ・どの部分で支援を行うと効果的か考える必要がある。
- ・各学期、各月ごとに計画があがってくると探しやすい。

⑤コーディネーターの存在理解

- ・学校との関係にまだとまどうことがある。
- ・コーディネーターとして地域に認識してもらうまでに時間がかかる。
- ・コーディネーターの校内での位置づけや活動しやすい環境づくりをお願いしたい。
- ・自分たちの活動を理解してもらうためにどのような動きがよいか。

⑥活動の継続等

- ・コーディネーターの後継者がなかなか見つからない。
- ・より充実した体制を模索し、活動資金的にも自立した団体として学校・地域・行政の信頼に応えることを目指したい。
- ・市から認められた活動なので動きやすくなった。全く無償であれば現在どおりの動きは難しくなるかもしれない。
- ・コーディネーターは、ボランティアと学校とが対等で「協働」できる関係になるため、お互いの悩みやとまどいを両者の間に入って解決するのが与えられた役割で、このためにいかに信頼感、人間的なつながりを持って両者の思いや狙いを受け止め、教育支援活動を盛り上げていくかであり、このような素養を持った人材の拡充と育成が大きな課題である。
- ・コーディネーターに必要な経費等の予算化と研修の充実が必要である。
- ・仕事をもっている人が多く、コーディネートする時間の確保が難しい。
- ・連携をより深めていくための時間確保が難しい実態がある中、学習プログラムのマンネリ化を防ぐために、新たな人材や教材など教育資源の発掘・開発が必要である。そのためには情報等のネットワークの充実が必要である。
- ・学校教育課と社会教育課の連携。

(4) 団体アンケート調査の分析・考察

アンケート調査で「A 組織」「B コーディネーションの実際」の区分で調査した結果を
にし、ここでは、①組織について ②コーディネート成果 ③コーディネーターとしての
課題に分けて考察をすすめた。そして最後にまとめとして ④よりよいコーディネートに
向けて として考察結果を示した。

①組織について

団体の活動年数や会員数、目的、コーディネーターの人数や経歴などは多種多様であったが、
組織がつくられた経緯や行政とのかかわりによって団体を大きく、事業受託、行政主導、民間
主導型の3つの類型（モデル）に分類することができた。

a 事業受託モデル

国や県・市町の事業の受託団体であり、例えば学校支援地域本部事業を推進している地域協
議会などがこれにあたる。活動経験年数が比較的短く、ここ数年に設置された新しい団体が多
い。この種の団体ではコーディネーターの経歴として、直近の PTA 役員や元教員など学校のこ
とをよく理解している人が多い。学校が拠点なので校内に専用の部屋やデスクをもっているこ
とが多い。またこの事業の窓口が行政にあるため、研修や予算などで行政とのかかわりも強い
ことが特徴である。経験が浅いため、コーディネーションの仕組みを試行錯誤しながら形成し
つつある。活動を展開しながら柔軟に仕組みを作ることができるメリットもあり、コーディネ
ーターが中心となるケースや地域協議会が機能するケースなど学校や地域特性を生かした多様
な展開が可能である。本調査では、宇都宮市立清原南小学校地域協議会などである。

b 行政主導モデル

都道府県や市町の行政施策として実施しているボランティア活動推進事業や学校と地域をむ
すぶ担当者会議など、行政が施策として推進したり、行政が介在しながら、学校と既存の団体
とが協働で組織化したケースである。各種委員会が整備され、組織的で合理的なしくみが整っ
ているのが特徴である。教員やコーディネーターに対する研修や保険をはじめとする予算など
が当初から整備されている。各種委員会には必ず社会教育主事をはじめとする行政職員が介在
しており、コーディネーター活動をコーディネートしている。a のような国の事業としてではな
く、自治体の単独事業として実施しており、活動年数も比較的長く、経験が蓄積されており、
当該地域の学校では定着している。

本調査では、狭山市の事例がそれにあたる。青森県八戸市の学校支援ボランティアセンター
もほぼ同様のしくみをもっている。

c 民間主導モデル

行政が提供したボランティア養成講座の修了者や PTA 関係者による発意によって、市民が自
主的に学校支援ボランティアのコーディネーション組織を設立するケースである。

メンバーの学校経験は多様であるが、リーダーには PTA 役員などの経験者が見られる。主と
して主婦やリタイアした中高年男性等を中心とするメンバーによって構成されている。

それぞれの経験を生かした多様なボランティア活動を展開しているが、設立当初は行政によ
る組織的な支援をうけることが少ないため、試行錯誤を繰り返して経験を生かした合理的な仕

組みが作られている。同時にこの主の団体の特徴として、①自己研修・ふりかえりの仕組みが整備されていること。②放課後や土曜日といった学校外の子どもの活動をも展開していること。③学校支援を媒介として「まちづくり」の活動へと活動を拡張していること。をあげることができる。本調査では、三鷹市、横浜市青葉区の団体がそれにあたる。

d まとめ

■コーディネーションの在り方

コーディネーターの人数についてみると、2人以上の複数配置が全体で半数を占めており、複数のコーディネーターが学校内で活動していることが多かった。また学校側と地域側にコーディネーターがいてそれぞれの窓口となって活動している団体もあった。複数のコーディネーターがいると役割分担したり相談したりしながら推進できるので、コーディネーターの負担軽減につながっている。さらに窓口が明確になっており、円滑な連絡調整が可能である。結果としてコーディネーターが一人で仕切るのではなく、コーディネーターを中心とながらも、グループによるコーディネーションが最も効果を上げていることがわかる。

■コーディネーターの経歴

コーディネーターの経歴についてみると、学校のことをよく知っている人々である元 PTA 役員や教員などが多かった。また元会社員がコーディネーターである団体が5団体あったが、この中には退職された方が学校支援コーディネーター養成講座などを受講し、その後活動に向けて地域と学校をむすぶ活動推進のため結成した団体なども含まれている。民間団体では、学習成果が活用されてこうした活動に入るケースが多い。

■専用の部屋・デスク

コーディネーターが専用の部屋を持っているかどうかは学校の空き教室の有無にもかかわっていると思われるが、今回の調査では半数以下であった。専用の部屋があるとコーディネーターの活動場所が確保され、事務や相談などにおいて活動しやすい。コーディネーターの部屋は職員室の隣にあることも多く、学校側と連絡相談しやすい環境にある。職員室内にコーディネーターの机があってそこで活動しているコーディネーターもみられるが、学校の情報が集約される職員室に活動場所があることは、迅速な対応や職員からの連絡や相談が無くても対応可能なことも多く、守秘義務や教員の抵抗感などの課題がクリアされれば、最もコミュニケーションがとりやすい環境であるといえる。これと同様に学校にほぼ常駐することによって、タイムリーな相談や依頼が可能となり、活動の幅を広げることにつながる。

②コーディネートの成果

本調査では、コーディネーターが配置され、学校支援ボランティアが円滑に学校で活動できるようになると学校支援ボランティアの活動そのものの効果が高まることがわかった。コーディネーションの効果は、概ね次のようなものである。

a 教員の負担軽減

これまで教員自らが地域の人材を探し、打合せをして、実施してきたことを考えると教員の負担軽減を図ることができたこと。

b 学校支援ボランティア活動の拡充

これまでは「地域人材の活用・ゲストティーチャー」の範疇にしかなかったが、コーディネーションのしくみによってボランティアの活動の量と範囲が拡充できたこと。

c 提案型のボランティア活動

活動内容を学校教員だけでなく、コーディネーターやボランティア自身が考えて提案するようになり、豊かな活動内容となったこと。

d 地域の教育的風土の醸成（地域の教育力の向上）

これまで特定の少数の人々が地域人材として学校で支援を行ってきたが、多様な活動内容を保護者や地域住民に広範に募集することによって、より多くの地域住民が学校や児童生徒とかかわりを持つようになり、教育に対する関心が高まること。

e まちづくり・地域社会の活性化への効果

学校支援ボランティア間の連帯やつながりが形成され、まちづくりに貢献していること。

f 開かれた学校の促進

コーディネーターが頻繁に学校に出入りすることによって、「外部の人がいる」という教員の違和感を減少させ、学校が次第に地域に開放され、開かれた学校づくりに貢献すること。

g 学習成果の活用の促進

P T A、地域住民などがボランティア養成講座等で学んだ成果をコーディネーターの支援によって実際の活動につなげることができ、社会参加を促進することができること。

本調査ではコーディネーターの配置を含めたコーディネーションのしくみを学校が持つことによって、以上のような効果を確認することができたが、これらは取りも直さず、学校支援ボランティアの活動を十全に機能させる効果であるといえる。本調査では、コーディネートの効果をアンケート調査で検証したが、記述式回答の多くは学校支援ボランティアそのものの効果が回答されていた。すなわち、コーディネートのしくみは、学校支援ボランティアの効果を高めるのに有効であったと考えることができる。

同時に学校支援ボランティア、学校支援地域本部という名称を用いているが、実際のコーディネーターからの聴き取り調査によれば、学校に協力的な地域であれば活動が円滑となり、人材を探すのに苦労しないということであった。いわば、学校支援を媒介とした地域の教育力の掘り起こしであり、子どもの教育に責任を持つまちに変えていく（まちづくり）ことに向かうのである。そのことは、民間主導モデルの団体がいずれもまちづくり事業の受託も同時に行っていることに象徴されている。

③コーディネーターとしての課題

■教員の意識

コーディネーターが活動する上での課題として回答が多かったのは、「教員の意識」があげられていた。具体的には「教員からの発信が少ない」、「毎年教員の地域担当者が変わるところは学校支援ボランティアに対する理解が浸透しない」、「担当者以外の教員に関心が薄い」などの回答が多かった。こうした「教員の意識」の背景には、増大する事務的处理、保護者からの多様なニーズの増大への対処、児童生徒の多様化への対応（生活指導の増大）など教員を取り巻く環境に大きな課題がある。

こうした環境の中で「地域住民と協働で子どもを育成する意識を涵養する」といってもリアリティに欠けると言わざるを得ない。ではどのようにしたらこうした意識が涵養されるのであろうか。いくつか具体的な方策を提言しておくこととしたい。

a 教員の多忙化を軽減するボランティア活動の展開

鹿沼市立北小学校などでは、これまで教員がしてきた自治体や団体が公募する夏休みの作文や絵画作品のコンテスト類の情報を、保護者のボランティアグループが一括して請負い、作品募集から発送、伝達までの一連の作業を担っている。これらは保護者グループからの提案による活動である。このように実際に教員自身の仕事にかかわるボランティア活動にふれることによって教員の意識が変革される可能性がある。

b 教員研修の充実（社会教育主事講習の受講）

栃木県教育委員会の施策として、各学校に社会教育主事の資格を持つ教員を配置するため、社会教育主事講習の受講があるが、社会教育主事の資格を取得する経験の中でこうした意識の変革の機会がある。高根沢町立阿久津中学校のように校内に社会教育主事有資格教員が複数いる場合などはこうした効果が組織的に現れやすい。

c 学校管理職のリーダーシップ

学校支援ボランティアの導入は、全ての教員の意識の変革まで待つことはできない。地域連携や学校支援ボランティアを校務分掌に位置づけることや、学年毎の担当を置くこと、あるいは学年主任の業務一覧に掲載することなどの他、年間指導計画での位置づけ、校内研修などと連動した組織的な対応が必要である。そのためには、学校管理職の強いリーダーシップが求められている。

d 社会教育主事有資格教員の活用

各学校に配置されつつある社会教育主事有資格教員は、最も学校支援ボランティアや地域連携を理解する教員でもある。こうした教員を担当者に配置したり、学校側のコーディネーターとしたり、校内研修でファシリテーターを担うなど校内で生かす工夫が必要である。ここ数年宇都宮大学や茨城大学で実施されている社会教育主事講習は、学校教員を主な対象として位置づけ、学校で生きる講習を実施しており、地域連携や学校支援ボランティアの受入れを重要なテーマとしている。

■ ボランティアの確保

ボランティア活動に参加する人口が減少する中で、学校支援を行うボランティアの確保は、大きな課題である。第一のターゲットは保護者である。専門的な知識を持つ人々ばかりではなく、「何か私にできることがあれば・・・」という人々に対するボランティア機会の提供がコーディネートのポイントである。子どもの前で学習指導を行うというイメージを大きく変えて、「一緒に活動をする」という活動範囲を示すことによって、新たなボランティア層を引き出すことができる。第二のターゲットは、リタイアした人々である。特に男性は専門的な知識や技術を生かしたいというニーズがあることから、それらのニーズをくみ取り、学校教育とのマッチングを進めていくことが大切である。

④よりよいコーディネーションに向けて ～今後に向けて～

調査からコーディネーションの成果とコーディネーターとしての課題を確認することができた。ここでは今後に向けて課題解決を含め、効果的なコーディネーションの体制整備とコーディネーターの在り方について具体的な事例を示しながら、a 学校との関係 b 地域との関係 c 行政との関係の視点から提案していきたい。

a 学校との関係

(ア)教職員とのコミュニケーション

コーディネーターは、できる限り定期的に学校を訪問し、休み時間や放課後などの時間をとらえて直接教員と会って話をする、自らも学校行事に参加して話をする機会をつくるなど、ボランティアを受け入れた教員や受け入れようとする教員と直接話をする必要がある。対話と共に、学校行事への参加など教員と共通の行動や経験を通じて、学校のニーズを把握することができる。単なる対話では、活動に結びつく方向には向かわない。そしてその量の確保が重要である。そのことによってお互いの理解を深め、信頼関係を築くことができる。そこでは、教員の話をもまず聴くこと、様々な愚痴や不満を受容することから始める必要がある。そうすることによって、学校や教員を理解することにつなげていくことができる。こうした経験を経てはじめて教員は安心して活動を依頼することができる。コーディネーターが下校時に学校に行き校舎から出てくる児童や教職員に声をかけ、雑談をしながら交流を深めたり、情報交換をしたりしているという事例がみられる。

新潟市立坂井東小学校の事例

市の事業の委託を受けコーディネーターが一名学校に配置されている。学校側からの提案を受けてコーディネーターが、校内の担当者と一緒に校内研修の企画運営を実施している。19年度には教員とコーディネーターの研修会を年3回、20年度には教員、コーディネーターの他にボランティア、社会教育施設職員、行政職員との研修会を3回実施した。研修会では現状報告と、参加者をグループに分けて成果や課題、今後に向けてというテーマでグループ協議を行った。パートナーとしてより相互理解と信頼を深めるためには、子どもを見守る大人たちが一堂に会し、顔を合わせる事が重要であるとの認識から、この研修が進められている。

坂井東小学校の事例が示すように、ボランティア、教員、保護者といった子どもを取り巻く大人の連帯をどのように作って行くのが、コーディネーションの柱となることがわかる。合同研修、懇談会、情報交換会、茶話会といったお互いの情報を交換し合う場を作り出すことが必要である。

(イ)教職員との連絡方法の工夫

学校側の窓口を明確にすることで、連携がしやすくなる。

高根沢町立阿久津中学校の事例

阿久津中学校では社会教育主事有資格教員が窓口になって地域との連携、学校支援ボランティアとのコミュニケーションを円滑に行っている。社会教育主事有資格教員のグループが担当し、学校側もボランティア側もそれぞれの活動ごとにチーフを決め、分担して連絡をとっている。年度当初に職員にボランティアについて説明し、学校側の要望を把握した後、ボランティアと担当職員の連絡会議を行い、年間活動計画を作成し活動を推進している。

社会教育主事有資格教員を校内で組織的に活用することが、学校支援ボランティアのコーディネーションを円滑に進めるポイントになる。学校側の窓口としての機能、校内の普及啓発、情報交換などボランティアグループのリーダーとグループでコーディネーションを進めることが阿久津中学校の事例から学ぶことができる。

その際、打合せの時間をどのように効率的に確保するのが、コーディネーションのポイントである。阿久津中学校ではメールを活用している。連絡メモなどを活用して打合せ時間を短縮している清原南小学校の事例も見られる。また、授業計画書などを活用して打合せの短縮を図っている事例もある。担任が予定の2週間前までに提出するボランティアの依頼書の中に、指導の流れとボランティアの役割を詳しく書くことによって打合せの時間を短縮したり、省略したりしている。

(ウ)年間活動計画の作成

計画を作成することはコーディネーターが学校教育を理解することの一つにつながる。

帯広市立啓北小学校の事例

年度当初学期ごとに月、学年、教科、内容を記載したボランティア年間活動計画を学校側が作成している。計画的に推進することで教員の意識も高めている。またこれによってコーディネーターも計画的にボランティアを募集したり、依頼したりすることができる。

ボランティア活動を含めた年間指導計画は、コーディネーションを計画的に進めることができる効果があるが、同時に教員の意識変革に大きな効果を発揮する。計画づくりは、担当教員とコーディネーターが一緒に作成することが理想である。学校から一方的に与えられる計画ではなく、コーディネーターやボランティア自身が計画づくりから参画することによって実効性の高い計画を作成することができる。

(エ)ボランティアのモラル

学校支援ボランティアを受け入れるということは、学校のボランティアに対する全面的な信頼が前提となっていることを確認しておく必要がある。この「善意」は学校自身が確認しようがなく、コーディネーターに委ねられているものと考えられる。暗黙の内にコーディネーターは、次のようなことが配慮されているものと考えられる。

■ボランティア自身が子どもにとって「安全」な人材であること

子どもの生命、健康にとって「安全」であることは当然である。学校が子どもが密集する場所であることから、伝染性の疾病に対する配慮が十分でなくてはならない。したがってボランティア自身の健康状態の確認も必要となる。その他に様々な意味で「安全」な人材であることに気を配る必要がある。

■犯罪、暴力、宗教活動、政治活動、商行為などの可能性のない人材であること

ただし、宗教家、政治家や商店経営者などがボランティアができないという意味ではない。活動中にこうした行為に及ばないことという意味である。これはコーディネーターだけで把握することに限界があることから、学校との情報交換を欠かすことはできない。ただし、ボランティアの人権は守られなくてはならない。

■学校の特性を理解しようとする人材であること

学校の教育方針や教員個人に対する批判や非難を、児童生徒の前で話すことがあってはならない。児童生徒の混乱とともに、学校の円滑な教育活動を妨げるものとなるからである。

確かに学校は発達段階によっては、一般の常識とはやや異なった指導方法が見られる場合がある。これらを安直に「学校は非常識」であると判断するのは早計である。様々な職業社会の中では、その中でしか通じない「常識」がその組織の規範を生み出すことさえある。その意味では「常識は一つではない」ことを理解しようとする人材が求められる。

■情報管理を理解する人材であること

学校支援ボランティアは、学校という特別な空間に入り込んで活動を展開することになる。学校は、児童生徒の様々な個人情報が集約されている場でもある。そしてそこには明確なルールが存在する。「学校で知り得た情報を外で話さない」というモラルは、学校支援ボランティアに必須の事項であろう。

特に保護者が関与する場合には、細やかな配慮が必要である。授業にかかわる場合はボランティアを自分の子どものいない学年の保護者に依頼することなどが工夫されている。

ボランティアを登録制にし、守秘義務違反の場合にはお断りするといった対応をしている事例もあった。学校で知り得た個人情報を守秘することは信頼を守る上で大切なことである。

b 地域との関係

(ア)地域住民とのコミュニケーション

学校へのかかわりと同様、地域住民（主として団体役員）とのコミュニケーションを心がけるということが重要である。そのために、できるだけ地域に直接足を運び、依頼をしたり打合せをしたりすることで信頼関係を築くようにする。コーディネーターが直接会うように心がける人々として、自治会町内会の役員、社会福祉協議会、青少年指導員協議会、ボランティア団体、子ども会育成会、過去の PTA 役員、ボランティアセンター、公民館や地区センターをはじめとする社会教育施設（特にボランティアを受け入れている施設）、地元の教育委員会の社会教育主事などの他「地域の人材情報に詳しい人」を探し出し、連絡をとり、相談にのってもらふことが必要である。

チラシを配布してボランティアを集めようとする姿勢だけではなく、人脈や電話、直接交渉が最も効果をあげている。直接本人と話をして依頼したら引き受けてくれたという事例も多い。

(イ) 広報活動の工夫について

チラシによる募集は、多くの人々に一括して情報を提供できる点で優れている。学校を支援したいと潜在的に思っている人々にとっては、活動の契機となるものである。方法としては「児童生徒に渡して保護者に周知する」「地域には回覧板を活用して周知する」「地域の団体の役員会等で配布する」ことなどが行われている。

新潟市立坂井東小学校では、次のような登録制度をつくっている。

新潟市立坂井東小学校の事例

ボランティア募集用紙は、年度当初に保護者、地域に配布する。地域には回覧板を使って配布している。用紙には活動内容、該当学年、おおよその実施予定月が記載してある。希望者は申し込んで登録する。ただし、登録しても予定であり必ず活動があるわけではないことを明記している。あくまで学校が中心となって依頼するものであることを理解してもらうようにしている。登録をした人の中に依頼され活動を楽しみに待っている人がいるので、こうした配慮が必要である。

一般的にみられるボランティアの募集であり、広く地域全体に周知する方法がとられている。ただし、注目すべきは「登録＝活動」ではないことが明記されていることである。

これはボランティア人材バンクの基本的な問題点である。登録はしてもらいが、依頼することはほとんどなく、ボランティアには登録させただけで、活動の場が提供されないという問題である。こうした依頼するあてもないのに人材バンクを作成するという安直な方法は選択されるべきではない。坂井東小学校はそうした危険性を予め回避しているしくみということができる。やはり必要なのは、コーディネーターが直接ネットワーク的に応じたボランティアを探し、あるいはボランティアからの提案を学校につなぐという方法が選択されるべきであり、登録制度はそれらを補完する素材に過ぎないのである。

また、募集につながる広報の方法としては、活動の様子を伝える「通信」「たより」といった広報紙の発行と配布である。ボランティアや子どもたちの声、教員の反応などを紹介することによって、地域住民の参加意欲を喚起する可能性が高まる。

(ウ) ボランティアとの関係

コーディネーターは、ボランティアと最も多くかかわることになる。ボランティアとコーディネーターとの関係は、以下のとおりである。

■ ボランティアを知る

何を求め、どのような気持ちをもって活動しようとしているのか、ボランティアとじっくり話をして、気持ちを受け止め、何ができるのか、何をしたいのか、どのようにしたいのかを丁寧に聴き取っていくことが必要である。単に所定の様式に記入した情報だけで学校とつないでいくことだけでは不十分である。最初是一緒に活動に参加したり、見守ったりといったきめ細やかな支援が必要な場合もある。

■ ボランティアに知らせる

学校のニーズや教員の気持ちなどをボランティアに伝えることと同時に、ボランティアの気持ちや意思を学校側に伝えることも重要な任務である。その上で活動終了後には子どもた

ちや教員の声、反応を知らせること、そのためには学校便りや学級通信、PTA 便りなどの広報媒体を入手しておくことが必要である。知らせるためには情報の収集を欠かすことができない。

■ ボランティアを育てる

ボランティアの研修だけでなく、活動が終わった後慰労の言葉をかけたり慰労の場を設定したりするなど、積極的に支援することでボランティア性が引き出され、コーディネーターとボランティアの良質な人間関係が構築される。特にボランティアが育つためには、研修会の開催だけでなく、活動後の反省会（ティータイム）などが重要である。そこでは、ボランティアが感想を話し合う中で、自分の活動をふりかえり、ボランティア自身で気づき、今度はこうしたいというような反省をして、次の活動の改善につながっていく。こうした活動のふりかえりの場を設定することがもっと効果的な研修なのである。

またコーディネーターが直接ボランティアを認め賞賛することで、ボランティアの意欲が喚起され、活動を継続するエネルギーとなる。横浜市のおおば学校支援ネットワークでは、次のような研修事業を行っている。

横浜市青葉区「おおば学校支援ネットワーク」の事例

この団体では自分たちが紹介したボランティアが各学校で活動するために、ボランティアの養成や研修を企画運営している。いくつかの講座を行っているが、その一つの「図書ボランティアフェスタ」は、各小中学校でおおば学校支援ネットワークが紹介した読書支援にかかわるボランティアを中心に、さらに区外の図書ボランティアも参加して実施した。

内容は、図書ボランティア間の情報交換や研修、活動事例の交流などで、受講者に好評を得た。「確かなボランティア」を自分たちコーディネーターが責任をもって紹介することで、各学校からのコーディネートへの依頼を増やし、地域の力を学校へ送り込むことを目的としている。

民間主導で行われるボランティアコーディネーター組織では、ボランティアの質を高めていくために、各種の研修会を開催すると共に、自らの定例の学習会を開催し、情報の交流に努めている。「確かなボランティア」とするためには、ボランティア間の情報や実践の交流を促進することが必要であり、そのことによってボランティアの質を高めていることがわかる。

c 行政との関係

コーディネーターと行政（都道府県・市町村）との関係は、研修と予算、指導助言に絞られている。特に研修については、約 7 割のコーディネーターが行政主催のコーディネーター研修会に参加している。本調査では、コーディネーター同士の情報交換がほしいという声もあり、コーディネーターは積極的に研修や情報交換会に参加し、コーディネーターとしてのスキルアップや情報の共有を行い、不安や悩みを取り除くことが大切である。そのために行政は情報交換の場を設置したり、情報を収集し提供するなどの支援が重要になってくる。

更にコーディネーターを支える行政側の窓口としては社会教育主事をあげることができる。社会教育主事には、地域の人材源情報、団体に関する情報などが集約されている。必要に応じて指導助言を求めるなど、コーディネーター側からのアプローチが必要である。

2 団体ヒアリング

(1) 宇都宮市立清原南小学校支援地域本部(魅力ある学校づくり地域協議会)

団体	事務局	住所 宇都宮市上籠谷町1401 (宇都宮市立清原南小学校内) TEL 028-667-0516		
	設置年	平成19年	会員数	30名
	目的	平成19年度に、学校・家庭・地域・企業が一体となって学校教育の充実と家庭や地域の教育力の向上に取り組む事業「魅力ある学校づくり地域協議会」を立ち上げた。平成20年度学校支援地域本部事業の委託を受け、地域に根ざした学校づくりを推進するとともに、地域と学校がともに協力し、心豊かでたくましい子どもを育てる。		
コーディネーター	人数	2名		
	主な経歴	1名は昨年度まで教員であり、当該校に勤務していた。もう1名は、平成18年度から本校で学校支援ボランティアとして活動していた。平成20年度に学校から市のコーディネーター養成講座を進められ受講し、その後コーディネーターとなり現在に至っている。		
	活動状況	3日/週 3時間/日	活動拠点	宇都宮市立清原南小学校職員室

コーディネーションの実際

○ボランティアの確保

現在延べ150名を超える地域住民が、学習支援や読み聞かせ、防犯などの分野で学校支援ボランティアとして登録されている。学校の(コーディネーターが作成したボランティア募集チラシ)多様なニーズに対応できるボランティアを確保するため、コーディネーターとしてボランティアの募集と地域人材の情報収集に努めている。

ボランティア募集については、既存のボランティアに加えて、新たに保護者の方々を中心に行っている。具体的には、コーディネーターが作成したボランティアティーチャーを募集する通知文を学校長名で保護者に配布した。

また、必要に応じてその都度依頼内容を具体的に示したボランティア募集のチラシをコーディネーターが作成し、学校を通して保護者に配布したり、知り合いを通じて地域の方々に配布しボランティアを募っている。地域内に該当者がいない場合は、市のボランティ

ボランティア大募集
ぜひお手伝いお願いします

絵の具コース
例: 画材費... コレに絵の具を色を付けます。
画用紙に貼る

ペーパーペンコース
作図や楽譜の書き込みなどに貼る
壁に貼る

工作コース
金銭を中心に、季節に合ったものを
作り置きします。

ランチルームコース
クイズも楽しく作る
→ ランチルームに貼る
掲示

高い壁トライコース
12階までの高い壁を登る。見えても
木や石にぶつかる。色を塗る

お知らせ欄
・ 東洋館の資料作り
コピート機を、台紙に貼り貼る
・ 先生の絵も、(見本を貼る)
・ 先生の絵も、(見本を貼る)

日時 9月29日(月)・30日(火) 9:00~12:00
場所 清原南小学校ランチルーム
持ち物 折り紙、はさみ、クレヨン、絵の具など必要と思われるものはお持ちください。(学校でも多少、用意できます。)

保護者氏名 _____ 連絡先 年 組 _____
TEL _____

〇市の先生で連絡先がわからない場合は、お電話ください。ご自宅の電話番号も
お願ひします。 清原南小学校 667-0516
〇9月19日(金)までにご連絡ください。

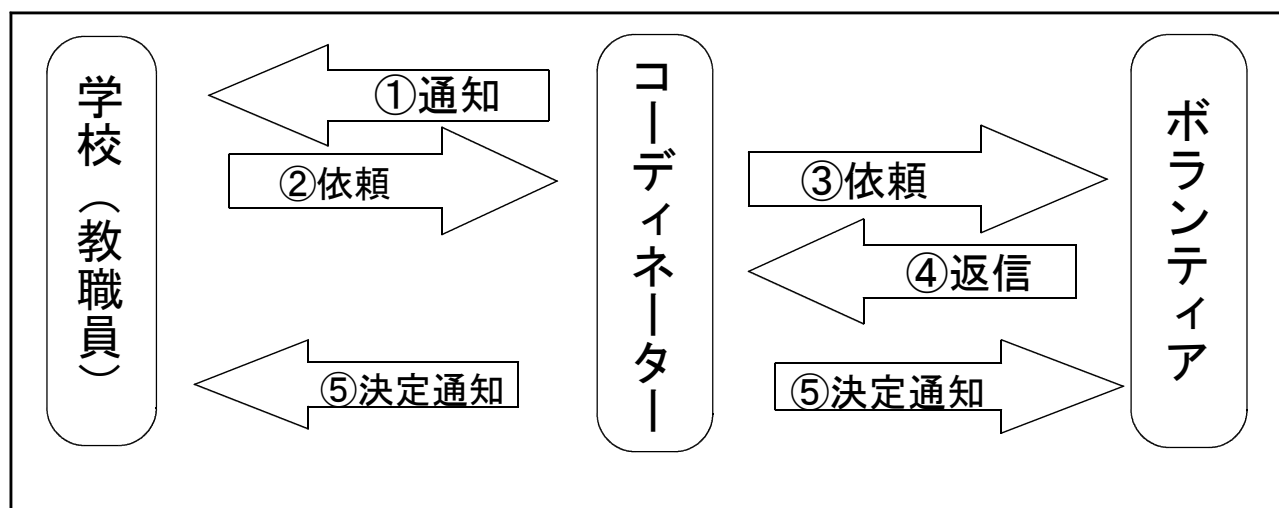
清原南地域協議会
地域コーディネーター

アバンク「街の先生」からボランティアを確保している。

情報収集については、「魅力ある学校づくり地域協議会」の会議において情報提供を呼びかけたり、ボランティアを集めた『茶話会』の場で、世間話をしながら地域の人材の情報を収集している。

○コーディネートの流れ

学校のニーズに対してボランティアを依頼し、支援を行うまでの基本的な流れはコーディネーターを中心に次のようになっている。



職員室がコーディネーターの活動場所となっており、（職員室で作業する地域コーディネーター）専用の机がある。コーディネーターはあらかじめ教職員に「ボランティアの予定・希望」の通知を渡しておく。教職員は必要に応じてボランティアの希望をコーディネーターに伝える。その際、「ボランティアの予定・希望」の通知を切り取ったメモをコーディネーターの机の上に置くだけで、直接希望内容を伝えなくても依頼できるようになっているため、負担も少ない。ただし、必要があるときは担当教職員と相談し、内容確認をする。（①・②）



教職員から依頼を受けたコーディネーターは、該当するボランティアに依頼内容（日時、内容等）を伝える「ボランティアティーチャーのお願い」の通知を出し、返信欄に支援の可否を記入した返却通知を受け取る。学校の希望や必要に応じて随時ボランティアの募集も行う。（③・④）

ボランティアからの返信をもとに、支援を依頼するボランティアが決定したら、再度ボランティアに決定の通知を出すとともに、支援を依頼した教職員へ決定したボランティアの名前を知らせるメモを渡す。（⑤）

ボランティアとの通知のやりとりは児童を通して行う。児童はボランティアが保護者の場合は子どもが、地域の方々の場合は近隣の児童が務める。

○コーディネートに使われる通知文

(ボランティアの予定・希望の通知)

ボランティアの予定・希望

これから授業にボランティアティーチャーを活用しませんか？
 協の手も借りたいような忙しさ、煩雑さの毎日、手が4本あったら便利です。
 日々の活動の中で、気軽にVTの力を借りましょう。

下記のような活動が考えられます。

学年	教科・領域	内 容
1年	全体	・ 学習の補助 ・ 日常生活の補助・・・指導助手さんの他にも 手が多いほうが良いのでは？
2年	全体	・ 学習の補助 ・ 日常生活の補助
3年	教科全体	・ 漢字・習字・計算・珠算・体育・総合的な学習・ 校外学習補助・その他
4年	国語・算数 体育・道徳・他	・ 漢字・計算・例えば道徳教材の資料作り ・ その他個人指導
5年	理科・体育 家庭・パソコン	・ 実験など補助 ・ ミシンの使い方や調理実習の補助
6年	理科・体育 家庭・パソコン	・ 実験など補助 ・ ミシンの使い方や調理実習の補助

○ この他にもいろいろな場面が考えられます。たくさん目で見つけたほうが良いと思われる内容、習熟や事故防止などからも、学校生活の中での活用をご検討ください。

○ ご希望に応じて、募集（学年で連絡しても結構です。）や連絡、対応など致します。

..... せ り と り せ ん

ボランティア希望 年 月 日 曜日 氏名
 または 月 日 日ごろ
 内容 (あれば、注意事項なども) 名 希望

年間の予定 月頃 の教科で 名 希望

教員へ配布するボランティア
の依頼を募る通知文(①・②)

(ボランティアティーチャーのお願い③・④)

ボランティア依
頼と都合の可否
を確認する通知

教員がコーディネーターに渡す
ボランティア依頼メモ

(教員へのボランティア決定通知)

*** ボランティアティーチャーにお願いしました

年 組 先生へ

月 日 ()	校時	場所
教科・領域	内容	V T

※ 日時を急に変更する必要がある時には、担任の方から連絡してください。

ボランティアティーチャーのお願い

連絡児童 年 組 先生 さん

月 日 () 校時 年 組 場所

教科 内容

お忙しいとは思いますが、ご都合はよろしいでしょうか？

返信の欄

.....

ボランティアティーチャー

連絡児童 年 組

月 日 () 校時 年 組 場所

教科領域 内容

○ 協力ありがとうございます。ご来校の際は、職員室に声をかけてください。
 記入欄が用意してあります。

○ VTの負担をお付けください。

教員とボランティア
に渡す決定通知(⑤)

○留意点

- ・ ボランティア予定者には、通知文で都合の確認をする必要があるため、余裕をもって連絡している。また、初めて活動するボランティアには、学校でボランティア活動する際の留意事項を記した「学校支援ボランティアとして」をもとに、学校の様子やボランティアとしてのマナーについて説明し、スムーズに活動に入れるようにする。活動当日も様子を見守るなどして支援する。
- ・ ボランティア活動終了後は、担当した教職員やボランティアから感想等を聞き、今後のコーディネートや支援活動に生かせるようにしている。
- ・ 学習支援等の依頼が出やすいように、教員から一方的に依頼を募るだけでなく、コーディネーターが年間の学校行事や学習内容を確認し、ボランティア募集内容を計画している。
- ・ ボランティアの方々が気軽に情報交換できる場として茶話会を開催している。茶話会の前にはクッキーづくりも取り入れ、活動や飲食をしながらボランティア同士、ボランティアとコーディネーターとのコミュニケーションを図ったり、情報を収集したりする場となっている。また、普段からボランティアの方々が気軽にコーディネーターと話ができる雰囲気作りに努めている。

- ・教職員との信頼関係を築くとともによりよいコーディネーションができるよう、負担のかからない範囲で教職員と直接話す機会をもつように心がけている。また、コーディネーターの活動の場が職員室内にあるため、学校内で知り得た情報については他では話さない守秘義務を守ることを心がけている。
- ・ボランティア通信を発行し、活動報告等を保護者や地域の方々にも知らせている。活動の理解とボランティア協力の広報をねらいとするとともに、学校支援に携わったボランティアの方々の励みにしている。

成果と課題

○成果

- ・ボランティアを依頼する流れの中で、コーディネーターの活動場所が職員室にあり、コーディネーターが不在でもメモ等でやりとりが行えるため教職員の負担が軽くなった。また、教職員とコーディネーターが直接打ち合わせをする機会が多くあり、意思疎通が図れ、教職員が意図する支援ができるようになった。
- ・児童の安全を守る防犯ボランティアの連絡をコーディネーターが行うため、地域の情報が得られるとともに地域との窓口であった副校長の事務量が軽減した。
- ・茶話会や活動後の雑談の場を設けることにより、ボランティアの方々がリラックスした中で意見や感想を話すことができた。コーディネーターにとっても今後の学校支援に生かせる地域の方の情報を知る機会となった。
- ・ボランティア募集のチラシは、支援内容をできるだけ具体的に明記して配布したため、地域の方々が自分にもできるのではという思いで多く集まった。また、活動をする中でボランティアからアイディアも出され、活動内容の充実につながった。

(ボランティア通信)



(学習支援の様子)



○課題

- ・教職員との打合せ時間を確保することが難しい中、教員の依頼事項をより効果的に確実に把握し、ボランティアに伝達する方法を検討し改善する。
- ・保護者を中心にボランティアを募っていたが、今後は広く地域にボランティアを募り、地域をあげて学校を支援する。そのための広報の仕方を工夫するとともに「魅力ある学校づくり地域協議会」とも連携していく。
- ・教職員が支援依頼をしやすく、効率的に連絡調整するために、学校行事や学習内容を十分に把握し、支援ができるものをコーディネーターが提案していく。
- ・今年度は初年度のため学習支援が中心であったが、今後は学校支援内容の幅を広げていく。

(2) 狭山市学校支援ボランティアセンター

団 体	事務局	住所 埼玉県狭山市狭山台4-26 (狭山市立狭山台中学校内) TEL 04-2927-1395		
	設置年	平成19年	会員数	20名 (運営委員)
コ ー デ ィ ネ ー タ ー	目的	児童生徒の保護者及び地域の住民が連携し、地域の教育力を生かして、ボランティアとして小中学校の活動を支援し、学校教育の充実や地域に開かれた学校づくりの実現を目的にセンターを設置する。		
	人数	30名		
コ ー デ ィ ネ ー タ ー	主な 経歴	狭山市では高齢者生きがいの理念から生まれた「狭山シニア・コミュニティ・カレッジ（SSCC）」（平成12年度開講）という学びの場がある。このカレッジはそこで得た知識や今までの経験を生かして、修了後引き続き地域社会の一員として活躍することを目的としている。平成14年度に同窓会が自主的に組織され、その中の一つの部会が「学校支援部会」として地域に密着した学校支援活動をスタートさせ、コーディネーターが誕生した。		
	活動 状況	随時	活動 拠点	狭山市内27小中学校

組織について

狭山市学校支援ボランティアセンター（略称SSVC）は、学校支援を総合的にコーディネートするために狭山市教育委員会で設置した機関である。運営は市教育委員会から「狭山シニア・コミュニティ・カレッジ同窓会」が受託し、ボランティアスタッフで運営している。事業費は700千円である。

○運営

運営委員会を月1回定例開催する。運営委員の選任はSSVCで選任し、教委所管課と同窓会の同意を得る。委員会には教委所管課、同窓会役員も出席する。委員会はセンターの決議機関であり、各学校の要請事項の確認、研修会開催や支援者人材バンクの運営、広報等各領域別の課題の検討を行う。

また運営委員会とは別に「諮問会議」を置き、広く識者の意見、助言、提言を受け運営の参考としている。年に1～2回開催し、メンバーは教育委員会、大学教員、小・中学校教員、PTA、おやじの会のメンバー等に依頼している。

センターにはセンター長1名、事務局長1名を置く。さらにセンター事務局に専任事務員を置き、毎週月・火・金曜日13時～16時の間、主に相談窓口として対応している。

（諮問会議の様子）



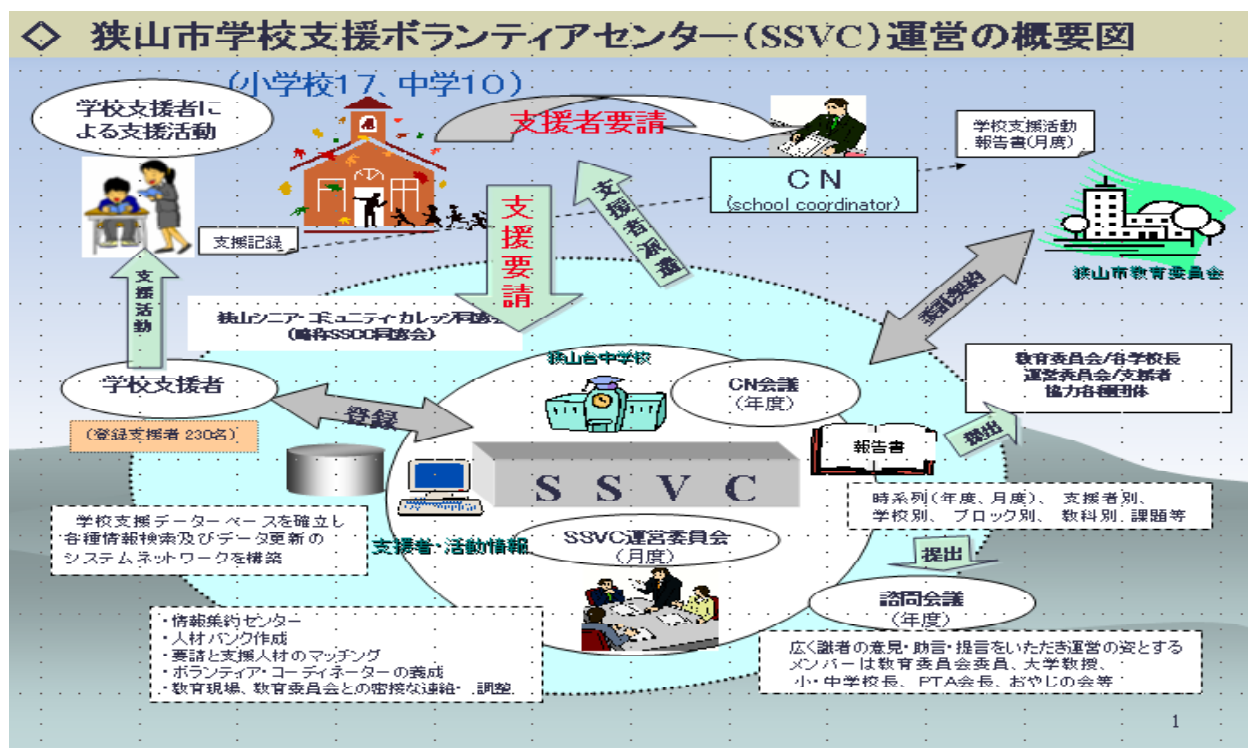
その他運営委員とスタッフが若干名、会計1名、会計監査2名を置いている。これらのスタッフが総務・会計G、活動支援G、情報集約G、人材バンクG、広報Gの5つのグループに分かれて業務を分担し遂行している。主な事業内容は以下のとおりである。

○事業内容

- ①学校支援業務に関する情報の集約・発信をする。
- ②学校支援ボランティアバンクの設置と運営をする。
- ③学校からの支援要請に基づくボランティアの調整と派遣を行う。
- ④学校支援ボランティアやコーディネーターの育成を行う。

具体的には、総務・会計Gが運営委員会の運営や予算・経費会計、備品管理、保険管理等を扱い、活動支援Gは学校連絡調整やコーディネーター支援を主に担当し、コーディネーター会議や支援者懇談会の企画、運営を行っている。情報集約Gは調査と支援記録の整備などファイル管理を行い、人材バンクGは人材バンクの見直しとコーディネーターや支援者の養成や研修、活動のマニュアルの作成等を行っている。広報Gは広報紙やパンフレットなどを作成し情報を発信している。このようにグループごとに業務を分担し、拡大する学校支援要請に円滑に対応するため組織化し、システム化しながら事業を展開している。また、センターでは関係者が最新情報を共有し活用できるようにするため、インターネットを活用し、各会議議事録や各種関係帳簿、その他関連情報ファイルを閲覧利用できるようにしている。

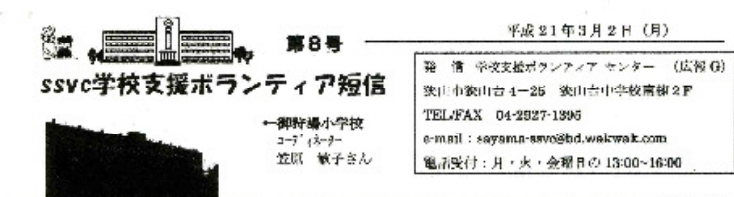
◇狭山市学校支援ボランティアセンター（SSVC）運営の概要図



○コーディネーターへの支援

- ・年3回コーディネーター会議を開催し、情報交換を行う。
- ・「学校支援ボランティアセンター短信」を毎月発行し、コーディネーターに配信する。
コーディネーターは場合によっては、担当校や担当地区の支援者にさらに配信し、情報を共有する。
- ・研修会を実施し、コーディネーターのスキルアップを図る。20年度は「学校とボランティアコーディネーターの役割と育成」というテーマで講演とシンポジウムを行った。
(研修会の企画)

(学校支援ボランティア短信の一部)



◆「学校応援研修会」開催！

2月18日(水)教育センターに於いて表記研修会を学校応援推進委員会とSSVCの協働で開催。約80名の参加者を得て奥相先生の演題「コーディネーターの役割と可能性」は時宜を得たものになりました。優しい言葉で大変分かりやすく、先生の豊富な経験と実例を基に話を進められ勉強になりましたと同時に課題も提示されました。

講演後のシンポジウムは先生の司会で各パネリストから率直な現況報告がされました。時間は少々押しましたが、参加されたCNの方々にとって実り多い研修会となりました。参加しなかった方には次回CN会議で資料を配布します。(センター長 坂井)

を置くことにしました。詳細は3月16日のCN会議で報告をします。(センター長 坂井)

◆富士見小学校「昔の遊び」授業支援

2月6日(金)、1年生130名を対象に授業支援を行いました。子ども達と支援者は、折り紙のカブトをかなりタイムスリップ！子ども達は平成から明治へ、支援者は「マイナスイロ年」までに意心に戻り、昔の遊びを演じ、子ども達に、その思いを伝承しました。

最後に、子ども達から、お礼にお手紙と昨年寄った朝顔の種を、学校側から支援への感謝の言葉を贈りました。今回の支援者は35名、SSVCの方、地域の方、シニアカレッジ教授・そのQHの方、シニア方におかれ、支援者四十の部！いよいよいよいよ

コーディネーションの実際

センター(SSVC)では、市内各小中学校27校に、コーディネーターを1~2名配置している。これらのコーディネーターは活動の要請を受け、人材バンクから支援者を確保し学校に知らせる。該当するボランティアがいない場合は、速やかにSSVCに連絡して対応している。SSVCでは支援者を見つけ、コーディネーターに紹介している。人材バンクは現在約300名の登録があるが、SSCC(狭山シニア・コミュニティカレッジ)を修了したメンバーに修了時に「学校支援ボランティアアンケート」を実施し、支援者として人材バンクへの登録希望をとったり、市広報で登録者の募集を行ったりしている。

今年度学校支援ボランティアとして活動した人は約150名であった。時間を経て登録した人の中には支援ができなくなったり、逆に登録しているのに要請がなかったなどの課題もあり、人材バンクの見直しを始めたところである。SSVCが今年度活動をしなかった登録者に対して、登録の継続と活動内容の確認をしている。

(活動の様子)



○留意点

- ・学校訪問時は、所定の腕章と氏名札を着用する。これは学校にとってはSSVCのメンバーであることが明確になり、またSSVC会員にとっては気持ちを引き締める上で有効である。
- ・学校からの連絡が円滑に行われるよう通信・連絡手段を明確にしている。
- ・学校行事にはできるかぎり参加すると共に、可能な限り登録ボランティアに行事への参加を呼びかけ、学校理解に努めている。
- ・担当校の教職員とは連絡を取り合い、定期的に訪問してコミュニケーションをとるように心掛けている。コーディネーターがボランティアとして学校で活動しているケースはコミュニケーションがとりやすい。
- ・学校の情報は口外しないなど、「個人情報保護」に関する注意とお願いの誓約書を渡し、規則遵守の徹底に努めている。
- ・既存の学校支援ボランティア（保護者等）と連携し、支援者をSSVC以外の地域の方にも広げていくよう広報している。
- ・新しい支援者には、面談をしボランティアとしての心構えや留意点等を説明し学校や活動理解に努めている。

（腕章と氏名札と名刺）



成果と課題

○成果

- ・やや閉鎖的であった学校教育現場に地域住民が入ることにより、地域に開かれた学校のイメージが大きくなった。
- ・学習支援を中心に行っているため、授業の充実が図られている。中学校での学習支援は学力にも個人差が大きくなるため、個人情報を守る必要もある。そのため、地元住民以外のボランティアに依頼するなどの工夫がなされている。結果として学校として依頼しやすくなり、活動件数も増えている。
- ・子どもは異世代の人と接して、視野が広くなり豊かな人間性の形成に貢献している。
- ・ボランティアが入ることによって教員に緊張感が増し、よい刺激となっている。
- ・地域の高齢者は子どもを支援しながら一緒に学ぶ姿勢がみられ、子どもたちから必要とされることによって、生きがいを見出している。

○課題

- ・コーディネーターはボランティアと学校とが対等で「協働」できる関係になるためお互いの悩みやとまどいを両者の間に入って解決することも重要な役割である。このため信頼感や豊かな人間性をもって、両者の思いやねらいを受け止め、効果的に支援をしていけるような人材の拡充と育成が課題である。
- ・担当教員が忙しくコミュニケーションがなかなかとれない。
- ・支援者は適任者の確保のため1か月位の余裕が必要である。

(3) あおば学校支援ネットワーク

団 体	事務局	住所 横浜市青葉区奈良4-1-1 TEL 070-6974-0184		
	設置年	平成17年	会員数	23名
	目的	学校教育の支援活動にかかわるボランティアと学校をつなぐコーディネーターのネットワークとして、子どもたちの視点にたったよりよい学校教育を支援することを目的としている。青葉区内の全市立小・中学校を対象とする学校支援ボランティアのコーディネート事業を行うコーディネーターの団体である。		
コ ー デ ィ ネ ー タ ー	人数	23名		
	主な経歴	平成16年度青葉区自主事業「学校ボランティアコーディネーター養成講座」及び平成20年度青葉区協働による地域力アップ事業「学校支援コーディネーター養成講座」修了者により結成された事後グループのメンバーである。		
	活動状況	随時	活動拠点	青葉区区民活動支援センター 区役所協働スペース

組織について

代表1名、事務局長1名、会計1名、幹事1名の他に情報担当1名、ホームページ担当1名がいる。情報担当は登録ボランティアの個人情報管理を行い、ホームページ担当は講座の案内や活動報告、広報紙の作成を行いホームページに掲載している。青葉区内30校の小学校には一人が2校かけもちしながら1校あたり2名のコーディネーターが担当している。2名のコーディネーターは正コーディネーターと副コーディネーターとなり、正コーディネーターが学校との連絡役となりコーディネートを中心となっている。

主な活動は次の3点である。

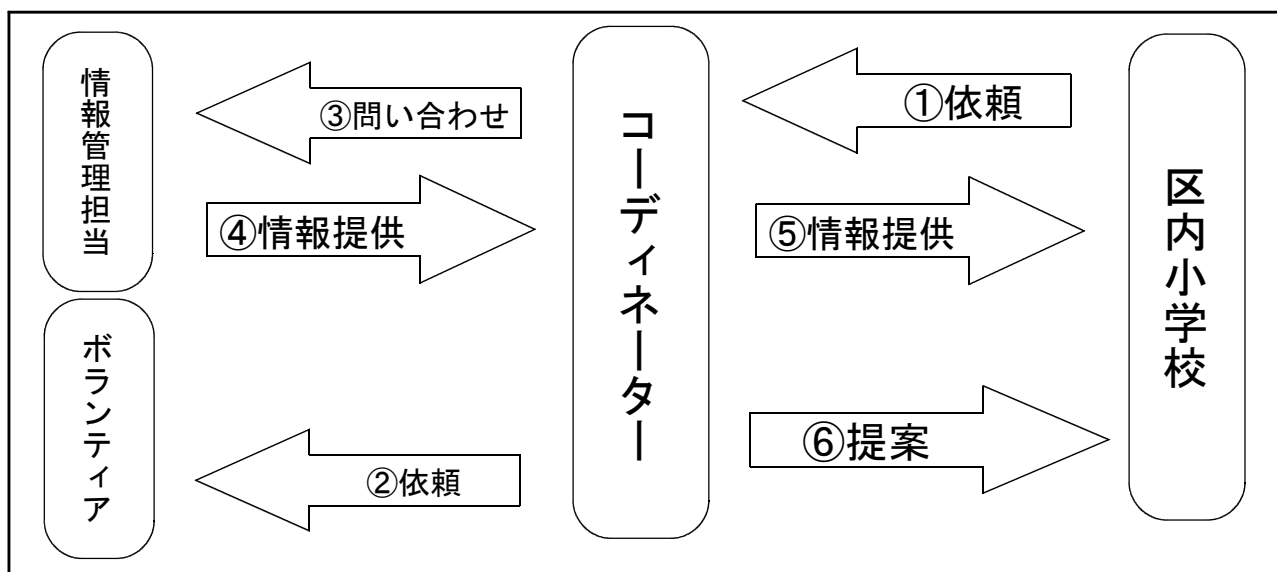
- ・学校の要請によるボランティアの紹介、および学校へのボランティア活動や出前授業の提案行う。
- ・ボランティアの養成と研修およびボランティア同士の交流の支援を行う。
- ・土曜日などの休日に、地域との連携による小学生を対象とした課外活動の企画・運営を行う。

毎月、第3金曜日の午後、区民活動支援センターで定例会をもち、コーディネーターとしての関係各校の情報交換を行う。出前授業の提案がある場合には、提案者を中心に定例会で協議を進める。提案者＝実行者の原則があり、提案者に何人かのメンバーが加わりプロジェクトを組んで、企画・運営する。

※出前授業とはコーディネーター側から提案する、土曜塾（後述）やクラブ活動などのプログラムのこと。

コーディネーションの実際

学校の依頼に対してボランティアを確保し、支援を行うまでの基本的な流れはコーディネーターを中心に次のようになっている。



コーディネーターは、担当校から依頼があると（①）直接ボランティアに依頼したり（②）、また情報管理担当に問い合わせをし（③）ボランティアの人材情報を提供してもらう（④）。そして学校に紹介する（⑤）。また、コーディネーターの方から担当校へ提案する場合もある。①の依頼は新入生クラス支援や校外学習の引率、運動会の会場整理などが該当し、⑥の提案は土曜塾などが該当する。

※土曜塾とは土曜日の子どもの居場所づくりとして、体験をテーマとしたプログラムを子どもたちに提供する団体と区との協働事業のこと。

次に具体的なコーディネーションの流れを「新入生クラス支援」を例に挙げて示す。

○ねらい

「新入生クラス支援」とは、ボランティアをアシスタントティーチャーとして各学級に配置することで、入学したばかりの新入生が安心して学習や活動に取り組むことができるようにすることをねらいとしている。活動内容は学校との相談で決めるが、朝の会から下校までの、主に新入生の生活や学習支援を行う。担任教員の全体指導に対して、ボランティアは、発達段階やルールの理解が異なる児童を個別にサポートしている。

○実施に至るまでのスケジュール

前年度中に担当校の依頼を受けて、コーディネーターが学校のニーズに合わせた計画を作成し、学校側と調整する。3月初旬ボランティアを確保し、3月中旬にはボランティアの日程調整を行い、学校へ連絡をする。3月下旬、ボランティアを対象に説明会・研修を実施し、4月初めの校長面談と担任との打ち合わせを経て実施に至る。学校と地域の連携の視点から日々の子どもの学校生活を豊かなものにするという共通の目的のもと、先生とボランティアが時間や場面を共有することによって、地域と学校がとも

に手を携えて学校教育に関わる実践的なモデルケースとして位置づけている。

<ボランティアの感想>

- ・ 教室に入ること自体が初めてだったので、最初は戸惑った。どこまでかかわったらよいのか迷った。回数を重ねると様子が分かってきて自然に足が教室に入った。
- ・ 担任の先生と校長先生から深々と感謝され、明日からのボランティア不在を心細げに話された。その言葉で役に立てた感じがした。等

<校長先生の感想>

- ・ 集団としてどう対応するか大変な時に細かい対応をしていただいて本当に感謝している。これからの学校の在り方を考えるとこうした活動の大切さが分かった。

○活動終了後

学校側をまじえた反省会を行い、記録にまとめて次年度に備えた。今年度始業前と下校後に打合せを取り入れたことで円滑なコミュニケーションが図られた。その結果、学校支援ボランティア活動が単なる「地域人材の活用」ではなく、子どもを中心において顔を合わせ一緒に考える行動する大人たちの姿が見られた。

○体制整備

自分たちの団体がコーディネーターとして責任をもってボランティアを学校に紹介するために、ボランティアの養成やスキルアップの研修を実施している。ここでは「図書ボランティアフェスタ」「小学校英語フォーラム」「青葉まちのマイスター講座」を例に挙げて示す。

「図書ボランティアフェスタ」

ボランティアとして参加していた方もスタッフとしてプロジェクトチームの一員となり、企画運営を一緒に行った。週に1～2回の打合せをもち、ボランティアから今後の活動に役立つアイディアを出してもらった。案内のチラシは学校や公共施設に配布し、参加者を募集した。資金面では独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子ども夢基金」の助成を受けて実施した。その後、「学校図書ボランティア交流会」を実施し、ボランティアの交流を設けた。

(図書ボランティアフェスタチラシの一部)



<参加者の感想>

- ・ 作って持ち帰ることができ、楽しかった。
- ・ 糸とじを初めてやった。学校の本のバラバラゾロリも助けられるかもと、わくわくしている。
- ・ 読み聞かせで講師の方からコメントをいただけてよかった。等

「小学校英語フォーラム」

英語の得意なコーディネーターが発案し、企画運営した講座で既に英語サポーターとして活動している方、これからサポーターとしてかかわっていきたいと思っている方を対象に行った。内容は区の教育委員会学校教育課の担当と相談し決定した。区内外から約90名の参加があり、関心の高さが示された。その後、「英語サポーター研修会」を実施し、交流や情報交換の場を設けた。

「青葉まちのマイスター講座」

地域の大人同士がコミュニケーションを深め、地域社会にかかわるきっかけを持ち、地域の教育力の向上につなげるためにこの講座を開催した。講座では、「青葉区を見る・知る・味わう」をテーマに歴史、環境、芸術など青葉区を知り、地域活動を楽しむことを主眼に、区内で活躍する方を講師として依頼し実施した。講座の修了後にはそれぞれの次のステップを考えるよう促した。修了者には関連する情報を提供して結びつきを保ち、学校支援ボランティア等としての協力が得られるよう、ボランティアとして活動してもらうきっかけづくりを行った。

○留意点

- ・学校に対しては区内全小学校に対して担当者を決め、各担当者ができるだけ訪問し校長先生や必要により先生方と直接話をする機会を持つようにしている。
- ・年度初め、区の校長会で代表が活動報告とともに、今年度の活動の予定などをお知らせし、学校への理解促進に努めている。
- ・地域に対して「青葉まちのマイスター講座」「あおばエコ大作戦」「区民祭り」等を開催したり活動に協力したりすることをおして、積極的に地域に働きかけ、組織の信頼確保に努めている。
- ・団体の会員用ハンドブックを作成し活用することで、コーディネーターとしての活動を確認し、信頼確保に努めている。
- ・行政と常に協力関係を保ち、お互いに共有する目的に向かって推進している。

成果と課題

○成果

- ・コーディネーターが関わる学校が増えてきた。また依頼の件数も増えており、今後は区内の全小学校に関われるように信頼確保に努めていきたい。
- ・少しずつ地域の人たちの協力や信頼を得られてきた。今後ボランティアとして活動できる方を増やしていきたい。
- ・スキルアップ講座などにより、一人一人のボランティアがさらにスキルを身につけ、意欲的に取り組んでいる。

○課題

より充実した体制を模索し、活動資金的にも自立した団体として、学校・家庭・行政の信頼に応えることを目指したい。

(4) N P O 法 人 夢 育 支 援 ネ ッ ト ワ ー ク

団 体	事 務 局	住 所 東京都三鷹市牟礼4-12-2 TEL 0422-48-5224		
	設 置 年	平成15年	会 員 数	約120名
	目 的	学校（教職員）、保護者・地域住民（大人）、子どもにとって実のある学習支援の実践をコーディネートするというコンセプトのもとに、以下の3点の実現を目指している。 ・子どもたちとともに学び、ともに生き、ともに創り出し、『地域の子どもは、地域住民が責任の一端を担う』という理念を実現する。 ・地域の様々な人たちの経験・知恵を生かして、子どもたちのために積極的に学校等の教育活動に地域住民が参画することを支援する。 ・地域住民の生涯学習の観点から、本活動を通して、人間性豊かな活力ある地域コミュニティの創造に寄与する。		
コ ー デ ィ ネ ー タ ー	人 数	6名		
	主な経歴	元PTA役員4名、元会社員2名である。 現理事長が「開かれた学校」に注目し、三鷹第四小学校をケーブルテレビで取材したのをきっかけに、ケーブルテレビや元市議としての、地域における人脈や団体等の情報に通じていることから支援を始めた。活動の継続を目指し、「NPO法人夢育支援ネットワーク」を設立し、現在に至っている。		
	活動状況	5日／週 3時間／日	活動拠点	三鷹市立第四小学校・武蔵野三鷹 CATV

組織について

会員については、法人の目的に賛同して入会した個人及び団体である正会員と、目的に賛同して事業活動支援を行う賛助会員で構成されている。役員として理事長、副理事長、理事がいて、年1回の定期総会で、活動方針や内容を確認している。

○事業内容

学校と地域がともに力を持ち寄り、教育活動を行うためのサポートを行っている。事業の柱となっているのは次の3点である。

- ・ 地域の人材の発掘・登録を行い、最適な形で各学校の教育の現場に派遣・コーディネートする。
- ・ 各学校に対して地域の人材を活用した効果的な指導プログラムを開発し、提案する
- ・ 地域に開かれた学校づくりのノウハウを構築し、各学校区に提供する。

具体的には、次のようなサポートを行っている。

◇SA（スタディ・アドバイザー）

学習支援ボランティア。教科授業での学習支援、実技教科での実習補助、校外学習での

安全確保など担任や専科の教職員と一緒に授業に入り、子どもたちの学びをサポートする。例えば算数のマルつけや家庭科のミシンぬいなど、特別な知識や専門性をもたない方でも参加できる。

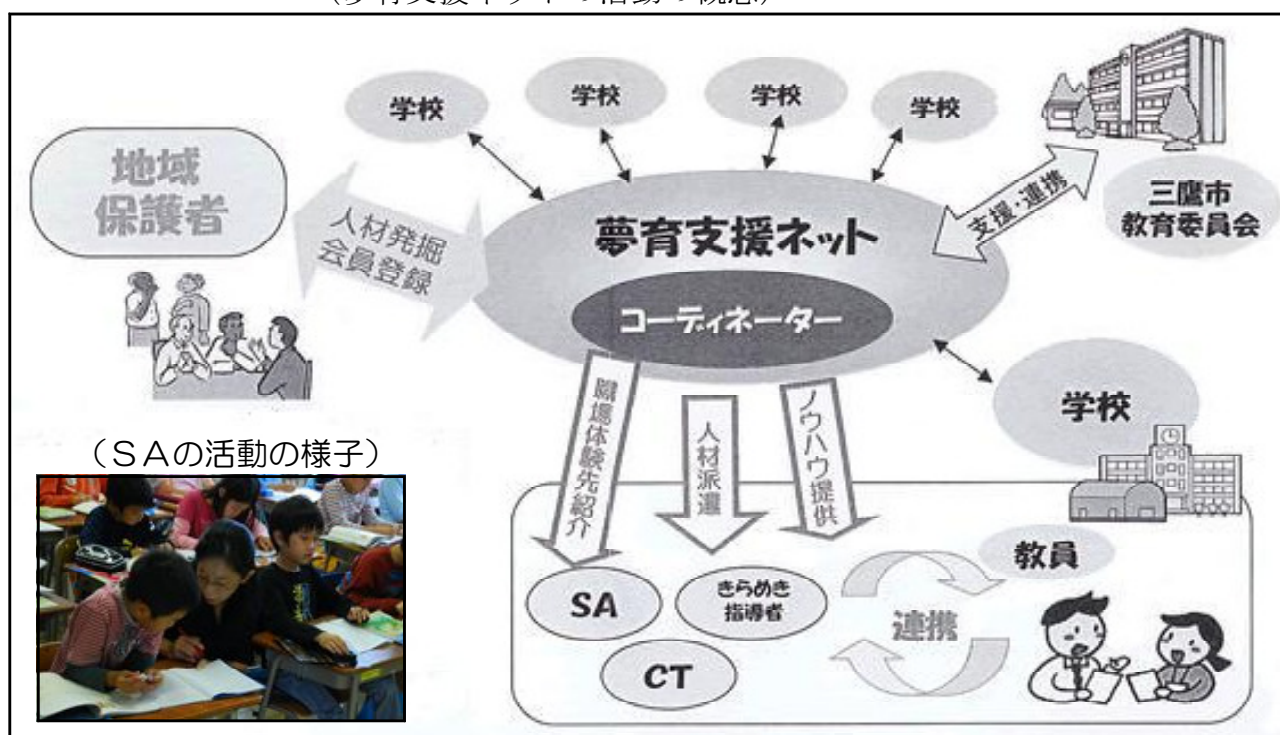
◇CA（コミュニティ・ティーチャー）

仕事や趣味、生活経験等で専門知識や技術をもつボランティア。主に総合的な学習の時間や英語等、特定の教科の時間に指導者として活動する。

◇きらめきクラブ指導者

趣味や特技を生かして、放課後や土曜日等、子どもたちの居場所づくりのためのクラブ活動を企画・運営する。毎週行われるものから、単発のイベント、大人も参加できるものまで、さまざまなクラブ活動が行われている。夢育支援ネットワークが主催、企画する活動もある。

（夢育支援ネットの活動の概念）



（SAの活動の様子）



○運営方式

事務局体制をとり、学校とボランティアをつなぐ役割を担うコーディネーターとしてスタッフが常駐している。

事務局のメンバーは、現役の保護者、保護者OB、地域の有志で構成されている。また事務局は、団体の活動拠点である三鷹第四小学校の場合、職員室に隣接する空き教室に設置されている。

（職員室に隣接した事務局）

NPO法人として事業の運営・管理に必要な資金については、次のような方法で確保している。

- ・個人、団体有志からの寄付金の受け入れ
- ・法人等の支援金や物品の受け入れ
- ・法人団体の助成金を申請、応募



コーディネーションの実際

ここでは、三鷹第四小学校のSA（スタディ・アドバイザー）事務局を例に挙げて示す。

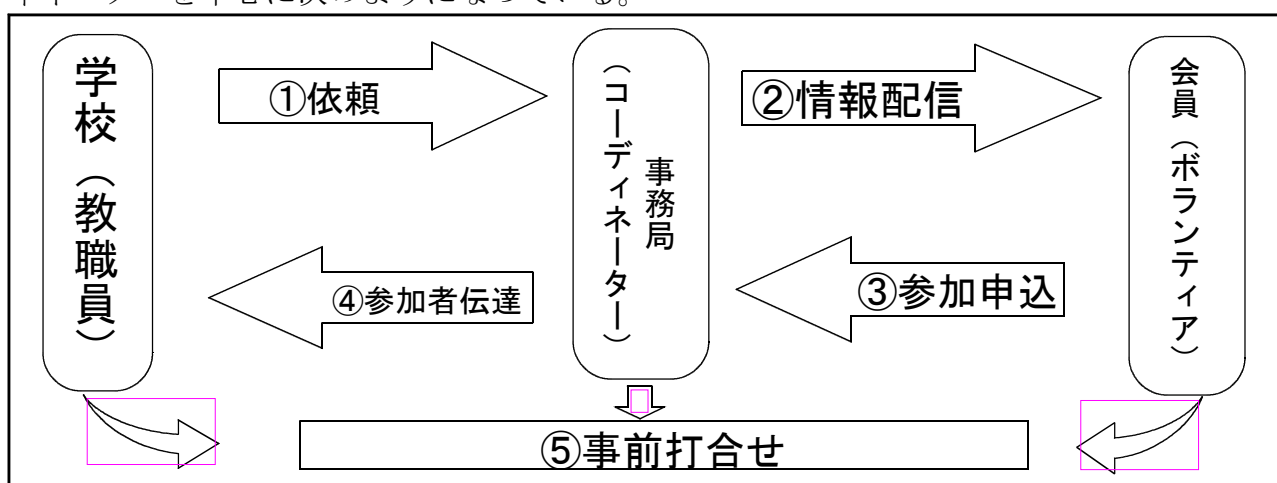
○登録者の募集と管理

ボランティア会員の募集は常時行っている。保護者に対しては募集のプリントを作成・配布し、地域の方については、電子メールによる会員登録を受け付けている。新規の方については、全て事前に会員登録を済ませることを前提としている。また、登録と同時にメーリングリストへ加入いただき、ボランティア活動をする際の名札の作成を行う。

継続の会員については、年度ごとに会員継続の意思の確認をとるなどして、更新、脱退手続きを行っている。

○コーディネートの流れ

学校のニーズに対してボランティアを依頼し、支援を行うまでの基本的な流れはコーディネーターを中心に次のようになっている。



具体的に事務局はコーディネーターとして次のような活動を行っている。

学校がボランティアの依頼をするときは、週1回程度事務局の連絡会の日程に合わせて必要事項（人数、内容等）が記載された依頼用紙を提出する。（①）

（依頼用紙）

ボランティア依頼の情報が入ったら、日時、依頼内容、事前打合わせ日程等が記載されたメールを事務局から会員の方々へ配信する。電子メール（PCメールのメーリングリスト、携帯メール）による一括配信を行っているが、PC対応していない会員のためにプリントの作成・配布も行っている。募集の締切は約一週間である。参加を希望する会員は事務局に参加希望の連絡をする。（②・③）

会員からの質問等にも対応しながら参加希望の情報を学校側へ伝達する。希望人数が少ないときは再度募集をかけ、反対に希望人数が多いときは依頼回数や経験等のバランスを考えてコーディネーターが調整する。（④）

授業が行われる前にはコーディネーターを含め、教職員とボランティアが事前打合せを行い、具体的な支援内容の確認をする。（⑤）

★SA依頼表★					受付日
学年	年	教科	担当教諭		
<内容>					
<場所>					
日付(曜)	時間目	組	必要人数	SA決定者	
<雨天時対応>					
<SAへの希望内容>					
<事前打合せ>					
<備考>					
問い合わせ SA事務局 担当者					

○留意点

- ・教職員と会員が、それぞれの思いや考えを理解し合うために、懇親会や連絡会議の場を設け、管理職を始め一般の教職員と話し合う機会を設ける。
- ・コーディネーター（事務局スタッフ）は保護者、保護者OB、地域の有志と違った立場の方で構成し、幅広い人脈と情報収集、連絡調整ができるようにする。
- ・ボランティアを確保するには、昼間活動可能な人（主婦、シニア、自営業者、学生）に限られることを念頭に受入れ計画を立て、積極的に募集を呼びかける。
- ・会員登録に際しては、理事長・当該学校長が面接するとともに、活動上知り得た情報については絶対に口外しないという守秘義務を条件としている。
- ・会員の募集やPR活動として、通信紙の発行やホームページでの情報公開を行っている。
- ・初めてボランティア活動する方向けに、活動の一連の流れをまとめたCD-ROM教材「スタディアドバイザー育成講座ベーシック版」を用意し、活動の理解促進と不安解消に役立てている。
- ・活動記録用紙を用い、ボランティア活動をしての感想や気になったことを記入し、必要に応じて教職員にも伝え返事をもらうなど、今後のよりよい活動に生かしている。
- ・教職員の協力を得ながら計画表を作成し活動の見通しを立てている。また、これまでの実績をもとにコーディネーターから活動の提案を行う。

（記録用紙）

※SAの方へ… チェックお願いいたします ※
この感想シートを、夢育の広報活動の一部として活用してもよろしいですか？ よい / だめ

SA 記録用紙

SA氏名	担当クラス	年 組
日時	年 月 日 時間目	科目

座 席 表

感想・気になったこと・メモ （お返事ください・お返事45分以内）

先生より ※上記 SA の「お返事ください」に○かしてあるものを中心にご返答ください。

先生チェック欄 ※目を通したらチェックお願いします ☐

成果と課題

○成果

- ・懇親会や連絡会議など、教職員と会員のコミュニケーションを多くとることを通して、教職員は地域の方々の教育力や学校支援の熱い思いを理解することができ、地域の方々も教職員の熱意や理想を理解し、相互の信頼関係が培われた。
- ・学校内に事務局を設置することにより、学校側との連絡がスムーズに行える。そのためボランティア募集依頼やボランティアメンバーの情報を知ることがすぐにでき、授業の急な変更等にも素早く対応することが可能となった。
- ・会員登録制を義務づけることにより、安定的にボランティアを紹介することが可能になった。
- ・電子メールの導入やホームページを立ち上げたことにより、時間のロスがなく情報を会員に流すことができ、希望を募ることができるため、コーディネーターが依頼に応じボランティアを探す負担が減った。また、全市的な協力が得られたり、遠くから学生が集まったりと広域的な協力が得られるようになった。
- ・地域住民に、学校は地域のものだという認識ができた。

○課題

- ・教職員との信頼関係が築けても異動があるため、その都度新たに活動の理解と信頼関係を築く努力が求められる。
- ・学校により、地域の教育力を受け入れることに意識の違いがある。

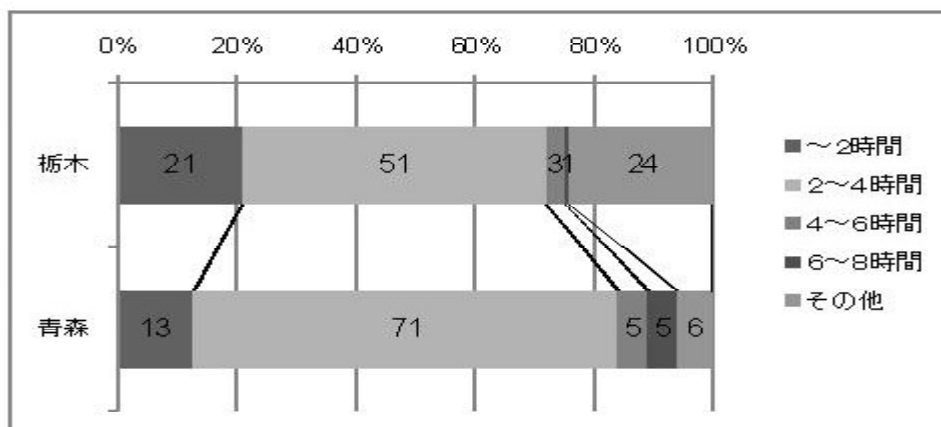
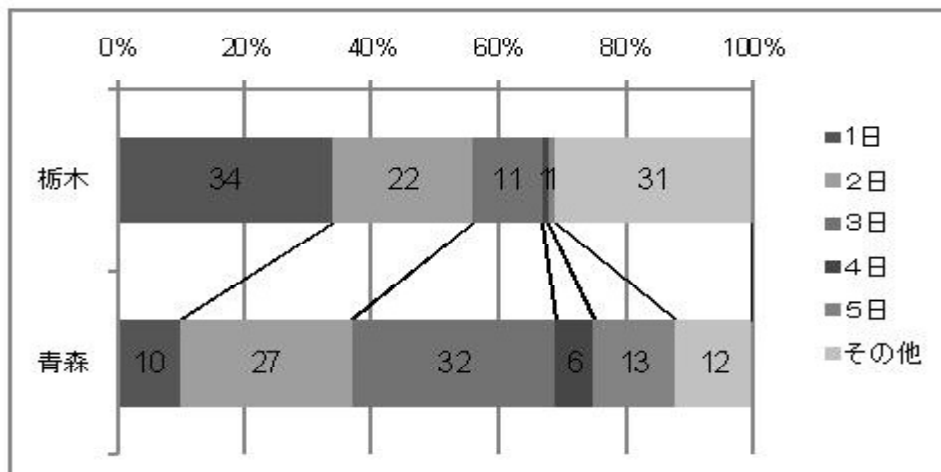
3 コーディネーターアンケート調査結果と分析・考察

栃木県、青森県内の学校支援地域本部事業を実施している市町村の地域コーディネーターに調査票にて調査した。(参考資料P.59~P.60) 栃木県は95名、青森県は62名の回答を得られた。

(1) コーディネーターについて

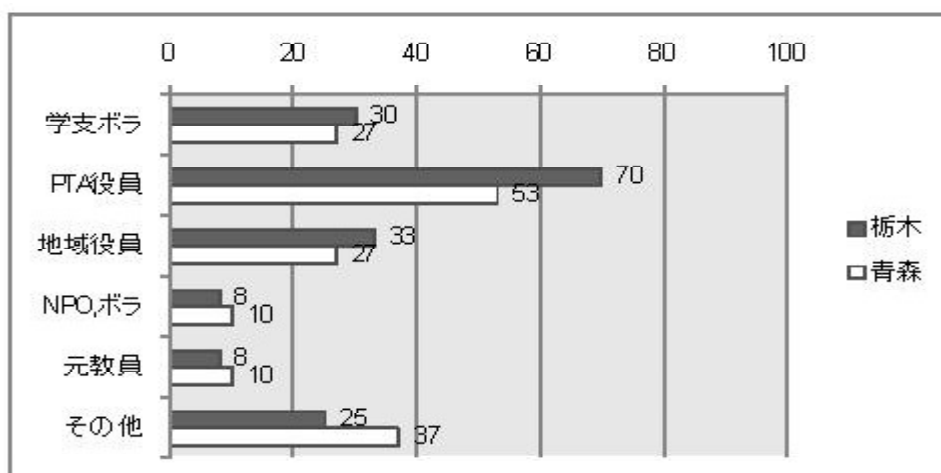
①活動日数と活動時間

問 1週間の活動日数と1日の活動時間を記入してください。



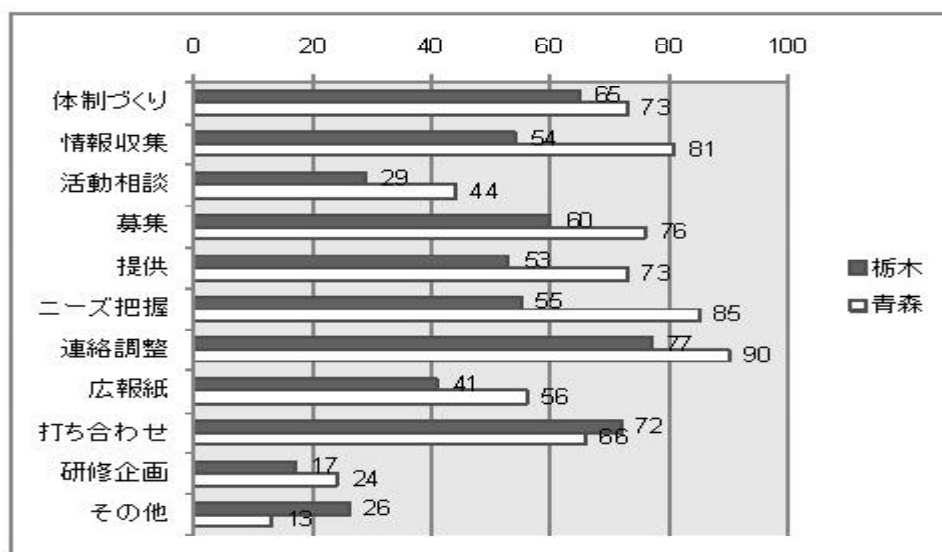
②経歴

問 コーディネーターになる前の活動で該当するものすべて選んでください。



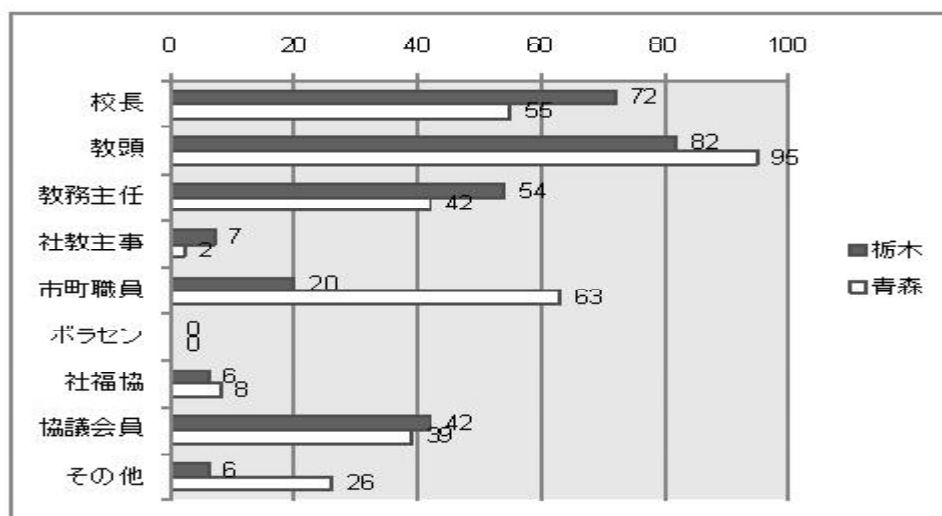
(2)活動の実際

①具体的な活動（複数回答）



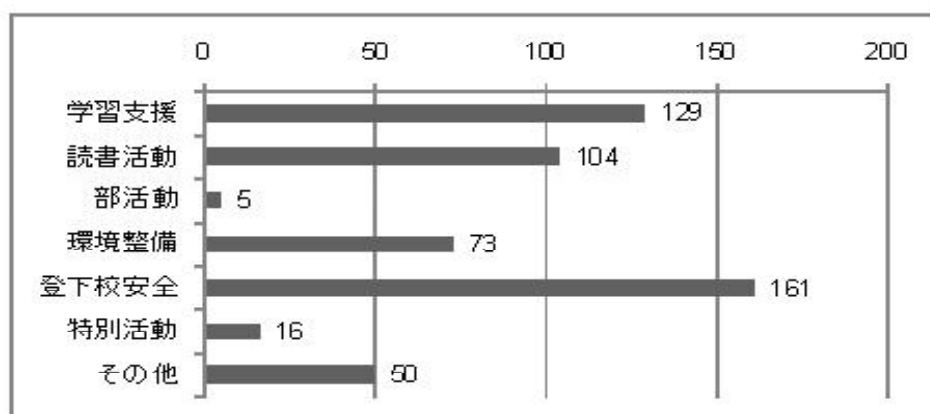
②相談相手

問 コーディネーターとして活動を推進する際、相談する相手の方に○をつけてください。（複数回答）

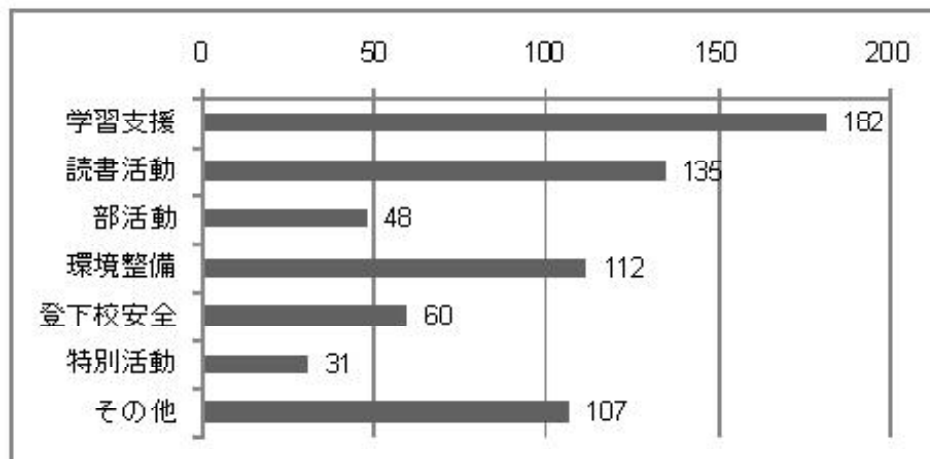


③コーディネートした活動内容（件数）

[栃木県]

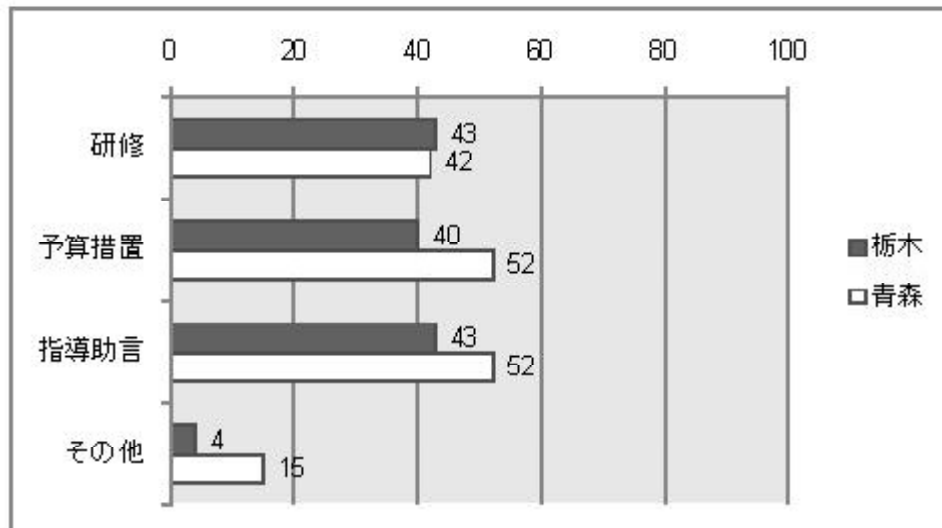


[青森県]



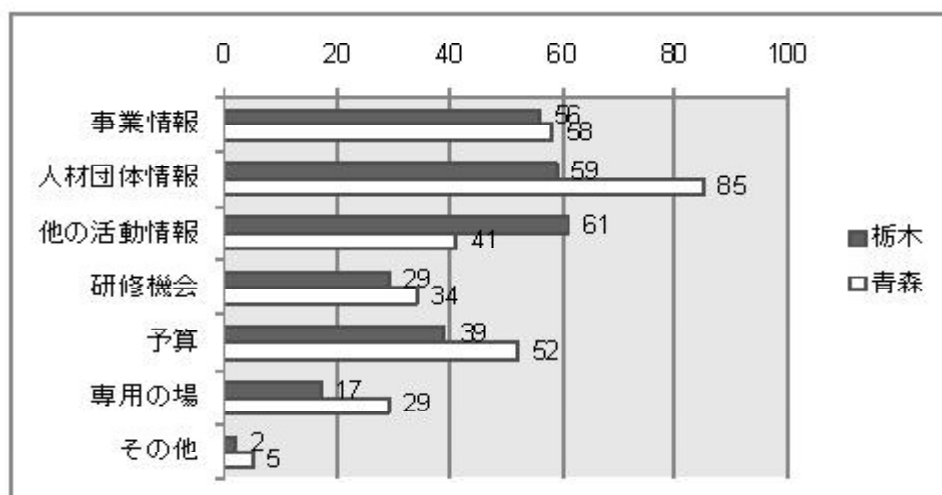
④行政とのかかわり（複数回答）

問 行政に期待することで該当するものに○をつけてください。



⑤活動上必要なこと（複数回答）

問 活動上必要なことで該当するものに○をつけてください。



(3) コーディネーター回答一覧：栃木県

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
1	中学校	被服準備室	2	2~3	元教員	・地域の各種団体、保護者に向けて説明会を実施、登録名簿の作成 ・教職員に登録名簿を配布	・より美しい花壇になり、生徒は植栽に関する知識を得た。 ・学校見学会などに参加してもらうことで、学校がより身近に。	・教職員の本事業に関する理解・関心がまだ薄い。 ・コーディネーター同士の情報交換、情報共有の場が必要
2	小学校	職員室			現PTA	・依頼により該当ボランティアへの連絡 ・活動内容のデータ整理	・英語活動の際、多くの児童にかかわり、児童の学習意欲が増した。 ・児童が学校外で地域の方々にあいさつをするようになった。	・教職員と時間が合わずじっくり打合せができない。 ・連絡調整のための時間確保が難しい。
3	小学校	地域活動室	3	2	学支ボラ PTA役員	・地域協議会に参加し、学校側のボランティアの依頼状況を確認する。 ・要望に応えられるよう、地域のボランティアを発掘する。		・コーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。
4	小学校	相談室	3	4	PTA役員 地域役員	・地域協議会に参加し、学校側の要望を把握 ・ボランティア募集のチラシ作成、地区全世帯に回覧配布。11月にボランティアの説明会・顔合わせ		・ボランティアが活動する際のマニュアルなどがあると活用できる。
5	小学校	相談室	2	3		・ボランティア人材情報の収集・データベース化 ・活動を希望する人にボランティア心得などのVTR等を見せた研修の実施		
6	小学校	視聴覚準備室	2	3	学支ボラ PTA役員 地域役員	・地域協議会に出席し、依頼状況の確認 ・ボランティア募集中。地域やPTAに向けての広報紙を作成中	・教科書の授業ではできない地域のひととのふれあいの時間を設けた。 ・顔見知りになったボランティアと子どもたちが挨拶を交わすようになり、防犯にも役立っている。	・他のコーディネーターの活動の様子を知りたいので、情報交換の場がほしい。
7	小学校	PTA会議室	1	3	PTA役員	・ボランティアの現状を把握しながら、学校の要望を調査したり、他校のチラシを参考にしながらボランティア募集のチラシを作成中		・他のコーディネーターの活動の様子を知りたいので、情報交換の場がほしい。 ・学校の保護者の支援を増やす。
8	小学校	小会議室			元PTA役員	・地域協議会に参加 ・地域の方の活動や要望・願いなどを情報収集し、コーディネートする必要があるかどうか検討中		・今まで組織がなくても学校支援のための活動が機能していたところに、組織を持ち込むのはどうか懸念している。 ・学校が積極的にならない以上、動きがとれない。
9	中学校	中学校	2	3	元教員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整		
10	中学校	中学校	2	3	PTA役員	・同上		
11	中学校	中学校	2	3	地域役員	・同上		
12	小学校	校長室	2	3	地域役員			
13	小学校	小学校	月1	2	元自治会長			
14	中学校	校長室	1	1	元教員	・学校側と定期的に会合を持ち、依頼状況を確認、該当するボランティアと打合せ等の調整 ・ボランティア募集と人材バンクづくりに向け、チラシを作成、配布		・登下校安全確保について、自治会と育成会の連携を目指しているがなかなか連絡調整が難しい。
15	中学校	校長室	1	1	民生委員			
16	小学校	校長室	1		地域役員 元PTA役員			
17	小学校	地域活動室	3	3~4	学支ボラ PTA役員	・サポーター会議で学校や地域の必要としている依頼状況を確認 ・活動の後のお茶入れ ・月別の活動状況のデータ入力	・プール指導、書道、家庭科など教員だけでは指導が不足する部分のサポートにより、指導が充実 ・読書量や図書館利用の増加	・コーディネーター同士の情報交換の場があるとよい。 ・コーディネーターが地域に認識されていないような気がする。
18	小学校	地域活動室	3	3~4	PTA役員	・同上	・同上	・同上
19	小学校	校内地域コミュニティセンター	5	7	地域各種団体事務		・子どもはもちろんのこと、親の教育ができる場合があるということを知らされた。	・募集した人数より多くの希望者があり、調整が大変だった。
20	小学校	PTA会議室	1	3	PTA役員 地域役員	・地域協議会へ参加し、依頼を確認	・よりPTAが学校教育の現場に立ち会えるようになった。 ・コーディネーターがいることで、行事調整が円滑になった。	・調整のみで担当教員とコミュニケーションがとれなかった。 ・コーディネーターの仕事が学校側の仕事かわからないことが多かった。
21	小学校	生活科室	1	2	PTA役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整、広報紙の作成	・授業の目標がボランティアの参加により達成できた。 ・地域でボランティアと子どものあいさつが増えた。	・依頼の仕方や打合せのシステム化 ・他のコーディネーターの活動状況を知りたい。
22	小学校	PTA会議室	1	3	学支ボラ PTA役員 地域役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整、ボランティア募集	・教材作成をした結果、その時間は先生と子どもの時間ができた ・読み聞かせでは、本に興味をもつ子が増えた。	・講習会よりも、できれば担当の方が学校を回って指導していただくと助かる。
23	小学校	公民館会議室	1	4	地域役員	・週1日放課後、学校へ訪問し依頼事項の確認、学校担当者とコーディネーター、ボランティアと打合せ、活動後、反省・感想の記入とまとめ		

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
24	中学校区	公民館	1	4	学支ボラボランティア	・ボランティア依頼、実施の流れの検討、募集チラシの検討、ボランティア登録者に説明会		
25	小学校	地域交流教室	2~3	2~5	P T A役員	・学校と必要なボランティアについて協議、回覧板・ポスターによる募集、説明会実施、活動、検証、次年度の計画 ・地域協議会たよりの作成、地域協議会主催教育講演会の企画運営	・ほこりだらけの資料室清掃やボトルキャップ洗浄など、大人であればできる作業で協力した結果、先生方の負担軽減につながった。 ・今まで学校でこんな事ができたという思いがあった人たちの窓口となることができた。	・ボランティアの存在をもっと先生方に知ってもらい、上手に活かしてもらう。 ・先生方と話をして何が必要かを知る。 ・人材の確保が最重要課題。ロコミを最大限に活用
26	小学校	職員室	3	3	学支ボラ	・人材の確保、要請内容の確認、ボランティアに説明、必要に応じて活動を見守る、ボランティアと担任から感想を聞き取り、参考とする。	・授業において児童の足並みが揃いやすくなった。 ・なかなか踏み出せなかった保護者が活動に参加できるようになった。 ・これまで副校長が行っていた連絡調整を引き受けたため、副校長の事務量の軽減が図られた。	・学習支援の要望が出やすいように学習内容を把握し、話し合えるようにしていきたい。 ・今後も地域コーディネーターの位置づけを確立してほしい。 ・ボランティアが楽しく活動できるよう、工夫していく。
27	小学校	職員室	3	3	元教員	・同上	・同上	・同上
28	小学校	P T A室	1	3	地域役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整		・コーディネーター同士の情報交換がほしい。
29	小学校	地域活動教室	2	2	学支ボラ地域役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整、広報紙の作成	・ボランティアと子どもたちが顔見知りになり、地域の方と交流できるようになった。	・他のコーディネーターの活動状況を知りたい。
30	小学校	校長室・ふれあい広場	1	3	P T A役員地域役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整、ボランティア募集	・地域学習の充実と深化 ・地域と学校の情報の共有化が図られ、地域連携行事の連絡調整が円滑になった。	・仕事の都合と学校の日課調整が難しい時がある。 ・地域・学校・行政がリアルタイムで情報を共有することが難しい。
31	小学校	校長室・ふれあい広場	1	3	地域協議会事務局	・協議会会議の準備、資料の作成 ・様々な地域の情報を学校と共有している。	・同上	・準備の時間を確保するのが難しい。
32	小学校	公民館	2	5	地域役員	・まちづくり協議会など各種団体と協調するために、会議に積極的に参加	・地域性の把握により地域の協力が得やすくなった。	・学校長の協力、P T Aの協力が必須 ・予算は減額もしくは廃止をしない
33	中学校	会議室	活動に沿った時間		P T A役員	・地域協議会の企画・運営 ・地域、学校側の具体的な要望を把握し、研修会の企画・立案	・研修に地域の方と生徒と一緒に参加し、コミュニケーションがとれるようになった。 ・地域の方に学校に興味をもってもらえる機会になった。	・先生と綿密に話し合う時間がとれない。 ・予算の執行を早くしてほしい。 ・コーディネーターとしてどこまで仕事をするのか線が引きにくい。
34	小学校	第1会議室	2	2	P T A役員	・学校とボランティアとの連絡調整 ・ボランティアの募集とバンク作成	・これまで行っていた連絡調整の時間を打合せや教材準備等につかうことができた。	・コーディネーターという立場が先生方にあまり把握されていないため、連絡調整に時間が必要
35	中学校区	資料室	1	4	P T A役員	・学校からの依頼を確認し、担当の先生から具体的な内容を把握、ボランティアとの連絡調整 ・活動広報のための資料作成 ・各種団体への働きかけ	・ボランティアにより、合唱練習では子どもたちがより明確な目標をもち、専門的なアドバイスがいただけた。	・教員とじっくり打合せができない。活動が十分に先生方に理解されていない。 ・ボランティアとの連絡調整の時間確保が大変である。
36	小学校	印刷室	必要に応じて	3	P T A役員ボランティア	・地域協議会に参加し、地域のボランティア情報を把握し、学校へ提供 ・ボランティアバンクづくり	・家庭科でミシンの使い方を効率的に指導でき、子どもの技能も向上した。	・学校のニーズにあうようなボランティアの確保が難しい。
37	小学校	印刷室	同上	3	P T A役員	・同上	・同上	・同上
38	小学校	相談室	1	2	P T A役員	・地域協議会が企画したイベントの講師との打合せ、案内の作成配布、参加者の募集	・学校・家庭・地域が協力し合い、学校教育や行事に関心を示すようになった。	・コーディネーター同士の活動の様子を知りたい。 ・パソコン作業が不慣れ
39	中学校区	小学校			元教員			
40	小学校	小会議室	2	2	P T A役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整	・ボランティアと子どもたちの仲が密になり、交流が広がった。	・先生方と打合せをする時間がなかなかとれない。
41	中学校区	町教委生涯学習担当	2	6	学支ボラ	・連絡調整の流れを検討中 ・ボランティア募集とバンクづくりに向け、チラシを作成中		・情報交換の場がほしい。
42	中学校	校長室			P T A役員地域役員	・連絡調整の流れを検討中 ・各種団体にボランティアとしての協力を依頼中		
43	小学校	P T A会議室	3	2	学支ボラ地域役員	・ボランティアを募集し人材バンクに登録 ・依頼により紹介	・家庭科室、理科室の環境整備ができた。 ・ボランティアが楽しいとやりがいを感じている。	・学習支援ではどの程度介入しているのか難しい点があり、担当の先生との打合せが重要である。 ・ボランティアが活動する際の留意事項を伝える場の企画
44	小学校	P T A会議室	不定期		P T A役員地域役員ボランティア	・同上	・同上	・同上
45	小学校	P T A会議室	3	2	P T A役員地域役員協議会事務局	・同上	・同上	・同上
46	小学校	P T A会議室	3	2	P T A役員地域役員協議会事務局	・同上	・同上	・同上

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
47	中学校区	地区内小学校	1	2	P T A 役員	・連絡調整の流れを検討中		
48	小学校	P T A 室	1	3	P T A 役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整 ・ボランティア活動後の「ふりかえりカード」作成	・資料作りボランティアによる道徳資料は授業参観で評判がよかった。 ・ボランティアと子どもが地域でありさつがしっかりできるようになった。	・コーディネーターの責任者を決めておくとうい。 ・謝金の割り当て方の指導
49	中学校	会議室	1	3	P T A 役員	・協議会の企画運営、学校と地域の要望を把握し研修会を企画立案し、参加の要請をする。	・そば打ち研修会を通して、地域住民とのかかわりがとれるようになり、地域の方々も交流を深めた。 ・地域の方々が学校行事に関心をもつようになった。	・一部の先生方だけではなく、全職員に活動や組織を理解してほしい。 ・行政は地域に情報を流してほしい。
50	中学校	会議室	1	3	P T A 役員	・同上	・同上	・同上 ・コーディネーターの仕事内容や活動の範囲がわからない。
51	中学校	会議室	1~2	3	P T A 役員	・同上	・同上 ・教員の負担が軽減し、子どもと向き合う時間が増えた。	・同上 ・学校側の窓口が一本化されていない。
52	中学校	会議室	不定期		P T A 役員	・同上	・同上	・同上 ・予算の執行を早く。
53	中学校	会議室	不定期		学支ボラ P T A 役員	・同上	・同上	・同上
54	中学校	会議室	不定期		P T A 役員	・同上	・同上	・同上 ・地域に情報を流していただきたい。
55	中学校	会議室	1	2~3	P T A 役員	・同上	・同上 ・地域の方が子どもたちへの関心を深めた。	・同上 ・先生方と打合わせの時間がとれない。
56	中学校	会議室	不定期		P T A 役員	・同上	・同上	・同上 ・コーディネーターとしての仕事の情報がほしい。
57	小学校	小会議室	2	2	学支ボラ P T A 役員	・地域協議会に参加し、学校の要望を確認、ボランティアの募集、打合せなど連絡調整 ・保護者、地域に向け広報紙作成	・ボランティアと子どもが地域で顔を合わせた時挨拶を交わすようになり、お褒めの言葉をいただいた。	・コーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。
58	小学校	司書室	2	3	P T A 役員	・地域協議会開催に向けて準備 ・学校側の具体的な要望を把握し、ボランティアとの調整 ・人材バンクの作成		・多くの人と情報を共有していきたい。
59	中学校区	資料室	1	4	P T A 役員	・学校からの依頼を確認し、担当の先生から具体的な内容を把握、ボランティアとの連絡調整 ・活動広報のための資料作成 ・各種団体への働きかけ	・合唱練習では、ボランティアにより、子どもたちがより明確な目標をもてるよう専門的なアドバイスがいただけた。	・教員とじっくり打合せができないうい。活動が十分に先生方に理解されていない。 ・ボランティアとの連絡調整の時間確保が大変
60	小学校	地域協議会室	1	3	P T A 役員	・準備・検討中	・学校の授業だけでは無理なことを楽しく学ぶ場ができた。	・ボランティアの数を増やしていきたい。
61	小学校	P T A 地域活動室	1	4	学支ボラ P T A 役員	・地域協議会に参加し、学校の依頼状況を確認、地域の各種団体にボランティアとしての協力依頼と情報提供をお願いする。	・花壇や樹木の整備をお願いしたところ、学校環境が整ってきた。 ・子どもの教育に地域も協力する気持ちが盛り上がりつつある。	・先生とじっくり話し合ったり、打合せをする時間がない。 ・情報交換の場がほしい。
62	小学校	P T A 会議室	1	3	学支ボラ P T A 役員 地域役員	・地域協議会に参加し、学校の依頼状況を確認、ボランティア募集、連絡調整、ボランティアの要望を学校へ伝える。	・教材作成支援により授業に貢献できた。 ・子どもにとっても成果となり地域の方にも励みになっている。	・学校から具体的な要望があると活動しやすい。 ・学校としての特徴を出したい。
63	小学校	小学校	1	2	P T A 役員 地域役員	・地域協議会に参加し、学校の依頼を確認、具体的な要望を担当から把握し、ボランティアと打合せ	・生活科の授業では、ボランティアの学習支援により子どもたち一人ひとりに指導ができた。	・先生方に活動が認識されていない。 ・ボランティアの確保
64	小学校	小学校	1	2	学支ボラ P T A 役員	・同上	・同上	・同上
65	小学校	小学校	1	2	学支ボラ P T A 役員	・同上	・同上	・同上
66	中学校	学習準備室	2	3	P T A 役員 地域役員 ボランティア	・地域協議会に参加し、学校の依頼を確認、具体的な要望を担当から把握し、ボランティア募集・調整	・地域でボランティアと子どもの挨拶が増えた。	・情報交換の場がほしい。
67	中学校				P T A 役員 元教員			
68	中学校	会議室	1	3	学支ボラ P T A 役員	・流れを検討中 ・地域の各種団体に協力依頼と情報提供をお願いしている。		・ゼロからの出発なので不安がある。
69	中学校	会議室	3	3	学支ボラ 地域役員	・学校側と検討中		
70	小学校	協議会事務局室（校内）	1	3	学支ボラ P T A 役員	・1 2 月までに行った活動を整理しながら、今後の連絡調整の流れを検討中	・夏休みの作品整理支援では、教員の負担が軽減され、参加したボランティアも教員理解につながった。 ・趣旨を理解してもらうために行ったイベントで、普段学校と縁のなかった地域住民が子どもと接する機会をもてた。	・今年度はイベント的になってしまったが、今年度かかわってくれた人たちへの説明。 ・諸活動のための時間確保。

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
71	中学校	校長室	1	1	P T A役員	・地域協議会に参加し、学校の依頼状況を確認、該当するボランティアを調査中 ・各種会合時に制度を説明、人材バンク登録を呼びかけている。	・例年かなりの日数をかけて教職員だけで行っていた落ち葉さらいは、ボランティアに依頼した。	・年度当初から支援計画をたてておく調整しやすいのでは。 ・制度に対する研修の機会を増やすべきではないか。
72	中学校	中学校学区	必要に応じて		元教員	・組織作り、コーディネーターについて研修、学校の教育内容について学校側から説明を聞く。		
73	中学校	事務室	2	3	P T A役員	・流れを検討中 ・ボランティア募集とバンクづくりに向けチラシ作成中	・子どもたちの経験や興味が広がった。	・先生方とじっくり話し合ったり打合せをする時間がとれたらよい。 ・情報交換
74	中学校	事務室	2	3	P T A役員	・同上	・同上	・小学校とちがい、授業時間の中に入るのが難しい。
75	小学校	会議室			地域役員		・地域との連携で運動会を実施 ・地域と協働で実施している祭りへの参加団体が拡大	・学校と情報交換を密にする。 ・各地域の活動内容を知らせてほしい。
76	小学校	P T A室	1	3	P T A役員 ボランティア	・地域協議会で現状把握し、必要があれば関係団体との連絡調整を行い、支援を行う。	・子どもたちに体験活動を提供できた。	・行政の窓口が多くてわかりにくい。
77	小学校	職員室	不定期		P T A事務	・従来の活動をどうコーディネートしていくか、ボランティアの拡充に向け検討中	・校外学習において児童の安全確保に役立った。 ・安全ボランティア自ら会議を開いて活動を広げている。	・学校や先生方の間に入ることでより手間をかけることがある。
78	中学校	事務室	2	3	元P T A役員 地域役員	・協議会だより作成、ボランティア募集のチラシ、アンケート作成	・ボランティアと子どもが一緒に活動して挨拶を交わすようになった。	・コーディネーターとしての役割を先生方に理解してもらえない。 ・地区内の情報交換
79	小学校		3	3	地域役員			
80	中学校区	公民館	2	1	社会教育指導員	・人材バンクの作成	・ボランティアと子どもが一緒に活動して挨拶を交わすようになった。	
81	中学校区	町体育館事務室・談話室			P T A役員 地域役員 団体代表	・定期的に学校側と意見交換 ・本部内の担当校の違うコーディネーターとの情報交換を行う。	・ボランティアさらにニーズにあったボランティアの発掘 ・学校と地域が一体になり地域の教育力の向上	・学校により温度差がある。学校とコーディネーターの情報交換ができるとよい。 ・校内に自由に使える場所や掲示コーナーがあるとよい。
82	中学校区	小学校	1	2		・同上		・学校がコーディネーターを有効活用していただけるとよい。
83	中学校区		随時		学支ボラ 地域役員 学校評議員	・定期的に訪問し学校側の要望や予定を聞く。生涯学習課職員から依頼を受け、学校側と打合せ後、ボランティアに依頼、調整	・総合学習の授業で体験活動を取り入れたことで関心が高まった。講師や関係機関への依頼を学校がやらなくてすむ。	・実施日程が1ヶ月くらい前にわかっていると準備しやすい。 ・ボランティアの確保
84	中学校区		2~3	2	P T A役員 地域役員	・学校から依頼を受けたら連絡を取り合い要望に応える。 ・自分自身がボランティアに行った時、学校側と連絡をとっている。	・先生方の理解が得られてきた。	
85	中学校区	中学校 1 小学校			学支ボラ P T A役員 地域役員 元教員	・教諭からの依頼にボランティアを紹介、連絡調整、必要に応じて打合せに参加、実施後事務局へ報告 ・ボランティアへの礼状作成	・教諭の感想を受け成果をみているが、指導支援に活かされたと思える。 ・地域の人たちが進んで生き生きと支援に参加している。	・学校とボランティアの円滑な人間関係が保てるよう努めたい。 ・ボランティアの交流の時間
86	中学校区	中学校 1 小学校	随時		学支ボラ P T A役員 地区役員	・定期的に学校側と意見交換 ・本部内の担当校の違うコーディネーターとの情報交換を行う。		
87	小学校	P T A室	2~3	4	学支ボラ P T A役員	・地域協議会に関する仕事中心、流 れは検討中	・下校時の児童の安全確保ができるようになった。	
88	小学校	P T A室	2~3	4	P T A役員	・同上	・同上	
89	小学校	P T A室	2~3	4	P T A役員	・同上	・同上	
90	小学校	会議室	2	3	学支ボラ 地域ボラ	・安全パトロールについて検討し、ボランティアと学校側の連絡調整	・読み聞かせでは、読書に対する意識が高まった。 ・地域と子どもたちの交流	・ボランティアの確保 ・連絡調整をスムーズに
91	小学校	会議室	1	2	P T A役員 地域役員	・ボランティア募集済み ・安全パトロール隊を組織活動開始		
92	小学校	会議室 地域開放室	1	3	P T A役員	・地域協議会だよりとボランティア募集のチラシ作成	・郷土資料室の整備 ・防犯パトロールにより安全確保	
93	中学校区	資料室	1	4	P T A役員	・学校からの依頼を確認し、担当の先生から具体的な内容を把握、ボランティアとの連絡調整 ・活動広報のための資料作成 ・各種団体への働きかけ	・ボランティアにより、合唱練習では子どもたちがより明確な目標を持ち、専門的なアドバイスがいただけた。	・教員とじっくり打合せができない。活動が十分に先生方に理解されていない。 ・ボランティアへ事前に留意事項などを伝達する時間の確保
94	中学校区	資料室	1	4	P T A役員	・学校からの依頼を確認し、担当の先生から具体的な内容を把握、ボランティアとの連絡調整 ・活動広報のための資料作成 ・ボランティア入校に際しての各種用紙作成	・職業を持ちながら合唱を楽しむ方たちと接することで、地域の人との人間関係や生き方を知ってもらいたい。 ・ボランティアにも地域とのかかわりの一歩になってほしい。	・ボランティアがボランティアの域を超えてしまいそうになることがある。 ・学校側の活動に対する認識が不足しているのでその溝をうめたい。
95	小学校	地域開放室	0.5	3	P T A役員 地域役員 子ども教室 関係者	・地域協議会に参加し、依頼状況を確認、連絡調整 ・活動状況の広報	・授業内容に変化が見られる。 ・子どもがボランティアに声をかけ、会話をするようになった。 ・ボランティア同士の交流が深まった。	・どこまで活動を広げてよいのか。 ・研修に欠席の場合、内容を知らせてほしい。

コーディネーター回答一覧：青森県

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
1	教育委員会	町立図書館	2~3	4~6	元教員	・社会教育主事、各実施校教頭との連携をとる。 ・次年度の計画は実施校と早めに連絡調整して、ボランティアとの連携を密にして、充実した活動にしたい。	・地域の住民が頻繁に校内に出入りするようになり、教師・児童とも従来とは違う雰囲気の中、あいさつ等交流の機会が多くなった。また、地域住民への関心も深まってきていること。 ・教育現場を取り巻く課題について、地域全体で関心を示し、話題にしたり、積極的に支援に参加したりする意欲を示し始めたこと。積極的に協力する人材が発掘できたこと。	・学校にはいろいろな背景があり、その把握には時間がかかった。2校並行して行われる事業だが、最初から同じ目標を立てて実施してきたが、途中で路線を変更せざるを得なかった。 ・同時に実施されている学校支援との関連事業の情報の明確化と、重複する領域の連携や調整が必要
2	地区学校支援地域本部	公民館	2.5	4	学校支援コーディネーター 子育てサポーター	・教育委員会と学校へ出向き、事業説明と協力・活用を教職員にアピールする。 ・地域教育協議会では、事業状況、旬の町情報や意見、展望、要望が話し合いとなる。 ・学校側からの活動希望一覧にそってボランティアとの打合せ、段取り、調整を行う。具体的に動くことにより、活用の仕方や参加者の意識を育てたい。 ・広報紙や支援センターだよりを作成し、毎戸配布、掲示し活動の浸透を図る。	・ボランティアがかかわることで学校と地域が共同する形がみえる。 ・校外学習に対応することで、教職員の負担が軽減されることと、より発展した授業が考えられる。 ・学校外での活動から、身近なことでボランティアに参加できることがわかった。 ・今年度の活動を振り返り、次回への、興味がうかがえる。	・学校との打合せや話し合いを迅速、簡潔にしたい。 ・年度始めから計画的に動きたい。 ・活動の予算の咀嚼をはっきりしてほしい。ころころ変化は困る。 ・ボランティアで活動する際の留意事項や注意することを伝える場面を作りたい。
3	地区学校支援地域本部	公民館	2.5	4	子供教室安全管理員	同上	・校長先生はじめ、学校側がとても快くコーディネーターの存在を理解していただけたのでスムーズに学校に出入りできるようになり、子どもたちからも声をかけてもらえるようになった。 ・地域の方々がボランティアを終えた後、「こんなことなら私にもできるので、また機会があれば参加します。」との声に子供たちを見守る地域の方が増えてきたなど実感した。	・来年の学校の予定にはコーディネーターの時間を組み入れてもらえるよう、早くから打合せできればよいのではないか。 ・すべてがボランティアというのは難しいので、いくらかの予算を。
4	地区学校支援地域本部	町教育事務所	2	4	学支ボラ地域役員 元教員	1.部活指導 ①学校からの要請→個人で受ける→実践 ②父母からの要請→監督、学校からの許可→実践 2.読み聞かせボランティア 父母からの要請→学校との交渉と学校の許可を得る→ボランティアの募集と会員の話し合い→学校との調整→実践	先生方が忙しいときに、いろいろな面で大いに役立っていると思います。 ・学校では窓口を1つにして対応してくれている。 ・呼びかけに対して、応じてくれる方がいた。	・人材が少ない。地域の方へコーディネーターとしてのPRが必要
5	地区学校支援地域本部	公民館	2	4	PTA 役員	コーディネーター → 地域の橋渡し → 小学校 ・ボランティアに用件等のチラシを配布 ・地域内に情報やボランティアの活動状況を知らせる。 ・学校は随時学校通信等にボランティアの活動を掲載する。	・三世代で同居する児童は少ない。子どもたちがお年寄りから、生活の知恵や工夫を学ぶ機会にしたい。 ・子どもがいないと学校に行くことはなかったが、住民同士の交流になった。 ・今まで以上に子どもたちがボランティアの顔を見ると大きな声で挨拶を交わすようになりました。 ・単にボランティアをするだけでなく、学校で児童と窓ふきをするなど一緒に活動できたらよい。	・先生方とじっくり話し合ったり、打合せをしたりする時間がとれない。 ・他の活動の様子を知りたく研修会等で意見交換しても、あまり参考にならない会話が多いように思われます。 ・ボランティアに登録しなくても協力してくれる人が多く、どうやって登録してもらったらよいか考える。
6	中学校	公民館、町教育委員会	3	3	地域役員 PTA 役員 NPO 子育てサポーター	・学校からの依頼はないので、積極的に出かけて話し合います。話の中に出てきたことを拾い集めて、かかわれそうなことを提案しています。中学校は容易に組み込めません。担当職員がいろいろアドバイスしてくれ、とても助かっています。	・これまで PTA や教師がしていた雑務をボランティアが入ることで負担が軽減されたと思う。地域の人がかかわることで活性化されると期待します。 ・「学校には協力するもの」という意識が強いことに感心しました。子どもたちを見つめる「まなざし」がとても優しい。始まったばかりで成果らしいものは、はっきりしませんが継続することによって、はっきりしてくれると思います。	・教頭先生を窓口としながらも、他の先生とも話し合い、要望を引き出したい。 ・ボランティア人口を増やすために、広報やチラシを活用して呼びかけたい。 ・あらゆる団体に、宣伝、協力を依頼。
7	小学校	町教育委員会	3	3	地域役員 PTA 役員 NPO 子育てサポーター	・学校に学校支援ボランティア依頼状況を確認する。 ・学校行事予定をチェックし支援可能と思われる部分を検討してもらう。 ・要望に該当したら、担当者に報告し、ボランティアの方と打合せ時期等の段取りを決める。 ・学校とボランティアの調整を行う。ボランティアと同行し、記録写真を撮る。 ・随時学校側からの要望で調整する。	・毛筆指導でボランティアの方が学習支援に入り、姿勢、筆の使い方など基本から指導でき、子ども達の上達が著しい。子ども達も授業が楽しいと大変意欲的に取り組んでいる。 ・子ども達、先生方が支援者に元気に挨拶を交わしてくれる。学校外でもお互いの声かけが活発となる。 ・読み聞かせの会も本の配架や整理等も申し出てくれるようになった。 ・ボランティアの人達が（読み聞かせなど）スキルアップを図っている。 ・校長、教頭とも大変この事業に理解を示してくれる。地域の方とのコミュニケーションも積極的で活動しやすい雰囲気である。	・要望をどんどん取り入れたいので、打ち合わせ、振り返りの時間を出来る限り設けたい。 ・PTA 活動に入り込みすぎないように、学校側、PTA 会長とも十分情報交換したい。 ・近隣町村とのコーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。 ・学校で活動している様子を掲載した情報紙を作成したい。
8	村学校支援地域本部	村立ふるさと総合センター	5	4	PTA 役員	・学校支援ボランティア募集とバンクづくりに向けチラシを作成し、小中学校と村の回覧で呼びかけをしている。	・放課後、部活動の付き添いに費やされていた時間を子ども達や教員の仕事に生かすことができた。 ・学校外での交流も見られるようになった。 ・学校との連絡・連携がうまくいっていると思われるためか、センター子ども教室での参加者が多い。	・先生との話し合い・打合せのタイミングがうまくつかめない。 ・頑張っているだけで特にない。 ・ボランティアの確保が難しい。

No.	学校種	活動拠点	日数	時間	前職・経験	コーディネート活動の概要	成 果	課 題
9	小学校	図書室	3	4	教委付コーディネーター	・直接学校側にお手伝いすることがないか確認。依頼を受け具体的な打合せをしボランティアに連絡。終了後は学校とボランティア両方から話を聞き、次回へつなげる。	・ゲストティーチャーを呼ぶことにより、学校、子どもにも良い刺激になった。 ・ボランティアの方々がとても喜んでいる（挨拶や心のこもったプレゼントをもらい）子どもたちとかわりがもてるようになり活動的になった。	・先生方と話をする時間がなかなかとれない。 ・まだまだコーディネーターについての認知不足が補えない。 ・学校側にアピールをしてほしい。
10	小学校	図書室	3	4	パート	・学校ボランティア募集中 ・学校とも話し合い、新しい活動など考え、ボランティア収集につなげたい。	・校外学習などボランティアの人達が何人かいることで、怪我などの事故がなく活動ができた。 ・子ども達もボランティアとかわることで、学校外で会った時でも、元気にあいさつをしてくれる子が増えた。	
11	小学校	図書室	3	4	PTA		・家庭科でボランティアの方々が学習支援に入り、ミシンの使い方等を効率的に指導でき、ミシンの苦手な子も、技術が向上したと思う。 ・調理実習では、学年が2年生という事もあり、火傷などの事故に十分な注意を払い、楽しく調理し、笑顔で仲良く試食した。 ・コーディネーターとしての認知度は上がってきたが、まだまだこれからという感じです。	・先生方に報告したり、物事を進めたりしていく中で相談をすることはあるが、じっくり腹を割って話すことがない。忙しそうです。 ・コーディネーター同士で、情報交換する場所が月1回しかない。他の学校はどうしているのか。自分の学校支援の進行状態は大丈夫か？と思う。打合せで、報告しあったり、助言したりする場（時間）もあるとよい。 ・特に秋は学校からのボランティアの要求も多く、図書の整理、管理まで手が及ばない。
12	小学校	図書室	3	4	PTA NPO、ボランティア		・家庭科実習（調理・ミシン補助）はグループに分かれるので、先生一人よりも、保護者、ボランティアの方に付き添ってもらえることで、授業もスムーズに運べることでできた。 ・保護者ではない方から行事があったら教えて！！と声をかけていただけるようになった。	・いつ、どこで、誰が、何を、どのようにどうするのかを明示できるように、窓口の先生よりは、担当の先生と直接話し合いが必要。 ・月1回の打合せをそのまま継続してほしい。 ・町内、他小学校の状況を参考にできる。
13	小学校	小学校	1	2	地域役員 PTA 役員	・コーディネーター二人と教頭で今年度の活動案作成 ・地域教育協議会で活動方針・計画等の協議 ・協議会の企画部会で地域交流会等の活動具体化	・学校の公開授業研究会で来校者の案内等、学校側だけでは手薄になる部分で協力者を募って受入体制を整えることができた。 ・地域交流会で地域活動を熱心に行っている団体を紹介できたことで、啓発になったと思う。 ・地域交流会で、協議会会長からこの事業の趣旨について丁寧に説明があり、協力を求める機会を持てたことがよかった。	・学校側の窓口がはっきりしているので特に問題はない。 ・2年目以降については、町や県での会議に招集される機会を少なくして学校区のコーディネート活動に集中させてほしい。 ・本校のコーディネーターは二人とも仕事を持っているため、退職したコーディネーターと同様にできないことを理解してほしい。
14	小学校	小学校	1	2	地域役員 PTA 役員	同上	同上	同上
15	小学校	小学校 公民館		8	元教員	①個々の依頼状況について学校側の担当と連絡を取り合い具体的な要望、内容を把握する。 ②担当するボランティアと打合せ時期等の段取りを決め、学校とボランティアの調整を行う。 ③その他にも、学校側からの要望で連絡、調整を行う。 ④コーディネーターセンターに配属されていることにより、町内全体の連絡、調整、相談に応じる。	・これまで教員がすすめてきた学習の準備、内容、かわりをコーディネーターとして準備等にかかわることができた。 ・地域の方々に事業の趣旨を理解してもらうことができた。できれば、プログラムバンク的な活動になればよいと思う。	
16	小学校	小学校	2	2	地域役員 PTA 役員	・学校側の学校支援ボランティア依頼状況について、具体的な要望を把握し、窓口となっている教頭と打合せをした上で、該当するボランティアと打合せ時期を決め、学校とボランティアの調整を行う。	・ボランティア普及のための講習会開催により、学校の環境整備面が充実するとともに、少ない人数ではあったがボランティアへの意識を高める効果があった。 ・ボランティアの方々が、地域の子どもの教育のために支援するいい機会になっている。	・当事業の教職員の理解を得られるまでに、まだ時間を要する。 ・コーディネーター同士の情報交換の場を多くしてほしい。
17	小学校	小学校 公民館	5	8	前教育次長	・町公民館に、コーディネーターセンターを立ち上げ、ボランティア、ゲストティーチャー、行事予定、企画等学校との連絡調整を行う。他にコーディネーター間の情報交換、相談等も行っている。	・校外フィールドワークを実施する場合、その手段・方法・場所・人を知らない教師のために助力できた。 ・コーディネーターを積極的に使ってみようという姿勢が教師の中に出て来ている。 ・「学校のためなら」「子どもたちのためなら」という地域の方々の応援を得られやすくなった。 ・公民館にコーディネーターセンターを立ち上げたことによりコーディネーターがお互いに情報交換したり悩みを相談したりできるようになっている。	・一般の先生方の理解を得られるまでに時間を要する。 ・予算の使い方が学校でつかいやすいというところまで至ってなかった。工夫を要する。 ・プログラムバンク（コーディネーターメニュー）を持っていなかったため早急に作るべきだった。
18	小学校	小学校 公民館	5	4	元教員	・学校側の学校支援ボランティア依頼状況を確認し、個々の依頼状況について、学校側の担当と連絡を取り合い、具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打ち合わせ時期等を決め、学校とボランティアの調整を行う。 ・既存の地域連携行事や事業の継続、発展のため、地域の各種団体に学校	・学校支援ボランティア講習会開催により、環境整備面においては実施後、学校環境に変容が見られ、とても効果的であった。 ・家庭科のミシン縫いや調理、国語科の書写等における学習支援ボランティアの指導により学習効果がアップし、子どもたちの意欲向上にもつながった。	・先生方のニーズ等をゆっくり聞いたり、話し合う時間を確保したい。 ・コーディネートする上での諸問題をコーディネーター（行政担当者含む）同士で情報交換する機会を多く設けてほしい。 ・既存の PTA 事業と学校支援地域本部事業との兼ね合いをどのようにコーディネートすればいいのか。

						支援ボランティアの協力依頼と情報交換をお願いしている。	・ボランティアの方々が子どもたちの教育のために支援していることを理解するいい機会になった。 ・ボランティアと子どもたちが、地域で顔を合わせた時、気軽に声をかけ、あいさつを交わし、交流が持てるようになった。	
19	中学校	中学校	2	2	PTA 役員	・学校側の学校支援ボランティア依頼状況について、具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打合せ時期を決め、学校とボランティアの調整を行う。	・ボランティア普及のための講習会開催により、学校の環境整備面が充実するとともに、少ない人数ではあったがボランティアへの意識を高揚するのに効果があった。 ・ボランティアの方々が、地域の中学生のために支援するいい機会になっている。	・先生方のニーズ等をゆっくり聞いたり、話し合う時間の確保が難しい。 ・コーディネーター同士の情報交換の場を多くしてほしい。
20	小学校	小学校	2	2	地域役員	同上	・ボランティア育成のための講習会開催により、特に学校の環境整備面が充実するとともに、少ない人数ではあったがボランティアへの意識を高めるのに効果があった。 ・「地域の子ども達を地域で育てよう。」とする具体的なスタートとなった。	・先生方のニーズ等をゆっくり聞いたり、話し合う時間を確保したい。 ・コーディネーター同士の情報交換の場を多くしてほしい。
21	小学校	公民館	1	3	PTA 役員	・学校側の学校支援ボランティア依頼を確認する。 ・学校側の担当者と連絡を取り合い、具体的な要望を把握し、地域の各種団体に学校支援ボランティアとしての協力依頼をお願いする。 ・学校支援ボランティアの活動状況を紹介する新聞を作成し、各学校や保護者へ配布し、村内へ回覧する。	・総合的な学習では、学校田稲刈りにボランティア（地域老人クラブ）の方々が入り、カマの使い方や棒がけ作業などを指導、手伝うなど、効率的に活動が進められた。また、老人クラブの方々と子どもたちのふれあいは異世代交流のよい機会になっていた。 ・稲刈りは、老人クラブの方々にとって長年の経験を生かせる慣れた作業であったため、学校へ出入りすることへの抵抗や面倒な打合せの必要もなく、スムーズに協力してもらうことが出来た。	・すでにボランティアを十分活用している学校は、今のところ新たな支援の要望はなく、コーディネートの機会もない。コーディネーターからボランティアの活用を促すことはせず、要望があればコーディネートするというスタンスでいいのではないかな。
22	中学校 小学校	公民館	1	3	学支ボラ 元教育委員 会職員 社会教育主 事	・地域教育協議会に出席し、学校側の支援依頼状況を確認する。 ・地域の老人クラブ、社会福祉協議会の活動、村より委嘱されている委員の情報収集等を行い、学校側からの要望との調整を行う。 ・学校支援ボランティアの活動状況を紹介する新聞を作成し、各学校や保護者へ配布し、村内へ回覧する。	・中学校では放課後の部活動でボランティアが専門的に指導を熱心に行っており、生徒の技能も上達している。一方、教員は放課後の教材研究の時間が確保できている。 ・小学校では花植えや読み聞かせなど、ボランティアの経験、専門性を生かした支援により、多様な学習機会の提供、学習意欲の向上につながっている。 ・ボランティアとして学校に行くことにより、子どもや先生方とも親しくあいさつや会話ができるようになった。	・日常の活動では学校担当教員との連絡調整がほとんどで、他の教員から直接要望を聞くことができない。
23	地域教育力推進協議会	町教育委員会生涯学習課	2	8	元教員	①定期的に行われる町地域教育力推進協議会等の会議に参加し、学校側の学校支援ボランティア活動やボランティア依頼状況等を確認するための訪問を実施 ②個々の依頼があった場合は、学校側の担当と連絡を取り合い具体的な要望等を把握し、該当するボランティア・団体責任者と打合せ実施時期等の段取りを決め、学校とボランティアの調整を行う。 ③実施日には、情報紙の取材も兼ねて必ず参加するようにしている。	・受入体制ができている学校では、学校支援を活用し、自校の特色をだして学校活性化につなげている。また、学校支援の方々とかわりをもて子どもたちは喜び、教員も感謝の姿勢がみられてきた。 ・一方支援者たちも、学校と子どもたちのために役立ててよかったと三者の喜びを確認できるのはコーディネーターの励みになると思います。	・学校では、窓口になっている担当者の仕事が増えて大変であるという受け止め方をしています。窓口となる担当者の事務的負担軽減を最優先することを心掛けることが必要である。 ・同じ内容で学校に行っても、学校の受入体制や対応は、学校によってそれぞれ違います。受け入れる学校の事情を常に配慮した上で支援していかねばならない。事前に十分な説明と連絡を誠意を持って対応することを怠らないこと。
24	町地域教育力推進協議会	町教育委員会生涯学習課		30 / 週	PTA 役員	・定期的に行われる町地域教育力推進協議会等の会議に参加し、学校側の学校支援ボランティア活動やボランティア依頼状況等を確認するための訪問を実施。 ・実施日には、情報紙の取材も兼ねて必ず参加するようにしている。	・小学校の図書ボランティアが、少しずつですが、活動が始まってきています。 ・中学校でも始めようと動き出しそうです。	・学校とかかわり、先生方の業務を軽減するには、拠点を学校に置いた方がいいのではないかと思います。 ・町の人材を知らなければいけないと思いますが、他の町村のコーディネーターさんと交流を持って実情を交換したいです。
25	市地区学校支援地域本部	小学校ボランティア室	1~2	3	学支ボラ	・学校側よりボランティアの要請、依頼があった場合、内容状況等を確認し、地域のボランティアに連絡、担当できる者の調整や打合せ、段取り等を決める。 ・学校側から具体的な内容や要望等も把握し、該当するボランティアの不安などがないように動く。活動状況は定期的に地域教育協議会を開催したり、ボランティア広報紙等も発行し、地域や保護者、担当学校区に広く情報を公開している。	・教科にコース別学習を取り入れて少人数でじっくり学習できる環境が整い、それにもなつてやはり全体の学力も確実に上がってきました。又、先生方への支援も徐々に出来るようになってきているので、よくコミュニケーションもとれるようになってきました。 ・学校区内の地域全域に回覧するよう、年に数回、ボランティア活動の様子や学校の児童生徒の活躍の様子を広報していますがだんだんと皆が学校に意識を向けてくれるようになったことです。 ・普段の子ども達（児童生徒達）に目を向け、気に掛けてくれる様子が地域のシルバー世代の方々に見受けられるので大変うれしく思います。	・当本部では問題ありませんが一番多くあげられるのは、担当窓口教員以外の教職員にどのように理解（学校支援）してもらうか、コミュニケーションの取り方がわからない、取れないということだと思います。 ・まず、地域本部を設置、指定する学校に事業の趣旨、内容をしっかり説明し、理解してもらうこと、うわべだけの数あわせでは何にも成果はでません。 ・コーディネーターに対しては養成講座のみならず、スキルアップ研修のような研鑽をつむ場もあればよいと思います。
26	小学校	小学校ボランティア室	1~2	3	学支ボラ	・定期的にボランティアルームだよりを発行し PTA、地域の方々にボランティアの状況などを紹介している。	・ドリル丸つけー成績が向上した。 ・校外学習引率ー安全により多くの場所を見学することが出来た。 ・地域の方が学校に（学校畑、お楽しみ交流会など）関心を持ってくれるようになった。	・さらに一歩進んだコーディネーター活動の研修をしてほしい。

27	小学校	小学校					・朝のあわただしい時間に読み聞かせをし、子ども達がゆったりとした気持ちで授業にのぞめる。 ・父兄と子ども達とのコミュニケーションがとりやすくなった。	・学校、地域のそれぞれの特性を理解していただければと思います。 ・地域にどんな方々がいるのか知ること。
28	小学校	小学校	0.5	2	その他	同上	・学校側の要望に応じた支援が行われた。	・学校の要望とボランティアの活動する時間帯や人数などを明確にする。 ・通帳をつくるのが面倒、転勤が多いので印鑑などがたくさん必要で、処理が面倒である。 ・地域の人がもっと参加してほしい。
29	中学校	中学校	5	4	臨時講師	・教頭及び教務主任に学校支援ボランティア依頼状況を確認する。 ・個々の依頼状況について学校側の担当と連絡を取り合い具体的な要望を把握する。 ・該当するボランティアと連絡を取り、学校とボランティアの調整を行う。	・部活動においてはその競技の専門的な知識、技能を持つ方に指導してもらうことで子どもたちの技術が向上した。 ・特別活動では、物的な準備を手伝うことで、教員が生徒と共に活動する時間を増やすことができた。 ・ボランティア支援者が地域の人にも声をかけてくれることで、学校の活動に関心を持つ人が増えた。	・ボランティア支援者にどのような活動をお願いするかという、学校としての方針ははっきりしていない。 ・他のコーディネーターの活動の様子を知りたいので、コーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。 ・ボランティアを希望する人の数がまだ少ない。 ・ボランティアと学校との時間調整が難しい。
30	小学校	小学校	5	2~3	臨時講師	・学校側の窓口教員や教頭と学校支援ボランティアの依頼をするかどうかを確認する。個々の依頼に合うようにボランティアから参加者を募り、活動時間と活動内容の段取りを大まかに打合せをする。 ・活動の内容により、ボランティアの増員や時間帯の変更調整も行う。	・茶道の専門家とボランティアが活動を請け負い、教諭が時間を有効に使えて、児童の学習に深みが増した。 ・学校周辺のボランティアならば、地域の方がボランティアとして活動に参加しやすいことがわかった。	・閉校となるので課題はない。 ・学校と地域の両方にコーディネーター役を置いてもらえると人材の発掘、連絡調整にも便利なので是非お願いしたい。 ・学校と住居地の距離が遠くなると、これまでのようなボランティア参加は期待できない。 ・ボランティアのためのボランティア募集ではなく、PTA 活動とかわりがないということを地域に広く知ってもらう。
31	中学校	中学校	2	5	地域各種団体役員 PTA 役員 学校評議員	同上	・子ども達と向き合う時間が増えたので、あいさつなど生徒から声をかけてくれるようになった。 ・資料作成など「手伝い」をすることで、先生方の仕事が軽減できるのでよかったです。 ・学校と地域の人のつながりができて、孫のために！など、学校へ誘いやすくなった。 ・アイディアを出したり工夫したりできる人達がたくさんいるので、声をかけると、心良く思ってくれるし喜んでくれる。	・先生方の仕事の大変さもわかったので、できることから協力していきたいと思います。 ・質問などに対してははっきりとした返事で対応してほしい。 ・担当の方々はだれもが意見や答えを同じにできるように話し合いをきちんとしてほしい。 ・登録ボランティアを増やして、活動の機会を増やしていきたいと思います。
32	中学校	コーディネータールーム	2	6	PTA 役員 地域各種団体役員 NPO、ボランティア PTA 事務職員	・地域連絡協議会（地域教育協議会）の下部組織に 4 つのプロジェクトがある（教育活動プロジェクト、図書館支援プロジェクト、環境支援プロジェクト、情報発信プロジェクト）それぞれのプロジェクトの活動に必要な案内文などを作成し、配布する。（保護者、地域） ・人数が不足の場合は、個別に連絡をとる。（それぞれのプロジェクトから依頼がくる） ・教職員からの依頼に応じて適性な人材を探す。	・教師の専門分野以外の協力で生徒に還元できる。 ・教師の仕事を軽減することにより（資料の作成の手伝いなど）子ども達と昼休み、放課後などに向きあう時間が増えた。 ・図書ボランティアの活動により図書館が格段に使いやすくなった。 ・支援ボランティアの方々がやりがいを感じて活動している。（生きがいになった。）	・本来のコーディネーター以外の仕事もあり、よい面も困った面もある。（よい面：教職員の助けになるので仲間意識が芽生えいろいろな場面で助かる。悪い面：コーディネーター本来の仕事の時間が足りなくなることがある。） ・質問などに対して迅速な対応をお願いしたい。 ・登録ボランティアを増やし、活動の機会を増やさないと私たちの仕事も増えていけないので、努力をすること。
33	小学校	集会室	3	4	PTA 役員	・学校側の担当と連絡を取り合い、具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打合せなどし、学校とボランティアの調整を行う。その他随時学校側からの要望で調整を行う。 ・学校支援ボランティア募集とバンクづくりに向けチラシを作成し、地域に配布し情報を収集中 ・図書支援研修会を実施し、随時活動できるよう図書館協力員と連携しながら活動中	・図書支援研修会を行ったおかげで自主的にボランティア活動をしているという意識が高まってきた。 ・少しずつではあるが地域の方にコーディネーターとして顔を知っていただけた。	・学校支援に関してはまだ教員との連携がとれていないのでなかなか実行することができない。これからのように行っていくか課題である。 ・学校が求めているボランティアがなかなか決まらず綿密な打合せ等ができない ・他の地域コーディネーターと活動の情報交換の場をつくってほしい。 ・予算の使い方などをもっとわかりやすくしてほしい。
34	小学校	集会室	3	4	PTA 役員	同上	・図書支援ボランティア養成講座を行ったことにより、積極的に活動に取り組もうとする姿が見られた。 ・既存のボランティア（おじさん・おばさん）の方達に登録していただき、保険に加入したことで、安心して活動に来ていただけるようになったこと。	・学習支援活動には、まだ取り組めていないのが現状である。また、学校側が必要とするボランティアも十分には集まっていない。 ・消耗品の購入に関して、リストを送ってから直接配達というのは、時間がかかり、金額も把握できない。予算の管理が難しい。 ・地域への周知がまだ十分ではない。また、地域団体等の把握もまだきちんとできていない。
35	小学校	印刷室	3	4	学校評議員	・学校支援ボランティア募集とバンクづくりに向けチラシの作成と配布をした。 ・ボランティア登録の協力を個別に電話でお願いした。 ・学校側からのボランティア依頼状況を確認する。個々の依頼状況について学校担当者と連絡を取り合い具体的な要望を把握し、該当するボランティアとの調整を行う。	・ボランティアが入ることにより、校外調べ学習や調理実習が事故もなく安全に行うことができた。 ・ボランティアと子ども達が仲良くなり心のふれあいが見えてきた。 ・地域の人達が入ることにより刺激になり、子ども達が意欲的に活動に取り組むようになった。	・学校主体の事業になっているので、事務処理等、徐々に移行していかなければならない。 ・市内のコーディネーターの活動状況が知りたいので、情報交換の場を設けてほしい。

36	小学校	印刷室	3	4	学校評議員	同上	同上	同上
37	小学校	地域連携室	3	4	地域各種団体役員 元PTA役員 元臨時技能主事	・定期的に行われる地域教育協議会の会議に参加し、学校側の学校支援ボランティア依頼状況を確認する。 ・依頼状況について、教員から具体的な要望を把握し、ボランティアの紹介や募集を行う。また学校と地域との情報の共有を図るためにお便りの発行を行う。ボランティアや地域からの情報を学校に伝え、関係者に連絡し、事後の状況を記録する。	・校外学習の児童引率時、教員だけでは十分な安全確保が困難なところをボランティア同行により、安全確保が得られた。 ・地域の歴史や文化についての学習時、講師依頼にあたり地域の人材情報を提供し、教員や子供たちの作業時間を軽減することができた。 ・子供たちが地域の方々とかかわる機会が増すことで地域に対する関心度が高まった。 ・情報提供のためのお便りの発行により、地域の人たちから学校に対する関心度が高められるようだ。	・ボランティアをすることに負担感を持たれないよう配慮したい。 ・広い人材確保に努めたい。 ・ボランティアとの連絡のための時間確保が難しい。(主に夜間になる) ・募集依頼した立場上、ボランティア活動に参加やかかわる範囲に悩む。
38	小学校	地域連携室	2	2	PTA役員	同上	同上	同上
39	中学校	公民館	2	4	学支ボラ 地域各種団体役員 PTA役員	・学校側の学校支援ボランティアの要請を把握する。 ↓ 個々の依頼を受け、担当教員と打合せをして、ボランティアと交渉する。 ↓ ボランティアの承諾を得て、派遣する ・ボランティアの募集、情報発信は公民館だより等でお知らせしている。	・総合学習で地域の歴史を調べたり、聞きとり調査等を誰に頼んだらよいかわからなかったが、ボランティアがすぐに見つかった、生徒も地域の人の生の声を聞き、地域の事がよく理解できた。 ・地域住民と生徒の交流により、地域住民が生徒からパワーをもらい、来年もまたボランティアができたと言ってもらえるようになった。	・学校とコーディネーター、ボランティアが一同に会し、打合せをする時間がとれない。
40	中学校	図書室	3 (月)	3	学支ボラ PTA役員	・教頭先生と連絡を取り、学校側の学校支援ボランティア依頼状況を確認する。 ・個々の依頼状況について学校側の担当と連絡を取り合い、具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打合せ時期等の段取りを決め、学校とボランティアの調整を行う。	・学校の花壇の整備をし、校地内の環境を整えた。	・先生方とじっくり話し合ったり打合せをしたりする時間がとれない。
41	中学校	公民館	2	4	PTA役員 地域各種団体役員	・学校側の学校支援ボランティア依頼状況を確認する。依頼状況について学校の担当と連携を取り合い具体的な要望、ボランティアの確保、学校とボランティアの調整を行う。	・校長、教頭を頂点に学校全体に支援要請の仕組みが理解され、総合的に学習支援の要請がスムーズに実行されている。 ・ボランティアの方々も得意分野での活動支援が生かされ喜んでもらえた。ボランティアの方々の生き生きとした姿が見られた。 ・活動支援後も交流を深め情報交換ができた。	・学校側の考え方、要望の取りまとめ ・年度初めに計画できるものは事前に把握する。
42	小学校	研修室又は自宅	3	3	学支ボラ PTA役員 地域各種団体役員	・ボランティアの内容や人数など教頭より依頼があった時に、直接声かけをしたり、学年委員さんを通して、探してもらったりしている。 ・まめに学校へも顔を出し、校長・教頭・教務主任などと話す時間を作っている。	・年々児童数が減少し、職員も減っているので、引率などの面で協力できてよかったと思う。 ・地域の方と児童がふれあえる行事なども企画されて、楽しかったと言ってもらえた。	・今後も連絡を取り合いながら、要望にそえるよう頑張りたい。 ・養成講座や担当者会議など、行事の多い時期(9月・10月)は仕事との調整が難しいので、日程に配慮がほしい。(無理だと思いますが)
43	小学校	小学校	5	40 ～ 50 分	地域各種団体役員	・学校側からボランティア依頼状況を確認し、個々の依頼状況について学校側の担当者と連絡を取り合い、具体的な要望を聞き、該当するボランティアと打合せ、学校とボランティアとの調整を行う。	・子どもと顔が一致しないが、子ども達が気軽に声をかけてくる。 ・地域の行事にも子どもの参加が増えてきた。	・現在のところ、学校側とコーディネーターと連絡が十分とれている。 ・他校(地域)の活動の様子が知りたい。
44	中学校	中学校	現在は用事がある時顔を出す程度		PTA役員	・地域教育協議会の会議に参加し、学校側の学校支援ボランティア依頼状況を報告し、地域としてどうかかわって頂くかなどを依頼する。	未だなし	・コーディネーターとして、用事がある時だけでなく時間を決めて毎週何回とか行く必要があると思います。先生とのコミュニケーションのためにも12月から実施したい。
45	小学校 中学校	小学校 中学校	3	2 ～ 3	学支ボラ		・先生方の仕事の負担が少しでも軽くなっている。 ・学校の生徒とふれあう事で元気になる。	・まだまだ理解が少ない。 ・現場同士の情報交換をしてほしい。
46	中学校				PTA 役員 NPO、ボランティア			・先生方にまだ事業の内容が伝わっていないようで、特に目立ったアクションがない。これといった要望がないので、とりあえず単発のボランティアや研修の企画をする程度。自分が何もしていないというあせりが出ます。 ・この事業の前からいくつかのボランティアが学校内(読み聞かせ)、地域(防犯)で存在しているので改めてやることはそれほど多くない。
47	小学校	PTA 活動室	3	4	学支ボラ PTA 役員	・学校側の担当と連絡を取り合い具体的な要望を把握し、該当するボランティアの募集とその後の段取りを決め、学校とボランティアの調整を行う。その他随時学校側からの要望で調整を行うこともある。	・教職員がボランティアの連絡調整に費やされていた時間を他の業務に専念できるようになった。 ・図書の整備等に費やされていた時間が減り、教材研究や子ども達と向き合う時間が増えた。 ・ボランティアが学校に入ること、学校の様子がわかり、学校に来やすくなった。また、子ども達と顔見知りになることで、学校外での交流も増えてきた。	・担当の先生との打合せ可能な時間の確保 ・他地域のコーディネーターとの情報交換の場を設定してもらうことと、他県での情報提供もお願いしたい。

							・ボランティアがよりよい活動を目指して自主的に研修しようとする意識が向上した。 ・PTA 活動室や職員室にコーディネーターの席が確保してあるので、先生や保護者との連絡が取りやすい。	
48	小学校	相談室	3	4	PTA 役員 地域各種団体役員 放課後子ども教室 安全管理員	・月・水・金の週 3 日学校にいる時に先生方から支援依頼を受けボランティア募集の準備（依頼の詳細、各担当の先生と確認、手紙を作成し配布）※不足の時は直接電話でボランティアを依頼 ・図書ボランティア、部活動支援から初めて、PTA の方のボランティアの参加が増えてきました。 ・地域全戸（1300 戸程度）にリーフレットを配布し、学校支援ボランティアを理解し、参加していただくために声をかけさせていただいています。老人クラブや地域健康推進委員の方々他各団体へ協力を依頼して宣伝しました。（公民館に人材バンク申請書設置予定）	・漢字練習プリント、算数丸つけボランティア（毎日）の依頼を受けた時は不安な様子でしたが、先生より子ども達が上達していく話を聞いて支援を依頼してよかったと思います。 ・地域の方の熱心さが伝わり子ども達にいろいろな事を教えていただき、世代間とのつながりになっていると思われます。 ・学校で子ども達が元気に学んでいる様子が感じられることが一番です。たくさん子ども達が向上しているように見受けられます。	・学校のニーズにあい、また保護者（PTA 他）とののかかわりの中で必要な事は取り入れられるように努力したいと考えます。 ・学校活動にあたり必要な支援はこれからも続く子どもたちの成長にもつながっていくと思います。 ・現在 PTA の方の学校支援が盛んで助かっています。より地域の方とののかかわりを加えるとよい活動になり、子ども達の笑顔にもつなげていけるのではないかと考えています。
49	小学校	相談室	3	4	学支ボラ 放課後子ども教室 安全管理員	・月・水・金の週 3 日学校にいるので、先生方が依頼書を書いて持ってきます。（主に校長・教頭からが多い） ・依頼内容の詳細を各担当の先生と確認をとりながら、ボランティア募集の手紙を作成し配布します。（少数の時は手紙は省略し直接依頼） ・応募があればそれを集計し、不足の場合直接電話で依頼。 ・ボランティアと先生の打合せ（前日までか当日）について相談。	・漢字練習のノートの丸つけボランティアが毎日入るようになり、ていねいに書くようになった。先生が丸つけをするのにかかる時間も指導にあてられるようになった。漢字テストの点数もよくなったとの話を聞きました。 ・郷土料理の指導をして下さる方々は、子ども達のおばあちゃん世代の方ばかり。家庭科に入っていたいた時「とても楽しかった」と喜んで、その後放課後子ども教室にも指導に来て下さいました。校外で会っても、あいさつをしたり話をしたりしているようです。 ・丸つけなどは、個人情報を守る意味でも、その学年以外の保護者で行っています。そうすると、いろいろな学年の保護者が集まるので、情報交換の場にもなっているようです。低学年の保護者の方が高学年の方に「こういう時はどうしました？」など相談できて助かっています。	・校長先生や教頭先生との連絡はとれているが、ボランティアが入る各学年（クラス）の担当の先生との話し合う時間がなかなかとれない。 ・大きなところでは、3 年後の予算がなくなったら、現在の体制が続けられるのか？という点。小さいところでは物品の依頼をしてもなかなか届かない点。（パソコンは届いてもプリンターがまだ・・・等も。） ・ボランティアに対する注意点（個人情報問題など）をどうするか、文面にするにも悩むところです。
50	中学校	PTA 活動室	4	2 ～ 3	PTA 役員		・土曜学習会、パソコン教室を企画、開催。 ・事業が立ち上がり間がないので成果はまだ見られない。	・学校支援地域本部事業の内容を、先生方に理解していただくための話合いの時間がとれない。 ・事業が軌道にのるまで、学校側への指導、説明が必要。 ・学習支援のためのボランティアを募集することが大変難しい。
51	中学校	PTA 活動室	4	2 ～ 3	学支ボラ PTA 役員	同上	同上	同上
52	中学校	PTA ボランティア室	1	4	地域各種団体役員	・学校へ事業の依頼・周知、地域へチラシ配布・周知、PTA への協力依頼ボランティアの募集、事業実施	・担当地区内 3 校中 1 校のみでしたが、推進活動の成果もあり他の 2 校も学校支援に取り組みたいと返事をいただきました。 ・「読み聞かせ」も取り入れたいと思ひ、読み聞かせ講習会の案内をしたら多数の参加者がありました。	・学校支援について理解できない学校・教職員があり、行政やコーディネーターが入り込めないような感じもあったりするので、県側として理解される説明が必要だと思います。 ・組織として活動できるまでは、行政からの予算も必要だと思います。せっかく組織ができかけた以前の体験活動ボランティア活動のように予算打ち切りになれば、崩れてしまいます。 ・コーディネーターとして常に従事できる方ばかりならよいと思いますが、組織に対してコーディネーター数が少ないと思います。
53	中学校	ボランティアルーム	3	4	PTA 役員	・学校支援地域本部事業の紹介・学校支援ボランティア募集のチラシを作成し町内全戸に配布。 ・学校側の学校支援ボランティア依頼状況について、学校の担当者と連絡を取り合い具体的な要望を把握し、学校とボランティアの調整を行う。	・図書が整理され、見やすく、利用しやすくなった。	・ボランティアがなかなか集まらない。
54	中学校	PTA ボランティア室	2,3	4	PTA 役員	・地域に学校支援ボランティアのお知らせと、募集をした。学校にも学校支援ボランティアのお知らせをし、ボランティアの依頼をお願いした。 ・教頭から依頼を受けた後、ボランティアを一人ずつ依頼し集め、教頭と時間、場所等を調整し実施した。	・学校の中に生徒と先生だけでなく、地域の大人が入っていき子どもにも地域の大人のかかわりが感じられたのではないかと。 ・何かやりたいと思っている人の役に立つことができた。	・先生とのコミュニケーションの時間がなかなかとれない。 ・広報活動をしてほしい ・予算の確保 ・先生も地域の方も、まだ様子見のように感じられる。 ・一人のコーディネーターで 4 校担当はつらい。
55	小学校	PTA 会議室	2 ～ 3	4	PTA 役員 NPO 、ボランティア		・担当教師の図書の台帳記帳、PC 入力にかかわる日数を考えると、授業準備に費やしてもらうことが、先生自身の余裕と生徒への学力成果になったと思う。 ・丸付けは児童が楽しくボランティアの方と接する事ができた点、効率よく丸付けすることで、問題を解け	・学校からの依頼を一方的に地域に投げかけて募集する活動だけではなく、本事業の本来の目的に沿うよう地域の実態や要望、ボランティアを希望する方々との交流を図りながら、町独自の活動内容を考えていく必要性を切に感じる。 ・インターネットの接続は認められ

							ない児童に担任が時間をかけて教えることができる点が、学力向上につながった。 ・下校見守り活動の地域への依頼に、学区内町会長、民生委員の協力を得たこと。	ないと説明されたが、文書をメールで送信しなければならないものが多く、調べ物も自宅でしたりと大変不便である。 ・学習支援ボランティアの場合、教職経験者あるいは教育学部の大学生、保護者には依頼しないなどある程度の取り決めがあった方がよいのか、誰にでもボランティアしてもらえるように呼びかけるべきかはっきりさせる必要がある。
56	小学校	職員室	3	4	学支ボラ	・小学校の教頭先生と連絡を取り日程を組んでいる。	・学校側で気になっている設備や木の剪定等、専門家に依頼すると高額になってしまうところを、ボランティアが修繕できる範囲で直すことで子ども達も安全で職員にも喜ばれた。	
57	小学校	野球部	5	3 ～ 4	その他	・コーディネーターとしての活動内容と時間等を教頭先生と直接会って連絡したり、相談したり、地域の研修等にも参加しています。	・私の活動は野球部支援ですが、その他の父兄の方々の協力もあり、部活動として、小さい大会ではありますが優勝することができました。協力し合いチーム一丸となり努力をすれば優勝できるという喜びを子ども達は知った。	・学校との細かい連絡や協力を密にすること。
58	小学校	職員室	5	4	PTA 役員	・先生方へ今後の授業計画の中でボランティアを必要とする場面などを、アンケート方式で提出してもらい、それに伴ってボランティアの調整や各種団体への交渉など行う。	・校外学習にボランティアが入り、担当教員が安心して児童と学習することができた。 ・家庭科でボランティアの方々が支援に入り、ミシンの使い方を効率的に指導でき児童達の技能も向上した。 ・ボランティアの方々が子ども達と接するようになり、地域での声かけが無理なくできるようになった。	・常に先生方と接し、対話して自ら活動の場を模索し、ボランティアの方々が活動しやすい環境づくりに心がけたい。 ・他のコーディネーターの活動の様子をもっと知りたいので定期的に情報交換の場を設けて欲しい。
59	中学校		4	3 ～ 4	元教員	・定期的な地域教育協議会の開催を働きかけ、学校側のボランティア依頼状況を確認する。 ・地域の各種団体と連絡を取り合い、ボランティア募集とボランティアバンクづくりに向けて準備をすすめている。 ・保護者、地域の方々の多くが専門分野を生かしてボランティアとして学校の部活動を支援できるように調整を行う。	・今始まったばかりなのであまり成果は上がっていないが、教員の部活動に費やす時間が軽減される。各運動の指導方法をボランティアの方から教師、生徒とともに学ぶことができ、競技力が向上する。 ・地域の方々の学校への出入りが多くなり、先生方や生徒との交流の機会が多くなり、地域の方々が学校の状況を知る機会が多くなった。	・まだ人材確保の段階です。
60	小学校	職員室	2	2	保育士	・学校側の担当と連絡を取り合い具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打合せ時期等の段取りを決め、学校とボランティアの調整を行う。		・先生方と打合せをする時間を多く設け、活動に役立てたいです。 ・コーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。
61	小学校	職員室	3	3	製造販売	・学校支援地域本部事業の実施に向け、学校支援ボランティア募集とバンクづくりに向け、チラシを作成し、配布しました。		・先生方の仕事が多いため、話合いの機会がなかなかとれないし、学校側からの依頼がないのでなかなか仕事が進まない気がします。 ・コーディネーター同士の情報交換の場を設けてほしい。
62	小学校	職員室	4	4	学支ボラ PTA 役員 地域各種団体役員	・学校側の学校支援ボランティア依頼状況を確認する。学校側の担当と連絡を取り具体的な要望を把握し、該当するボランティアと打合せ、時期・内容の確認をして、学校とボランティアの調整を行う。また各種ボランティア募集のチラシを作成し、広く参加希望者を募り人材リストを作成する。 ・地域の各種団体、老人クラブ等の情報を聞き、本事業へ協力依頼や参加を呼びかけている。	・校外学習、体力テストは合計 15 名の学習ボランティアの方々に支援をしていただいた。事前に学習内容を説明し、理解してもらってからだったので、連携がスムーズに行えた。 ・世代交流に地域の老人クラブをはじめたくさんの高齢者の方々に参加していただき、子ども達とボランティアの方々と和気あいあいとした関係を築くことができた。また、子ども達が昔遊びやなわなひを教えてもらい、ボランティアの方々に対して尊敬や思いやりの気持ちをもってくれて、お互い得るものが大きかった。 ・発足して 2 ケ月あまりですが、学校支援ボランティアの登録が 100 名を超え、除々にではあるが学校支援地域本部やコーディネーターの必要性を理解してもらえるようになったと思う。	・学校のニーズ以上に、学校支援ボランティアに興味がある人が地域にたくさんいるので、それをどのように教職員や学校関係者と話し合い、調整していったらいいか模索中です。 ・学校支援ボランティアの研修会・交流会の場を設けてほしい。 ・来年度は学習支援ボランティアを増やして、新しい効果的な学習支援ができれば子ども達も授業が楽しくなるのではないかと。そのために教職員としっかりした連携・情報交換をしていきたい。

(4) コーディネーターに関する調査結果について

[栃木県]

①学校種

回答のあった95校のうち小学校が55校となっており、半数程度が小学校で活動するコーディネーターとなっている。あとは中学校（区）で活動するコーディネーターである。教育委員会等に配置されているコーディネーターはいなかった。

②活動拠点

活動拠点としては、会議室(16件)、PTA室(15件)、地域活動室(10件)となっており、半数近くが会議室やPTA・地域活動室が充てられていることがわかる。その他、校内の家庭科等の準備室や司書室が充てられているケースもみられる。中には校長室(7件)というケースもみられる。校外にあるものとしては、公民館が最も多く、教育委員会事務局や社会教育施設が拠点となっている事例(12件)も見られた。全体の傾向としては、各地域や学校の状況によって活動拠点が柔軟に設置されていることがわかる。活動拠点が公民館や教育委員会でも、基本的には特定の学校のコーディネーターとして配置されている。

③活動日数・時間

活動日数の平均値は1.7日で、1回当たり2.9時間となっている。少ない事例としては、月に1回、2時間、多い例として、週5日で7時間であるが、この例は他の業務（地域団体事務）と兼務で行われているため、コーディネーションのための時間が区分されていないためである。あとは「必要に応じて」「不定期」という回答(12.6%)があり、未回答が1割程度あった。このことは、定期的に活動していないコーディネーターが2割程度存在する可能性を示唆している。傾向として小学校は週3日以上活動しているコーディネーターが約20%存在しているのに対し、中学校(区)では3%であり、小学校の方が定期的な活動日数が多くっており、中学校では必要に応じた不定期の活動が多くなっている。

④コーディネーターの前職と経験(複数回答)

PTA役員(70%)、地域役員(33%)、ボランティア(30%)とPTA役員経験者(現職を含む)が圧倒的に多くなっている。次いで元教員(8%)となっている。

⑤コーディネート活動の概要

多様に記載してある文章を精査すると、概ね次のような傾向が浮かび上がってきた。活動の中心は、「連絡調整・打合せ」(30件)が最も多く、次いで「地域協議会に参加し、ニーズの掘り起こしを図っている」(27件)であり、この他に、「学校の依頼によりボランティアに連絡をする」「学校側と定期的な打合せを持っている」「生涯学習課職員からの依頼を受けて調整した」この他に「人材情報収集・人材バンク作成」(12件)があり、ボランティア情報の収集に努めていることがわかる。ボランティアの募集方法としては、広報活動が多く、チラシ、広報紙の作成、回覧板、ポスターの作成といった活動が多く記載されていた。少数ではあったが、活動希望者に対する説明会や研修事業の記載が見られたが、全体としては少ない。さらに活動後の反省や感想をまとめたりといった、ふりかえり・反省に関する活動はほとんど見られなかった。コーディネート活動の中にこうした反省やふりかえりがまだ十分に位置づけられていないことがわかる。

栃木県のコーディネート活動は、スタートしたばかりの模索時期であり、ボランティアの募集や学校との連絡調整に大きなエネルギーが注がれている。その中でコーディネーターを支えているのが、地域協議会と学校であることがわかる。したがって、人材養成や研修、他校のコーディネーターとの情報交換、ふりかえりといった活動にまで行き届いていないことがわかる。今後は、清原南小学校で行われているようなボランティア同士の茶話会といったふりかえりや、ボランティア同志の交流が必要となっていることが示唆される。

⑥コーディネーションの成果

回答は、「教育活動の充実」「子どもの学習活動の充実」「子どもの変化」「防犯・安全活動の充実」などコーディネーションそのものの成果よりも学校の教育活動の充実など、学校支援ボランティアの導入の成果が記載されているものが圧倒的に多かった。

地域コーディネーターの活動によって、学校支援ボランティアの活動が充実していることから、広い意味でのコーディネーションの効果としても考えられる。こうした成果の蓄積によって、学校が十分に機能するためには、地域住民による様々な支援活動が不可欠なものとして認識されるようになることが大きな成果である。

その中でコーディネーションの成果としては、「教員の負担軽減」(11件)「連絡調整がスムーズになった」(4件)「行事の調整が円滑になった」(3件)「地域の協力が得られやすくなった」(4件)など目に付いた。他に、「ボランティアに参加する団体に広がり生まれた」「ニーズに適合したボランティアの発掘ができた」「教師への理解が深まった」「地域と学校の情報の共有が円滑になった」「地域の教育力が向上した」があげられていた。

すなわち、コーディネーターの配置によって、大きくは教員がこれまで自ら行っていたコーディネーションを代替し、負担軽減につながっていることがわかる。コーディネーションの成果の中で注目されるのが、教員や学校に対する成果だけでなく、若干ではあるが、地域に目が向きつつあることがわかる。今回の調査では、この項目に未記入が多く(29件)前述したように活動開始直後であったため、コーディネーター自身が十分にその成果を把握し切れていないことがわかる。

⑦課題

圧倒的に多かったのが「コーディネーター同士による情報交換」(16件)で、次いで「学校教員の理解不足」(13件)、「教員との打合せ時間の確保」(13件)、「ボランティアの人材確保」(10件)、「連絡調整の時間確保」(6件)「予算の執行」(6件)「ボランティアに対する説明や研修機会の確保」(5件)

「コーディネーターの仕事の役割分担の明確化」(5件)などがあつた。この他に「コーディネーターが地域に理解されていない」「ボランティアマニュアルが必要だ」「各団体との連絡調整が困難である」「学校との情報共有が困難である・窓口の明確化」「行政の協力が必要だ」などがあげられている。

活動開始直後であることから、コーディネーターが具体的に何をすべきなのかが明確になっておらず、そのため、コーディネーター同士の情報交流のニーズが高くなっている。さらに学校との関係で大きな課題が残っていることがわかる。学校側の体制整備やコーディネーターとのコミュニケーションを十分にとる必要があることがわかる。同時に人材供給源としてPTAなどの組織的な支援が必要であることも浮かび上がってくる。栃木県の場合、課題の中心は学校や教員、ボランティアといった内部に向かっている。活動の初期の段階であることがわかる。

[青森県]

①学校種

回答のあつた62名のうち、小学校が35件、中学校が18件、各学校に配置されるのではなく、教育委員会、地域協力推進協議会、地区ごとの支援本部など直接学校所属ではないコーディネーターが9件となっている。教育委員会等に配置されているコーディネーターは、必要に応じて、複数の学校に向いて活動している。

②活動拠点

最も多かった回答は「学校」(15件)で校内のどの部屋かについては不明である。次いで「公民館」(11件)、PTA室(6件)、職員室、図書室(各5件)、教育委員会(4件)となっている。総じて学校外が32%で、栃木県の2倍となっている。これは、コーディネーターを単一の学校に配置するよりも広域的に

活動させる意図がみられことがわかる。

③活動日数・時間

平均活動日数は2.8日、1回当たりの活動時間は3.7時間となっている。栃木県とくべて活動日数、時間共に多くなっている。栃木県では週一日、1回3時間が最も多かったが、青森県では、週三日、1回4時間が最も多くなっている。総体としてコーディネートの量が多くなっている、あるいは複数校を担当していることによるものと推察される。少ない例としては月2回、活動時間は2時間、多い例としては、週五日8時間となっており、小学校にほぼ常勤している状況であり、他の業務も兼務しているケースである。栃木県に比べて不定期・未回答が4件と極端に少なく、活動内容がほぼ明確化され、定期的な活動として定着していることが推察される。活動内容を模索している段階ではないと考えることができる。

④コーディネーターの前職と経験(複数回答)

PTA役員(53%)、地域役員(27%)、ボランティア(27%)であり、PTA役員経験者(現職を含む)が半数以上になっている。次いで元教員(10%)、NP0(10%)となっている。栃木県とほぼ同様の傾向を示しているが、NP0関係者がコーディネーターとなっていることや、その他の割合が多く、保育士、製造販売業、社会教育主事、臨時講師など栃木県と比べて多様である。青森県は栃木県に比べてコーディネーターの人材をPTA等の内部関係者に求めるよりも広く地域、民間団体に求めようとしている点が特徴となっている。

このことは、青森県では日頃、PTA以外の地域住民が何らかの形で学校に関与していることを伺わせる。

⑤コーディネート活動の概要

多様に記載してある文章を精査すると、概ね次のような傾向が浮かび上がってきた。活動の中心は、「連絡調整・打合せ」(35件)、「ボランティアの依頼状況の確認」(35件)の2点が最も多く、次いで「チラシづくりなどの広報活動」(25件)、「ボランティアの募集・協力依頼」(16件)となっている。この他に特徴的な活動としては、教員に対するアンケートなどの「ボランティアニーズの把握」(4件)があり、学校からのニーズがなくてもコーディネーターが活動の場を探し、学校側に提案するなどの活動を展開している。

ところで、回答の多かった「連絡調整・打合せ」の内容をみていくと、校長、教頭、教務主任、窓口職員との連絡・調整が記載されており、青森県では学校の窓口が明確化していることが推察される。「チラシづくりなどの広報活動」の内容をみていくと、リーフレットの作成配布や、教育委員会や学校に出向き、事業説明と協力活用を教職員にアピールするなどの具体的な活動を展開している。「ボランティアの募集・協力依頼」の内容については、老人クラブや社会福祉協議会、地域健康推進委員会などに直接出向き、協力依頼をし、情報交換をしている。その他に特徴的な活動として、コーディネーターは、単に仲介するだけでなく、ボランティアの活動に同行し、活動を見守ることの他に記録写真の撮影などを行っている。また活動後もボランティアと学校の両方から話を聴き、次回につなげるふりかえりを行っている事例も見られている。青森県の場合、栃木県と異なり、活動内容が明確化され、学校側の窓口も確定し、活動がシステムティックに機能している可能性が高い。学校の受入態勢も整備されていることが伺える。これは青森県教育委員会が、毎年教員を対象とした大規模な研修事業を継続的に実施している効果ともみることができる。

⑥コーディネーションの成果

回答は、栃木県と同様に「教育活動の充実」「子どもの学習活動の充実」「子どもの変化」などコーディネーションそのものの成果よりも学校の教育活動の充実など、学校支援ボランティアの導入の成果が記載されているものが圧倒的に多かった。

その中でコーディネーションの成果としては、「教員の負担軽減」(16件)「ボランティア活動への

関心が高まった」(8件)「ボランティア自身がやりがいや楽しみとなった」(7件)「連絡調整がスムーズになった」(4件)「地域の協力が得られやすくなった」(5件)などがあげられている。他に、「子どもを地域で育てる意識が形成された」「コーディネーターが地域に周知された」「学校と地域の協働が進んだ」「住民同士の交流を図ることができた」「子どもが地域に関心を示すようになった」「地域の行事に子どもが参加するようになった」「ボランティアの意思や希望を生かした活動ができた」などが記載されていた。

栃木県に比べても効果の視点が、学校や教員だけでなく、ボランティアや地域に向いていることが特徴となっている。

⑦課題

圧倒的に多かったのは「教員との打合せ時間の確保」(19件)であった。次いで「コーディネーター同士による情報交換」(15件)で、「ボランティアの人材確保」(11件)、「学校教員の理解不足」(8件)、「予算の執行」(8件)、「広報活動」(5件)、「学校のニーズの把握」(4件)が目立っている。栃木県と比べてみると、「教員との打合せ」や「広報」などにより実践的な問題点に課題意識が向いていることがわかる。それらのほかに「教育委員会と学校との連携」「コーディネーター研修の改善や充実」「人材バンクではなくプログラムバンクが必要だ」「地域の特性を生かしていきたい」「地域の現状把握をしていく必要がある」「地域の人々の参加を促進する」「学校と地域の両方にコーディネーターがいるとよい」「もっと活動の量を増やしていく必要がある」「地域への周知が必要だ」「コーディネーターの人数を増やしてほしい」「ボランティアの研修と交流が必要だ」などがあげられている。

これらをみると、栃木県のコーディネーターの課題が学校や教員との関係に集約されているのに対して、青森県では、地域社会やボランティアへの眼差しが中心となっており、学校支援から地域づくりに目が移りつつあることが顕著にみることができる。

(5)まとめと考察

学校支援地域本部事業の初年度ということもあり、両県ともスタートしたばかりではあり、模索の段階である。

①コーディネート活動をみていくと、青森県はコーディネーターが求めに応じて支援するのではなく、率先して活動の場を開発し、アクティブにコーディネート活動を展開していることがわかる。それに対して栃木県では地域協議会への参加や人材バンクなど、推進体制や活動基盤の整備にエネルギーが注がれていることがわかる。

②学校の受入態勢であるが、両県とも教員の理解が不十分であることがわかる。これに対して青森県では、夏季に集中的に学校と地域の連携に関する教員研修を県生涯学習課が主催して、継続的に教員理解を促進しており、栃木県では教員が社会教育主義講習を受講する中で、教員の理解を促進する施策を進めている。

③両県とも模索の段階であることは、例えば、課題として「コーディネーター同士による情報交換」に強いニーズがあることからわかる。しかし、現実のコーディネーター研修では延々と事業の趣旨説明が行われるか、講演会形式の研修が圧倒的に多くなっている。こうしたニーズを踏まえて研修の内容を再検討していく必要がある。

④成果や課題で注目されるのが、コーディネーターが次第に地域住民やボランティアに眼差しが向かっていることである。活動当初は教員とコミュニケーションを充実することによって様々な課題は解決される。しかし、ボランティア活動をする人材の供給源は地域であり、学校や教育活動に協力的な地域の教育的風土が、コーディネーターの課題を解決することに気がつく。そのことは、青森県のデータでも顕著に現れている。

両県とも成果の中に地域の教育力の向上や「地域」というキーワードが頻出している。学校を支援するためのボランティアをサポートする地域コーディネーターにとって、最も重要な課題が地域の教育的風土の形成、地域の連帯感の形成、まちづくりにあることがこの調査から明らかになっている。こうした地域コーディネーターは地域の学び会やコミュニティの形成に貢献し、そのことが学校支援ボランティア推進上の課題を解決するのである。

IV 提言

これまでも学校支援ボランティアは全国で広く展開されてきた活動である。これらをコーディネートしてきたのは、多様な存在である。教育委員会は制度ととして「まちの先生」や「人材バンク」、「ボランティア保険」「ボランティア研修会」などのしくみや事業を整えてきた。狭山市や八戸市に見られるように市が独自に学校支援ボランティアセンターを設置する動きも見られている。同時に横浜市や三鷹市など都市部では民間団体による学校支援ボランティアコーディネーション組織が活動するようになった。

しかし、現実のほとんどは学校現場の教員がそのコーディネートを担当してきた。ボランティアで来てもらえる地域住民を探し出し、交渉し、打合せをし、授業を行っていたのである。教員の意識はどれほど改革されようとも、このような時間を生み出すことは現在の学校では困難であることは自明のことである。平成 17 年度に調査した「学校支援ボランティアに関する調査研究」によれば、教員は、学校支援ボランティアの受入れの充実のために必要な条件として、「学校支援ボランティアとのコミュニケーションの場や手段」と「コーディネーターの配置」が多くあげられている。「コミュニケーションの場や手段」は、コーディネーターの配置によって解決する課題である。

平成 20 年度から開始された「学校支援地域本部事業」は、こうした期待に応える施策として、大きな役割を担っている。コーディネーターの配置に予算措置がなされたことによって、飛躍的に学校支援ボランティアは進展するものと考えられる。

そこで今年度の調査報告にあたっては、コーディネーションの在り方と学校の受け入れ基盤整備の 2 点について具体的な方策について提言することとしたい。

本調査での結果と分析・考察から、次の点について提言しておくこととしたい。

1 コーディネーションの在り方

(1) コーディネーターよりもコーディネーショングループへ

学校支援地域本部事業では概ね複数の地域コーディネーターが配置されているが、地域コーディネーションの具体的な活動を聴き取っていくと、コーディネーターだけでなく、窓口となる教頭・副校長や担当教員、地域協議会のメンバーなどの関係者とのコミュニケーションによって、コーディネートされていることがわかっている。そこで、コーディネーションはコーディネーターが中核となって進めるとしても、それらを組織的に支援するしくみを整備する必要がある。例えば窓口となる担当教員（社会教育主事有資格者が望ましい）、地域協議会役員、PTA 役員など 5 ～ 6 名によって構成されるコーディネーショングループを組織し、コーディネーターの必要に応じて招集し、打合せができるような体制整備をしていく必要がある。

(2) 人材バンクよりも活動バンクへ

ボランティアを募集し、人材バンクを整えようとする傾向が未だに存在するが、現実には機能している事例は少ない。人材バンクは実際にはコーディネーターの頭の中に存在し、タイムリーに情報を引き出している。むしろ必要なのは、実際に活動をどのように展開したのかという記録が必要なのである。こうした記録をバンクにした事例としては、栃木県鹿沼市の国際理解教育を支援する「グローバルグループ」がコーディネートした記録を冊子にした「鹿沼市国際理解教育支援ボランティアプログラム集」（平成 11 年以降毎年発行）、グローバルグループが編集・執筆し、鹿沼市が発行し、各学校・社会教育施設に配布されている。このように実際に使用されるのは、活動記録を蓄積し、バンク化していくことの方が合理的であると考えることができる。いわば人材バンクではなく、活動記録バンクに転換していくことが実効性が高いものと思われる。

(3) 人材発掘よりもまちづくり参画へ

ボランティアとして活動する人材を探すことは、コーディネーターの工夫が生かされるところである。そこで「あおば学校支援ネットワーク」にみられるようなまちづくりの活動にかかわっていくことによってこうした課題は一挙に解決されと考えられる。まちづくりの活動は、様々な知識や技術を身に付けた人々がそれらを生かしている現場そのものである。

そこで人を知り、情報を得て、学校で何ができるのかに思いを巡らせることができる。コーディネーターは、地域のまちづくり事業に参加したり、各種団体の会合に出かけて説明をしたりといった地域の団体とのコミュニケーションを積極的に持つことが必要である。

(4) 学校ニーズ対応型活動よりもボランティア提案型活動へ

教員は確かに多忙感を感じているし、地域社会の学校に対する期待感の高まりは同時に教員からゆとりを奪っていることも事実である。しかし、不思議なことにこれほど多忙であるにもかかわらず、学校支援ボランティアに対するニーズがそれほど多くはない。

その原因として考えられるのは、一つには教員自体がそもそも恒常的に独力で教材開発し、教材を作成し、実践するという、自分以外の誰かの支援を受けて仕事をする経験が少ないという要因がある。つまり具体的に何を支援してもらったらいいのか、考えたこともないのである。二つ目には教員自身の教育方針や教育計画に対する強い責任感と、その裏返し「介入」、「口出し」されることに対する抵抗感がある。三つ目にはボランティアの活動を教員自らが考え、説明し、確認するなどによって、多忙感に拍車がかかるのではないかという疑念が残ることである。

そこで、コーディネーターはボランティアとともにまず自分たちが何ができそうなのかを共に考えて、学校に提案するという方法を選択すべきではないだろうか。そのためには、学校は教員の仕事や学校の施設設備、教育活動の多くを公開し、活動内容をボランティアが提案する素材を提供する必要がある。当然、学校からのニーズがあればそれに応えるべきではあるが、それだけではなく、ニーズを掘り起こす視点で活動内容を提案するコーディネートが必要となる。

(5) 一斉講義型研修よりも情報交流型研修、茶話会型ふりかえりへ

学校支援ボランティアの活動の質を高め、豊かで充実した活動とするためには、各学校で孤立せずに、コーディネーターは、宇都宮市立清原南小学校で実施しているようなボランティアのふりかえりのための茶話会や情報交換の場を持つことが必要である。アンケートやふりかえりカードでは出てこない気付きや新しい提案は、ボランティア経験者同士の交流の中

から生まれてくる。同様に行政ではコーディネーターの情報交換の場を設定する必要がある。事例発表やグループ討議、近隣の学校同士でのボランティア人材情報の交換など単独ではなし得ない行政の役割を果たしていく必要がある。その際は一斉講義も必要であるが、情報交流型の研修の方が実効性が高い。

2 学校の受け入れ基盤整備

(1)校務分掌での位置づけ

1の(1)にあるようなグループによるコーディネーションを可能とするために、学校支援ボランティアあるいは地域連携を校務分掌に位置づけることが必要である。学校の規模に合わせて窓口となる担当教員数を決めていくが、複数の教員で構成されることが望ましい。定期的な会合を行い、情報を共有することや通信などを発行して、校内の教職員に活動を周知することが大切である。

(2)校内研修の充実

学校支援ボランティアの受入れに当たっては、教員によって考え方が異なっており、「温度差」もあり、共通の理解に立つことは困難である。こうした課題を解決する方法としては校内研修を持つことが必要である。それも具体的な事例に基づく事例検討会やボランティアコーディネーターやボランティアを招いて、インタビュー形式の研修を行うなど工夫が必要である。学校支援ボランティアの重要性や意義について学ぶことも必要であるが、それらは経験を振り返ることによって理解されるものであり、何らかの説明や講義によって理解されるものではない。

(3)社会教育主事講習の受講

学校支援ボランティアの受入れ態勢の一つとして、担当教員が社会教育主事講習を受講することが大切である。宇都宮大学が実施する社会教育主事講習では、演習時に学校支援ボランティアの受入れ方法やボランティア養成研修、校内研修のプログラム立案、コーディネーションに関する資料作成など実践的な内容で進められていることから、できる限り多くの教員がこうした講習を受講して、校内での普及啓発に努める必要がある。

(4)社会教育主事有資格教員の活用

社会教育主事の資格を取得した教員の知識や研修成果を活用することが体制整備で最も重要である。講習では有資格教員がすぐに学校側の窓口として機能し得るような内容となっていることから、こうした人材を校務分掌上の担当者とするなどの活用の具体的な方策を検討する必要がある。

(5)学校業務の積極的公開

1の(4)にあるようなボランティア自身の提案型の活動を促進するためには、学校内の施設・設備、教員の様々な業務について、積極的に情報公開する必要がある。日頃、しなくてはならないと思っけていても手が着いていないような仕事や施設の簡単な補修などは、こうした情報の積極的な公開の中から解決の道を探ることができる。学校内の不十分な設備や教員が具体的にやっている「多忙」な現状をどのように理解してもらえるのか、その理解が新しい活動の提案のエネルギーとなると考えられる。

V 参考資料

1 団体アンケート調査票

地域と学校をむすぶコーディネーターに関する調査票

【A 組織】

① 団体について	名 称	[名称] [事務局] 住所 T E L				
	設置年	年	代表者		会員数	名
	目 的	※団体の目的や主な活動内容等を記入してください。				
② コーディネーターについて	人 数	名（男性 名 女性 名）			代表者名	
	年 齢	20 歳代（ 名）		30 歳代（ 名）		40 歳代（ 名）
	構 成	50 歳代（ 名）		60 歳代（ 名）		70 歳代（ 名）
	職 種	会社員（ 名） 自 営（ 名） 主婦（ 名） 教 員（ 名） その他（ 名）				
	経 歴	※経歴につきましては当てはまるものすべてに○をつけてください。 元 P T A 役員（ 名） 元会社員（ 名） 元教員（ 名） ボランティア（ 名） 教 員（ 名） その他（ 名）				
	主 経 歴	※コーディネーターになられた方々の主なきっかけを記入してください。				
	活 動 点					
活 動 の 場	（場） コーディネーターの部屋の有無 あり 校 常駐の有無 常駐 校					

【B コーディネーションの実際】

① 具体的な活動内容	※該当するものにすべて○をつけてください。	
	1 組織づくり 3 ボランティア活動の相談 5 学校のニーズの把握 7 連絡・調整 9 研修の企画（研修名 10 その他（	2 ボランティア情報の収集 4 ボランティアの募集 6 ボランティア情報の提供 8 ボランティア活動の広報紙づくり
② コーディネーションの動き	※学校や地域へのアプローチ、連絡調整などコーディネートの流れを図や文で具体的に記入してください。	

2 コーディネーターアンケート調査票

地域コーディネーターに関する調査票

【コーディネーターについて】

① 氏 名	
② 所属・職名	【連絡先】 住所 電話
③ 組織の概要	
④ 活動の拠点	
⑤ 活動日数と時間	
⑥ コーディネーターになる前の活動	※該当するもの全てに○をつけてください。 1 学校支援ボランティア 3 地域各種団体役員 () 5 元教員 2 PTA役員 4 NPO、ボランティア 6 その他 ()
⑦ コーディネーターになった経緯	
⑧ 研修歴	

【活動の実際】

① 具体的な活動内容	※該当するもの全てに○をつけてください。 1 コーディネーションに関わる体制づくり 3 ボランティア活動の相談 5 ボランティア情報の学校への提供 7 連絡・調整 9 打合せ・会議の企画や参加 10 研修の企画（研修名 11 その他 () 2 ボランティア情報の収集 4 ボランティアの募集 6 学校のニーズの把握 8 広報紙づくり
② 動き・現在の活動状況	※コーディネーターとして活動を推進する際、相談する相手の方に○をつけてください。 1 校長 4 社会教育主事有資格教員 6 ボランティアセンター 8 地域教育協議会のメンバー 9 その他 () 2 副校長（教頭） 5 市町村教育委員会職員（事業担当者） 7 社会福祉協議会 3 教務主任

③ ボランティアの活動内容	・これまでコーディネートした活動内容について教えてください。 ※11月30日現在の実数を記入します。 <table border="0"> <tr> <td>1 学習支援活動（各々の授業において、担当教員の補助として支援）</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>※主な支援内容（</td> <td>）</td> </tr> <tr> <td>2 読み聞かせなどの読書活動</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>3 部活動指導</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>4 環境整備（校内環境整備の支援）</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>5 登下校安全確保</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>6 特別活動支援（遠足・入学式等の支援）</td> <td>件</td> </tr> <tr> <td>7 その他（</td> <td>）</td> </tr> </table>		1 学習支援活動（各々の授業において、担当教員の補助として支援）	件	※主な支援内容（	）	2 読み聞かせなどの読書活動	件	3 部活動指導	件	4 環境整備（校内環境整備の支援）	件	5 登下校安全確保	件	6 特別活動支援（遠足・入学式等の支援）	件	7 その他（	）
1 学習支援活動（各々の授業において、担当教員の補助として支援）	件																	
※主な支援内容（	）																	
2 読み聞かせなどの読書活動	件																	
3 部活動指導	件																	
4 環境整備（校内環境整備の支援）	件																	
5 登下校安全確保	件																	
6 特別活動支援（遠足・入学式等の支援）	件																	
7 その他（	）																	
④ 行政の支援	※行政に期待することで該当するものに○をつけ、具体的に記入をしてください。 <table border="0"> <tr> <td>1 研修（内容</td> <td>）</td> </tr> <tr> <td>2 予算措置</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3 市町村教育委員会職員による情報提供・指導助言</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4 その他（</td> <td>）</td> </tr> </table>		1 研修（内容	）	2 予算措置		3 市町村教育委員会職員による情報提供・指導助言		4 その他（	）								
1 研修（内容	）																	
2 予算措置																		
3 市町村教育委員会職員による情報提供・指導助言																		
4 その他（	）																	
⑤ 活動上必要なこと	※該当するもの全てに○をつけてください。 <table border="0"> <tr> <td>1 「学校支援地域本部事業」の実施に関する情報</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2 活動校区内の人材・団体情報</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3 他の支援地域本部の活動状況についての情報</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4 研修の機会</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5 予算</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6 専用の活動の場</td> <td></td> </tr> <tr> <td>7 その他（</td> <td>）</td> </tr> </table>		1 「学校支援地域本部事業」の実施に関する情報		2 活動校区内の人材・団体情報		3 他の支援地域本部の活動状況についての情報		4 研修の機会		5 予算		6 専用の活動の場		7 その他（	）		
1 「学校支援地域本部事業」の実施に関する情報																		
2 活動校区内の人材・団体情報																		
3 他の支援地域本部の活動状況についての情報																		
4 研修の機会																		
5 予算																		
6 専用の活動の場																		
7 その他（	）																	
⑥ 成果と課題	成 果	[学校教育にかかわる成果] [地域のあり方にかかわる成果] [その他]																
	課 題	[学校とのかかわり] [行政の支援のあり方] [その他コーディネート活動]																

執 筆

- I 栃木県総合教育センター生涯学習部・廣瀬隆人
- II 栃木県総合教育センター生涯学習部
- III 栃木県総合教育センター生涯学習部・廣瀬隆人
- IV 廣瀬隆人

監 修・執 筆

宇都宮大学生涯学習教育研究センター教授 廣瀬 隆人

平成20年度

「地域と学校をむすぶコーディネーターに関する調査研究」報告書

発行 平成21年3月

栃木県総合教育センター生涯学習部

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町1070

TEL 028-665-7206 FAX 028-665-7219

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/cennter/>

宇都宮大学生涯学習教育研究センター

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350